松本市島立南栗·北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条里的遺構

聚急発掘調査報告書

1985·3 長野県中信土地改良事務所 松本市教育委員会

正誤表

〈誤〉 〈正〉

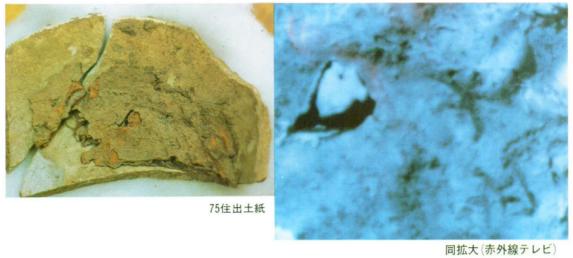
35頁 (図)19住 Ⅵ 💮 🗙 🗵

87頁 6行目 第57号住 第75号住

124頁 (スケール) 10cm 10m



南栗・北栗遺跡上空よりⅠ~Ⅳ地区



この遺跡は昭和58年度に着工しました県営ほ場整備事業島立地区にあり当初から、 埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。昨年に引き続き本年度も区画整 理工事の着手にあたり、県、市教育委員会の皆様と事前打合せにより、調査方法、調 査時期、費用負担等について再三御検討をいただき発掘調査による記録保存の方針を 決定しました。

調査の実施は松本市教育委員会より全面的に受託していただくことになりました。 その結果、奈良、平安時代の大集落跡又陶磁器、古銭、鉄器など数多くの出土品が発掘されました。島立地区の歴史を探るうえで貴重な資料となることと思います。

このように発掘調査が計画どおり完了できますことは、県、市教育委員会の適切な 御指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘にあたられた皆様の御尽力のたまもの と感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり6月より支障なく調査が出来ましたことは島立土地改良区 の役員、地元関係者の御協力と御理解によるものと深く感謝申し上げます。

昭和60年3月

長野県中信土地改良事務所長 丸 山 仁 志

島立南栗地区は以前から古い時代の遺物を出土するところとして知られておりました。昨年に続き本年も南栗遺跡周辺で県営ほ場整備が行なわれることになり、工事に先立って緊急発掘調査を実施し記録保存を行なうことになりました。この調査は中信土地改良事務所から市教育委員会に委託され地元の考古学研究者、市教委職員を中心に地区のみなさまの協力により実施されました。調査は南栗・北栗遺跡を6月初めから初秋の9月末まで行ない、更に、10月下旬から12月中旬まで高綱中学校遺跡、島立条里的遺構を発掘して多大な成果をおさめました。古墳時代から平安時代、中世までの住居址が数多く発見され、またこれらの住居址内から多数の土器、鉄器が出土しました。昨年の調査結果と合わせて見て奈良井川の段丘上には古代からかなり大きな集落が発達していたことがわかり貴重な遺跡だと思います。今後の地域の歴史解明にたいへん役にたつ資料になることでしょう。

今回の調査は記録保存を目的とする緊急発掘調査でしたが開発事業が多発している中で文化財のたいせつさと文化財保護の必要性を御理解いただければ幸いです。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、島立出張所のみなさま、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和60年3月

松本市教育委員会 教育長中島俊彦

例 言

- 1 本書は昭和59年6月1日より9月17日にかけて行なわれた、松本市島立、南栗、北栗遺跡、及び、10月22日より11月26日まで実施した、高綱中学校、島立条里的遺構の緊急発掘調査に関する報告書である。
- 2 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
- 3 本書の執筆は高桑俊雄が中心となって行ない、その分担は下記の通りである。

第1章 事務局

第2章 太田守夫、神沢昌二郎、高桑俊雄

第3章 第1節 高桑俊雄

第2節 三村竜一、山田真一、山下泰永、神沢昌二郎、高桑俊雄

第3節 山田真一、山下泰永、直井雅尚、高桑俊雄

第4節 高桑俊雄

第4章 山田真一、高桑俊雄

第5章 神沢昌二郎、高桑俊雄

第6章 神沢昌二郎

- 4 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
- 5 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

遺構図製図、トレース:伊那史彦、山田真一、山下泰永、面手勝仁、高桑俊雄、関沢聡 遺物復元、実測:山田真一、山下泰永、滝沢智恵子、(土器)、三村竜一、高桑俊雄、(金属器、 土製品、石器)

拓影:石合英子

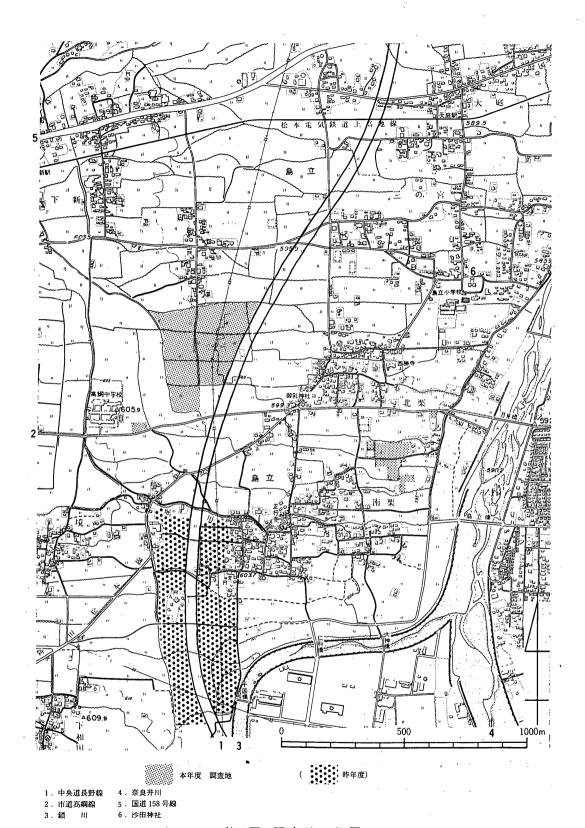
- 6 航空写真は新日本航空の御好意により提供して頂いた。
- 7 条里的遺構については小穴喜一、小穴芳実氏に現地指導をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 8 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。
- 9 各遺構・遺物の一覧表、観察表は各本文の後に掲載した。

目 次

第1章 į	周査経過						
第1節.	事業の経緯と文書記録						
第2節	調査体制						
第3節	6 作業日誌						
第2章	遺跡の環境				•		
第1節	調査地の位置11						
第2節	地形と地質11						
第3節	周辺遺跡21						
第3章 7	有栗·北栗遺跡						
第1節	調査の概要	••••			23		
第2節	遺構	••••		••••	23		
1	住居址						
1	第1・2・50号住居址	2	第3号住居址	3	第 4 号住居址		
4	第5号住居址	(5)	第 6 号住居址、土壙19	6	第7・8・9号住居址		
7	第10·11号住居址	8	第12号住居址	9	第13・14号住居址		
. 100	第15·53·55号住居址	11)	第16·17号住居址	12)	第18・19・20・21号住居址		
. 🔞	第22・23・24・25号住居址	14)	第26・(27)・28号住居址	15	第29号住居址		
(6)	第31·32号住居址	17)	第33·34号住居址	(18)	第35·36号住居址		
. (19	第37・38号住居址	20	第39·40号住居址	21	第41・42・54号住居址		
2	第43・44号住居址	23	第46・50号住居址	24	第47·48号住居址、竪13		
3	第49·57号住居址	26	第51·52号住居址	Ø	第58·59号住居址		
28	第60・61号住居址	29	第62·63号住居址	30	第64·65号住居址		
31	第66・67号住居址	32	第68·69号住居址	33	第70・71・72号住居址		
34	第73・74号住居址	35	第75号住居址	36	第76·77号住居址		
જ	第78・81・91号住居址	33	第79・80号住居址	39	第82·86号住居址		
40	第83・84・85・89号住居址	41)	第87・97号住居址	42	第88・90号住居址		
. 43	第92・93・94号住居址	44)	第95・96号住居址	,			
2					68		
. 3	竪穴状遺構・土壙77						
4	選				80		

Sto O B	śla	退彻								
	1	土器	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••		•••••		86
4	2	銅製品、	鉄器、	銭	•••••	•••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • •	•••••	115
3	3	土製品、	石器、	石製品		••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	119
第4頁	ñ	小結 …	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	121
第4章	高	i綱中学校								
第1頁	ń	調査の概	要 …	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	123
第2頁	Ť	遺構と遺	物 …	•••••	••••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	123
第3頁									••••••	
第5章		立条里的								
第1節	ť	調査の概	· 接 ····	•••••	•••••	•••••		•••••	•••••	129
第2頁									•••••	
第3節									•••••	
第6章									•••••	
	1									
					挿	図	目	次	7	
第1図	調	査地の位	置	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	4	第1	17図	第22~25号住居址…	36
第2図	١	レンチ及	び土層	概略		19	第1	18図	第26~28号住居址	37
第3図	周	辺遺跡…	······································	•••••		20	第	19図	第29号住居址	38
北栗	₹•	南栗遺跡	ī				第2	20図	第31・32号住居址…	39
第4図	調	査範囲…		•••••		22	第2	21図	第33・34号住居址…	40
第5図	第	1 • 2 •	50号住	居址		24	第2	22図	第35 • 36号住居址…	41
第6図	第	3号住居	址	•••••		25	第2	23図	第37・38号住居址	42
第7図	第	4号住居	壮	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	26	第2	24図	第39 • 40号住居址…	43
第8図	第	5 号住居	址	•••••		27	第2	25図	第41・42・54号住居	止······44
第9図	第	6 号住居	址、土	壙 9		28	第2	26図	第43•44号住居址…	45
第10図	第	7~9号	住居址			29	第2	27図	第46•56号住居址…	46
第11図	第	10・11号	住居址	•••••		30	第2	28図.	第47•48号住居址、竪2	₹大遺構13…47
第12図	第	12号住居	址	•••••		31	第2	29図	第49•57号住居址…	48
第13図	第	13・14号	住居址			32	第3	30図	第51•52号住居址…	49
第14図	第	15 • 53 •	55号住	居址		33	第3	31図	第58·59号住居址····	50
第15図	第	16・17号	住居址			34	第	32図	第60·61号住居址····	51
第16図	第	18~21号	住居址	•••••	•	35	第	33図	第62・63号住居址…	52

第34図	第64 • 65号住居址53	第65図	土器実測図(7)103
第35図	第66・67号住居址54	第66図	土器実測図(8)104
第36図	第68・69号住居址55	第67図	土器実測図(9)105
第37図	第70~72号住居址56	第68図	土器実測図(10)106
第38図	第73•74号住居址57	第69図	土器実測図(11)107
第39図	第75号住居址·····58	第70図	土器実測図(12)108
第40図	第76•77号住居址59	第71図	土器実測図(13)109
第41図	第78·81·91号住居址·····60	第72図	土器実測図(14)110
第42図	第79・80号住居址61	第73図	土器実測図(15)111
第43図	第82 • 86号住居址62	第74図	土器実測図(16)112
第44図	第83~85·89号住居址·····63	第75図	土器実測図(17)113
第45図	第87•97号住居址64	第76図	土器実測図(18)114
第46図	第88 • 90号住居址65	第77図	銅製品·鉄器実測図 ······117
第47図	第92~94号住居址66	第78図	銭拓影118
第48図	第95 • 96号住居址67	第79図	土製品、石器、石製品実測図 …120
第49図	建物址 1 ~ 372	髙糺	岡中学校遺跡
第50図	建物址 4 ~ 6 ······73	第80図	遺構配置図124
第51図	建物址 7~1074	第81図	竪穴状遺構、建物址出土土器 …125
第52図	建物址11~1375	第82図	建物址1・2127
第53図	建物址14・1576	第83図	建物址 3 ・ 4128
第54図	竪穴状遺構(1)81	条	里的遺構
第55図	竪穴状遺構(2)82	第84図	島立発掘地区大字小字界図129
第56図	竪穴状遺構(3)83	第85図	調査地の位置・トレンチ設定 …130
第57図	土壙・溝(1)84	第86図	検出遺構134
第58図	溝(2)85	第87図	1・2トレンチ135
第59図	土器実測図(1)97	第88図	3トレンチ136
第60図	土器実測図(2)98	第89図	4・5トレンチ137
第61図	土器実測図(3)99	第90図	6・7トレンチ138
第62図	土器実測図(4)100	第91図	7トレンチ139
第63図	土器実測図(5)101	第92図	土器実測図140



第1図 調査地の位置

第1章 調 査 経 過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和58年8月12日 埋蔵文化財保護協議を現地にて実施。出席者は県教委文化課郷道指導主事・ 中信土地改良事務所花岡主事外4名、地元研究者大久保知已、市教委神沢。
- 昭和59年1月17日 昭和59年度補助事業計画書提出。
 - 1月17日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査実施時期等について打合わせ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
 - 4月25日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査について細部の打合せ 出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
 - 4月25日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
 - 4月25日 昭和59年度県営は場整備事業島立地区島立南栗・北栗、新村・島立条里遺跡 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
 - 5月1日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金(国庫)交付申請書提出。
 - 5月21日 昭和59年度文化財保護事業補助金(県費)交付申請書提出。
 - 5月31日 島立遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
 - 7月6日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金(国庫)交付決定通知。
 - 7月19日 昭和59年度文化財保護事業補助金(県費)交付決定通知。
 - 10月1日 昭和59年度県営ほ場整備事業に伴う島立南栗遺跡他発掘調査委託契約の変更。
- 昭和60年1月8日 島立南栗遺跡他埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
 - 2月18日 島立南栗遺跡他埋蔵物の文化財認定通知。
 - 2月19日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

第2節 調査体制

団長:中島俊彦(教育長) 担当者:神沢昌二郎

調査員:太田守夫、西沢寿晃、三村肇、森義直、横田作重、吉田浩明

調査員補助:岩浪隆時、岡田健男、面手勝仁、川島恵理子、瀬川長広、滝沢智恵子、三沢元太

郎、三村竜一、山下泰永、山田真一、吉沢酉己

事務局:平林竹夫、神沢昌二郎、百瀬清、熊谷康治、直井雅尚、高桑俊雄

協力者:赤羽和子、赤羽包子、池田祥子、井口喜六、市川今朝男、伊那史彦、伊藤清子、乾靖子、入山敦子、入山敦、石合英子、井口千佳、大出六郎、小沢ふじ子、大久保棟子、小澤文子、小沢れい子、大久保安子、乙黒昭七、小口妙子、上條喜子、上條茂子、上條豊子、上條良枝、上嶋明美、開嶋八重子、鎌倉洋子、金琴順、北野友子、北野よ志子、粂井まさ、粂井益子、粂井しげの、久保田敏治、小林清志、坂下しげる、佐藤一郎、清水すみ子、神保宏絵、柴田尚子、鈴木なつ江、鈴木ますみ、関原ゆみ子、高津なお美、竹下貞雄、滝沢弘子、高宮五十鈴、忠地美智子、高野昌英、鶴川登、塚田智喜み、床尾てるみ、中島新嗣、内藤達雄、中島治香、永田加津美、中村清勝、中島要、直井スガ子、西片美香子、服部千子郎、原幸子、平田美恵子、藤森久子、藤森政子、藤森寿々子、藤森登志子、藤松栄一、穂刈松子、堀内いくみ、須澤二郎、松山菊江、前田清彦、宮沢法子、三原岳志、百瀬縫子、百瀬源作、百瀬縫代、百瀬武美、山田タカ子、山田美恵子、吉沢俊子、横井美和子、横内かつゑ、吉江和美、吉江章二、吉沢紀洋子、

第3節 作業日誌

南栗・北栗遺跡

昭和59年6月1日(金) 晴 発掘資材の運搬とテントの設営。 昨日の雨の為麦の搬出できず重機入れられず。P.M 3:00ブルトーザー到着。 作業員:三沢元太郎他2名 市教委:高桑、熊谷6月2日(土) 晴 プレハブ到着し組立てる。2ヶ所試掘、西50cm下黄褐色土、東70cm下砂層及び礫層。 作業員:三沢他2名 市教委:高桑、熊谷

6月4日(月) 晴 重機による表土剝ぎ。住居址2軒検出。 資材の整理・点検・修理。 作業員:三沢他8名 事務整理作業 員(以下事務とする):池田祥子 市教委:高桑、熊谷

6月5日(火) 晴 重機による表土剝ぎ。I 地区 3 住検出。 これ以東は深く重機を入れる。4、5 住検出。南栗公民館長、島立 出張所長見学。 作業員:三沢他9名 事務:池田 市教委: 高桑、熊谷

6月6日(水) 晴 I地区6住以東及び南側検出作業。6~17 住を検出。南側端1を検出。礫を多量に含む。 作業員:三沢他13 名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月7日(木) 会 風強し。I地区中央北部の検出作業統行。 作業員:三沢他13名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷、神沢 6月8日(金) 会 I地区中央検出作業継続。 作業員:類 川長広他8名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月9日(土) 晴 重機II地区へ入る。 I 地区南東部検出作 葉。 作業員:三沢他9名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷 6月11日(月) 会 I 地区東部検出作業継続。 II 地区検出作 業開始。重機本日にて終了。 作業員: 瀬川他19名 事務: 池田 市教委: 高桑、熊谷

6月12日(火) 晴 本日より遺構を掘り始める。 I 地区 1、2、3、4、5 住掘り下げる。 溝1、2 にトレンチを入れる。 基準点設定始める。 作業員: 瀬川他27名 事務:池田 市教委: 高桑、熊谷

6月13日(水) 小雨のち録 I 地区 1 ~ 5 住掘り下げる。 調査員:三村監 作業員:瀬川他28名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月14日(木) 晴 I地区6住掘り下げる。1~5住掘り下げ。 2住より銅製鈴帯出土。 調査員:三村 作業員:瀬川他30名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月15日(金) 晴 I地区7住掘り下げ。1~6住掘り下げ。 2住ビット掘る。50住検出困難なだめ、1住との切合部分のみで調査を止める。 作業員:瀬川他29名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月16日(土) 晴 I 地区1~7住掘り下げ。1、3住土層 図作成。1、2住平面図作成。 作業員:三沢他26名 事務:池 田 市教委高桑、熊谷

6月18日(月) 晴 I 地区3住柱穴掘り下げる。4住掘り下げる、遺物多し。50住平面図作成。5、7住土層図作成。6住掘り下げる、溝3の一部を掘る。 作業員:三沢他26名 事務:池田市教委:高桑、熊谷

6月19日(火) 晴 I地区平面図作成、写真撮影。4~7住

掘り下げる。8~11住掘り下げ開始。 作業員:瀬川他27名 事務: 池田 市教委: 高桑、熊谷

6月20日(水) 会 I 地区12住掘り下げ。4~7住掘り下げ 継続。5、7住平面図作成。 作業員:瀬川他24名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月21日(木) 曇 I 地区13、18、19住掘り下げ開始。 6、 10住土層断面図作成。11、12住掘り下げ継続。5 住柱穴掘り下げる。 作業員:三沢他25名 事務:池田 市教委:高桑、能谷

6月22日(金) 小雨のち曇 I 地区14、16、24、25、31住掘 り下げ開始。11、12、13住掘り下げ継続。8住土層図作成。 作業 員:中島治香他23名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月23日(土) 雨 雨の為発掘中止。現場にて図面整理。 市 数委:高桑、熊谷

6月25日(月) 雨 雨の為発掘中止。図面整理。 市教委: 高桑、熊谷

6月26日(火) 雨 雨の為発掘中止。図面整理。松本市教育 長、次長、課長、係長視察。 作業員:伊那史彦 市教委:高桑、 館谷

6月27日(水) 小雨のち晴 I地区28、29住掘り下げ開始。 24、25、31住掘り下げ継続。4、5住写真撮影。 作業員:三沢他 20名 事務:池田 市教委:高桑、龍谷

6月28日(木) 晴 I 地区21、40、52住掘り下げ開始。29住掘り下げる。13、16、18、19住土層図作成。6、10住平面図作成。 1、3、7、50住写真撮影。I 地区東半分再検出。 作業員:三沢 他40名 事務:池田 市教委:高桑、館谷

6月29日(金) 録 I 地区23、32、33竪穴1の掘り下げ開始。 29、40、52住掘り下げ継続。4、14、24、25、28、31住土層図作成。 溝3、6を検出。 作業員:三沢他40名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

6月30日(土) 晴 I 地区15住掘り下げ開始。9、12、21、23住土層図作成。18、19住平面図作成。 作業員:三沢他33名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

7月2日(月) 晴 I 地区26、34、46住、竪穴2、3 掘り下げ開始。32住掘り下げ継続。15住中に53住を検出し掘り下げる。29 住土層図作成。12、24、25、26住平面図作成。 作業員:三沢他40 名 事務:池田 市教委:高桑、熊谷

7月3日(火) 晴 I 地区39、46住掘り下げ開始。15、33、34、53住掘り下げ継続。4、8、9住平面図作成。32、39、40住土 層図作成。作業員:三沢他34名 事務:池田 市教委:高桑、 館谷、関沢

7月4日(木) 晴 I 地区35~38住掘り下げ開始。15、34、46住掘り下げ継続。竪穴7~10掘り下げる。 作業員:三沢他39名事務:池田 市教委:高桑、熊谷、関沢

7月5日(木) 晴のち雨 I地区22住掘り下げ開始。33、35、36、46住掘り下げ継続。竪穴5、6、11掘り下げ開始。11、37住建物址1土層図作成。14住、竪穴8平面図作成。雨の為午後発掘中止。作業員:三沢他30名 事務:池田 市数委:高桑、熊谷

7月6日(金) 雨 雨の為発掘中止。図面整理 市教委: 高巻

7月7日(土) 晴夕立ち I 地区41、42住掘り下げ開始。7、 11、22、33、35、36住、竪穴6の掘り下げ継続。38住土層図作成。 作業員:三沢他29名 事務:池田他1名 市教委:高桑

7月9日(月) 録のち晴 I 地区建物址1、2 再検出・半割。 建物址3、4 再検出。7、11、41、42住掘り下げ継続。溝5 にトレンチ3 本入れる。35、46住土層図作成。II地区再検出。 作業員: 三沢他37名 事務:池田他1名 市教委:高桑

7月10日(火) 晴 I 地区建物址3、4、6、7の再検出。 半割。42住掘り下げ継続。33住土層図作成。 作業員:三沢他31名 事務: 池田他1名 市教委: 高桑

7月11日(水) 録 I 地区43、44、51住掘り下げ開始。15、 53住土層図作成。 作業員:三沢他36名 事務:池田他1名 市教委:高桑

7月12日(木) 晴 I 地区43、44住掘り下げ継続。55住検出・掘り下げ。26、36、41、42、51、52、54住土層図作成。 作業員: 三沢他32名 事務:池田他1名 市教委:高桑

7月13日(金) 会 I 地区17住掘り下げ開始。44、51、52住掘り下げ継続。17、21、26、32、41、42、51、52、54住の床面精査。 17、34、55住土層図作成。15、53、55住平面図作成。 島立小学校6年生・高綱中学2年生クラブ見学。 作業員:三沢他36名事務:池田他1名 市教委:高桑

7月14日(土) 会 I地区ビット、土壙検出。 作業員:三沢他35名 事務:池田他1名 市教委:高奏

7月16日(月) 晴 I 地区ビット半割。 作業員:三沢他38名 事務:池田他2名 市教委:高桑

7月17日(火) 録 I 地区ビット半割作業継続。 上條豊市 議見学 作業員:三沢他29名 事務:池田他2名 市教委: 高桑

7月18日(木) 雨 雨の為発掘中止。テントにて図整理・土 器接合。午後建物址4の土層図作成。県教委依頼の電気探査現場に て始まる。 作業員:三村竜一他1名 市教委:高桑

7月19日(金) 晴 I 地区46住掘り下げ継続。建物址5、7、8 土層図作成。I 地区ビット土層概略図作成。II 地区57住検出・掘り下げ。 作業員:三沢他32名 事務:池田他2名 市教委:高季

7月20日(土) 晴のち雨 昨夜の雨の為午前中発掘中止。午後2時頃より雨の為土器洗い。 I 地区ピット土層図概略図作成。 56住土層図作成。 作業員:三沢他31名 事務:他田他1名 市教委:高桑

7月21日(土) ・ 最のち雨 午後雨の為発掘中止。 I 地区ピット土層概略図作成・掘り下げ。竪穴4を半割・土層図作成。図・遺物の整理。 作業員:中島新嗣他34名 事務:池田他2名 市教委:髙桑

7月23日(月) 晴 21、22日の雨の為遺構内の水の汲み出し。 II地区再検出。III地区へ重機を入れる。58~63住検出。IV地区重機 にて表土剝ぎ。 作業員:三沢他35名 事務:池田他2名 市 教委:高桑

7月24日(火) 晴 I 地区遺構内流入土除去作業。28、29住 平面図作成。平板測量順次行う。II 地区47~49、57住。竪穴13~16 掘り下げ開始。島立小学校教諭15名見学。 作業員:三沢他34名 事務:池田他2名 市教委:高桑

7月25日(水) 薄録 I 地区平板測量。17、31、51、52住平面図作成。II 地区遺構掘り下げ。III地区58~63住掘り下げ開始。IV 地区重機にて表土剝ぎ。夕立あり。 作業員:三沢他35名 事務:池田他2名 市教委:髙桑

7月26日(木) 会 I 地区11、16、56住。竪穴10平面図作成。 II 地区遺構掘り下げ継続・土層図作成。III地区58~63住掘り下げ継続。IV V地区重機にて表土剝ぎ。夕立あり。 作業員:三沢他30名事務:池田他2名 市教委:高桑

7月27日(金) 晴 I 地区13住・竪穴1平面図作成。II 地区 遺構の土層図作成。III地区58~63住掘り下げ継続。V 地区重機及び人力による検出。 作業員:三沢他35名 事務:池田他2名 市教委:高桑

7月28日(土) 晴 I 地区20、21住平面図作成。II地区遺構の土層図作成。V地区竪穴29より掘り下げ開始。VI地区重機にて表土剝ぎ。 作業員:三沢他40名 事務:池田他2名 市教委: 高桑

7月30日(月) 晴 I 地区32住・建物址10・竪穴2平面図作成。II地区土層図作成・写真撮影。III地区土層図作成。V地区遺構掘り下げ継続。VI地区検出作業。基準杭の海抜高度を出す。 作業員:瀬川他35名 事務:池田他2名 市教委:高桑、神沢

7月31日(火) 晴 I 地区34、35住・竪穴6平面図作成。III 地区土層図作成。V地区遺構掘り下げ継続。 作業員:三沢他41名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月1日(水) 晴夕立 I 地区ビット掘り下げ・36~38住平面図作成。III地区土層図作成。IV地区重機にて削平。VI地区92~96住掘り下げ開始。土器洗い。 作業員:三沢他34名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月2日(木) 晴のち録・ III地区土層図作成。IV地区検出作 葉。VI地区92~95住掘り下げ継続。 作業員:三沢他34名 事務: 池田他2名 市教委:高桑

8月3日(金) 薄曇 I 地区22、23、39、43住、竪穴5平面 図作成。III地区写真撮影。IV地区64、68、69、71、73住、竪穴17掘り下げ開始。V地区竪穴の土層図作成。 博物館学実習生現場に来る。 作業員:三沢他39名 事務:池田他2名 市教委:高桑 8月4日(土) 晴 I 地区建物址9土層図作成。III地区各住居址内精査。IV地区65、67住掘り下げ開始。64、69、73住、竪穴17掘り下げ継続。VI地区掘り上げ。 作業員:三沢他39名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月6日(月) 晴 III地区写真撮影後遺物取り上げ。IV地区 72、78住掘り下げ開始・64、65、67、69、73住掘り下げ継続。 作 業員:三沢他35名 事務:池田他2名 市教委:高桑 8月7日(火) 晴 I 地区40住平面図作成。IV地区76、77住掘り下げ開始。72、73、78住掘り下げ継続。V地区杭打ち。竪穴18、19平面図作成。 作業員:三沢他35名 事務:池田他2名 市教委:高奏

8月8日(水) 晴 I 地区33、41、42、46、54住平面図作成。 II 地区平面図作成。IV地区70、81、82住掘り下げ開始。64、65、72、76、78住掘り下げ継続。69、71住、竪穴17土層図作成。 作業員: 三沢他36名 事務: 池田他2名 市教委: 高桑

8月9日(木) 晴 I 地区写真撮影。II 地区平面図作成。IV 地区66、74、75、79、80住掘り下げ開始。81住掘り下げ継続。65、 67住土層図作成。V地区土層図作成。竪穴24、25、26、27平面図作成。作業員:三沢他36名 事務:池田他2名 市教委:高桑 8月10日(金) 晴 I 地区竪穴11、12平面図作成。住居址カマド精査及写真撮影 作業員:中島他31名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月11日(土) 晴 I 地区カマド精査・写真撮影。4、44住 再度掘り下げ。II 地区遺物取上げ後床面精査。 作業員:中島他32 名 事務: 池田他2名 市教委:高桑

8月17日(金) 晴 I 地区建物址 4 平面図作成。II、III地区全体図作成。IV地区84住掘り下げ開始。75、79、80住掘り下げ継続。作業員:三沢他34名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月18日(土) 晴 I 地区全体図・建物址 2 、3 、7 、8 平面図作成。IV地区75、77、79、80、84住掘り下げ継続。70、72住土層図作成。 作業員:中島他25名 事務:池田他 2 名 市教委:高泰

8月20日(月) 晴 I 地区全体図・建物址1、5、6平面図作成。IV地区87住掘り下げ開始。79、80、82、84住掘り下げ継続。作業員:三沢他26名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月21日(火) 晴 I 地区全体図作成。IV地区ビット掘り下 け開始。風強く午後作業中止。電気探査結果検討会(於あがたの森 文化会館) 作業員:三沢他31名 事務:池田他2名 市教 委:高桑

8月22日(水) 公 発掘中止。I 地区全体図作成。土器洗い。 風強し。 作業員:三村他4名 市教委:高桑

8月23日(木) 晴 I 地区建物址 9、11平面図作成。IV地区 ビット掘り下げ継続。64、65住平面図作成。 作業員:三沢他26名 事務:池田他 2 名 市教委:高桑

8月24日(金) 会 I 地区20住掘り下げ開始。 4住ビット掘り下げ・カマド精査。 44住掘り下げ継続。 講1トレンチ掘り下げ開始。 II地区南北トレンチ・V地区東西トレンチ土層図作成。 桐原健氏見学。 作業員:三沢他28名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月25日(土) 晴 IV地区76、77、81、84任土層図作成。 V 地区散水後再検出・ビット掘り下げ開始。東西トレンチ土層図作成。 作業員:三沢他26名 事務:池田他2名 市教委:高桑

8月26日(日) 晴 I 地区全体測量。II 地区南北・V 地区東西トレンチ土層図作成。公民館主催遺跡見学会有り。 作業員:山

田直一他 4 名 市教委: 髙桑、神沢

8月27日(月) 雨 雨の為発掘中止。土器洗い及び接合。 作 業員: 山田他5名 市教委:高桑

8月28日(火) 晴 I・II 地区溝の検出。IV地区64、66、82、87住土層図作成。 V地区97住掘り下げ開始。 作業員:三沢他28名事務: 池田他2名 市教委:高桑

8月29日(水) 晴 I 地区44住土層図作成。II 地区番にトレンチ入れる。IV地区88住掘り下げ開始。79、80住土層図作成。 V 地区ピット掘り下げ開始。 作業員:三沢他32名 事務:他田他2名 市教委:高桑

8月30日(木) 晴 I、II地区住居址切合部分のベルトをはずす。IV地区86住土層図作成。68、70、71、77、78住平面図作成。 V地区97住土層図作成。 作業員:三沢他29名 事務:他田他2名 市教委:高奏

8月31日(金) 晴 I 地区44住、竪穴3平面図・建物址6土 層図作成後写真撮影。IV地区建物址12、13掘り上げ・写真撮影。IV 地区88住掘り下げ継続。V地区竪穴掘り下げ継続。 作業員:三沢 他32名 事務:池田他2名 市教委:高桑

9月1日(土) 晴 IV地区89住掘り下げ開始。88住掘り下げ 継続。各住居カマド部精査。79、87住カマド・土層図作成。V地区 全体写真撮影。竪穴29平面図作成。VI地区全体写真撮影。南東部深 く土層観察。 作業員:三沢他11名 事務:池田他2名 市教 委:高奏

9月2日(日) 晴 土器洗い・接合 作業員:岩浪隆時他 2名 市教委:高桑

9月3日(月) 晴 IV地区住居址掘り下げ継続。73住土層図作成。79、80、81平面図作成。V地区建物址、竪穴掘り下げ継続。竪穴32、33平面図作成。風強し。 作業員:中島他9名 事務:大久保安子 市教委:高桑

9月4日(火) 晴 IV地区住居址掘り下げ継続。86住平面図作成。V地区建物址・竪穴掘り下げ継続。竪穴30、31、34、35、36平面図作成。東西南北溝土層図作成。風強し。 作業員:三沢他14名 市教委:高桑、関沢

9月6日(木) 晴 IV地区82、83、84住平面図作成。全体測
位。V地区建物址、竪穴平面図作成。97住平面図作成。
作業員
三沢他10名
事務:他田他2名
市教委:高桑

9月7日(金) 会 V地区竪穴平面図作成。VI地区遺構・土 層図作成。溝平面図作成。 作業員:三沢他8名 事務:他田他 2名 市教委:高桑

9月8日(土) 会 IV地区87、88住カマド測量。85住掘上げ。 V、VI地区ピット精査。 作業員:三沢他7名 事務:池田他2 名 市教委:高桑、関沢

9月9日(日) 会 土器洗い及び接合。 作業員:岩浪他1 名 市教委:高奏 9月10日(月) 会 IV地区75、89住掘り下げ。住居址カマド 部測量。82住カマド土層図作成。85住平面図作成。 V地区竪穴37平 面図作成。 作業員:三沢他6名 事務:池田他2名 市教 委:高桑

9月11日(火) 晴 IV地区75住切合部を床面迄掘り下げる。 73、74、75、76住平面図作成。78住カマド土層図作成。VI地区写真 撮影。 作業員:三沢他5名 事務:地田他3名 市教委:高

9月12日(水) 晴 テント・資材撤収。遺物運搬。 作業員: 三沢他3名 市教委: 高桑

9月13日(木) 晴 IV地区75、77、80、81住カマド残部測量。 75住ビット土層図作成。 市教委: 高桑、熊谷

9月14日(金) 小雨 VI地区カマド残部測量。92~94住遺物 取上げ。 市教委:髙桑、館谷

9月17日(月) 遺物・測量用具運搬。すべて終了する。 市教 委: 高桑、熊谷

高綱中学校遺跡・新村島立条里的遺構

昭和59年10月22日(月) 晴 髙綱中学校遺跡重機にて表土剣 ぎ。(以下髙綱とする。) 市教委:直井、髙桑

10月23日(火) 晴 髙綱重機にて表土剝ぎ。 市教委: 直井、 髙桑

10月24日(水) 晴 高綱重機にて表土剝ぎ。ピットを認める。 市教委:高桑

10月25日(木) 晴 高綱重機にて表土剝ぎ。遺跡検出作業。 作業員:三沢元太郎他3名 市教委:高桑

10月26日(金) 晴 髙綱建物址1掘り下げ開始。 作業員: 中島新嗣他12名 市教委:高桑

10月27日(土) 晴 高綱建物址2掘り下げ開始。 作業員: 中島他18名 市教委:高桑

10月29日(月) 小雨 高綱建物址 3 掘り下げ開始。雨のため 発掘は午前中。 作業員:中島他13名 市教委:高桑

10月30日(火) 公 高綱午后より条里調査のトレンチ線引。 にわか雨あり。 作業員:中島他2名 市教委:高桑

10月31日(水) 晴 高綱建物址1、2の土層図作成。新村・ 島立条里的遺構(以下条里とする)1トレンチ東部から重機を入れ はじめる。 (ブルトーザー・バックフォーの2台で11月7日迄作 業をする事となる。) 作業員:三沢他5名 市教委:高桑

11月1日(木) 公 高綱建物址1、2 掘り上げ。写真撮影。 建物址3、4 土層図作成。条里6、7トレンチ北部に重機入る。昨 夜未明乗用車がコンテナハウスに突込み、ハウス・車大破。 作業 員:中島他20名 市教委:高桑

11月2日(金) 雨 条里6トレンチ南部・3トレンチ東部に 重機入る。 作業員: 堀内いくみ 市教委: 高奏

11月5日(月) 晴 高綱建物址3、4 捆り下げ継続。条里2 トレンチ東部、7トレンチ南側に重機入る。午後改良区・業者と三 者会談。コンテナハウス再設置。 作業員:中島他15名 市教委: 高季 11月6日(火) 晴 高綱建物址3、4掘り下げ継続。条里1、 2トレンチ西部、5トレンチ北部に重機入る。 作業員:中島他19 名 市教委:高桑

11月7日 (水) 晴 高綱建物址4平面図作成。条里3トレンチ西部・4、5トレンチ南部に重機入る。1トレンチより土層図作成。 作業員:中島他16名 市教委:高桑

11月8日(木) 晴 高綱建物址2、3平面図作成。条里1トレンチ土層図作成。 作業員:中島他9名 市教委:高桑

11月9日(金) 晴 高綱建物址1、竪穴状遺構1の平面図作成。条里7トレンチ土層図作成。 作業員:中島他12名 事務整理作業員:直井スガ子(以下事務とする) 市教委:高季

11月10日(土) 晴 高綱全体図作成、一応終了となる。条里 6、7トレンチ土層図作成。本日で測量要員を除き、一般作業員は 作業終了とする。 調査員:太田守夫 作業員:中島他13名 市教委:高桑

11月12日(月) 曇 条里2、6トレンチ土層図作成。 調査 員:森義直 作業員:石合英子他6名 事務:直井 市教 委:高桑

11月13日(火) 晴 条里2、3、6トレンチ土層図作成。 作 業員:石合他6名 事務:直井 市教委:高桑

11月14日 (水) 晴 条里1、5トレンチ土層図作成。 作業 員: 石合他8名 事務: 直井 市教委: 高桑

11月15日 (木) 雨 条里雨の為10時で現場作業中止。小穴芳 実、小穴喜一氏見学。 作業員: 石合他5名 事務: 直井 市

教委:高桑

11月16日(金) 晴 条里 2 、5 トレンチ土層図作成。本日から1トレンチ東部よりブルドーザーで埋め戻し開始(業者)小穴芳 実氏見学。 作業員:石合他 5 名 事務:直井 市教委:高桑 11月17日(土) 晴 条里 3 、4 、5 トレンチ土層図作成。ト レンチ内の遺物取上げ作業開始。 作業員:石合他 5 名 市教 委:高桑

11月19日 (月) 曇 条里 4、5トレンチ土層図作成。6トレンチ内遺物取上げ作業継続。 作業員:石合他 4名 事務:直井市教委:直井、熊谷、高桑

11月20日(火) 雨 雨の為現場作業中止。 事務:直井 市 教委:高桑

11月21日 (水) 曇のち晴 条里写真撮影、トレンチ内遺物取 上げ。 作業員:石合他 3名 市教委:高桑

11月22日(木) 晴 条里1、2トレンチ内遺物取上げ。 作 業員:石合他3名 市教委:高桑

11月24日(土) 曇時々雨 条里4トレンチ内遺物取上げ。作 業員:石合他3名 市教委:高桑

11月26日 (月) 遺物・図・用具等整理。現場撤去・運搬作業本 日にて終了。 市教委: 高桑

11月27日以降 報告書作成に向けて次の作業を順次行なっている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。



南栗·北栗遺跡 I地区発掘風景



島立条里的遺構 調査風景



南栗・北栗遺跡 Ⅲ地区発掘風景



記念撮影

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置

島立地区は松本市の西方にあたり奈良井川と梓川の合流する河岸段丘の平地で、中世における小笠原氏の同族が所領した居館を島の館といったことなどがその地名に係わると云われる。地区内には野麦、仁科街道、千国道等があり、安曇・飛驒に通じる要衝の地にあたる。今回調査した南栗・北栗遺跡は島立地区の南東部に位置している。東下する久保川により栗林地区が南・北という地籍に分けられ、2遺跡として台帳に登録されている。調査はその両者にまたがるものであり、久保川添南側をI地区、南へII・III・IV、更に東へV地区を設定し、離れて市道高綱線際にVI地区を設けた。現在は北に北栗、南西に南栗の集落があり、水田として利用されている。また東には奈良井川が北へ向かい、西には仁科街道が南北に通じている。

高綱中学校遺跡は前述地区より西へ約1 Kmの地点市道際高綱中学校の南東側を、又島立条里的遺構はこの北東一帯を調査する事とした。これらの地区は島立と新村の中間に当たり、一面広い水田として島立地区の主たる農地である。西には南北に千国道が通じており、すぐ南際の島立変電所敷地内からは以前高さ約2 m程の大きな石が出土し、これが条里の基準となる石ではないかと推定され、付近の小字には「立石」という地名も数多く残り、古くより条里遺構として注目されている場所でもあった。 (高桑俊雄)

第2節 地形と地質

1 南栗・北栗遺跡

(1) 位置と周辺の地形地質

本遺跡は松本市島立南栗集落北東、海抜595~600m、傾斜 $\frac{7.5}{1000}$ (E)の平たん面に位置し、周辺は水田地域である。地形上は広大な梓川扇状地はん濫原の扇端が、奈良井川により切られてできた段丘面上(段丘崖 $2 \sim 3$ m)にある。

梓川扇状地は右岸に、波田面(波田礫層)・森口面(森口礫層)・上海渡面(上海渡礫層)・押出面の四段の段丘面をもっている。島立地区は最低位の沖積層に属する押出面形成後のはん濫原上にあり、このはん濫原は北(現河床)へ向うほど新しいものと考えられる。

本遺跡とその周辺(南栗)は島立地区にあって、奈良井川のほか鎖川の影響を直接受けているところである。すなわち鎖川と梓川の旧扇状地はん濫原の接触点は、ほぼ三間沢川(山形)から鎖川の現河床(和田・島立・神林・笹賀の境)の線にあり、新はん濫原の接触点は、太子堂東、南和田、中、下和田南、南栗と考えられる。南栗地籍にはいっては堀川の線まで及んでいるとみる。昭和58年発掘の南栗遺跡は、鎖川の堆積物であった。鎖川はその後の浸食の復活で、南栗の南側に約1 Kmにわたって、高さ1 m 前後の段丘崖をつくっている。このため、奈良井川東岸からみると、奈良井川の段丘崖と合せた地形は台地状にみえる。南栗集落はこの地形面に広がっている。

島立地区の地下構造は、基盤岩類の上にはん濫原堆積物として、波田礫層(波田面)・森口礫層(森口面)・沖積層がのっていると考えられている。堆積物の厚さは100m以上といわれているが、現在まだはっきりつかめていない。

遺跡と直接関係をもつのは沖積層である。東筑摩郡松本市誌(自然編土壤)によると、島立地区の水田の土壌深度はほとんど60cm以上、土性は壌土となっている。しかしはん濫原の地層の例にもれず、遺跡のトレンチの範囲でも土壌深度は変化が著しい。

台地はその後の奈良井川の回春(浸食の復活)やせぎの流量の増加により、台地上の流れとはらいせぎ(いずれも東流)は崖端から浸食を深め、松本盆地中央部には珍しい谷地形をつくっている。

(2) 遺跡の地形・堆積層と礫

本遺跡は梓川扇状地はん濫原の扇端が、奈良井川と鎖川に切られて段丘化し、東からは段丘上の台地、西からは扇状地の地形面にみえることは前に述べた。さらにこの台地面は、堀川をはじめとする東への流れによってつくられた浸食谷により、起伏のある地形面となっている。

本遺跡の発掘は、広い面積の中を I ~VI地区に分けて行なったため、連続性をみることは難しかった。 微地形的には、発掘地区の中央を東西に通る道路を最高所とした尾根状の高まりで、北側に I 地区、南側に II・III地区が設定されている。 IV地区は南へさらに一段下り、その南東に続く地区は段丘崖の崖端に近い。 V地区の対岸に浸食谷を挟んで段丘の突出があり、 さらに浸食谷をはさんで上下段をもつ段丘がある。 浸食谷をつくる流れは堀川とともに南栗集落がのる段丘地形をつくっているものである。 I 地区の北には50cm 幅の凹地があって、流れが東へ進むにつれ台地面を深く浸食し谷(1.5~2 m)をつくっている。 また凹地は西に行くに従い,次第に平たんとなり海抜600mの等高線を越えると消滅する。この流れは田中沢の分流で左岸に50m 前後の小規模な段丘崖を二段つくっている。 この凹地を北へ越えると、県道新田松本線で北栗集落へ向けて地形面は再び高くなっていく。 北栗の奈良井川段丘面にもこうした起伏面や空谷がみられる。 VI地区はこの凹地と県道の間の奈良井川段丘の崖端にある。

本遺跡は広い面積にわたる上に、発掘地区やトレンチ間に距離があるので、共通した状況を示す ことが少ない。共通した状況をあげると次のようである。

- 1 耕土(作土)の土壌深度が深い。東筑摩郡松本市誌によると土壌深度は60cm 以上となっている。 実際にどの地区でも表面から砂礫層に達するのに最低60cm である。土層の深いところでは 1 m を越える。
- 2 砂礫層の礫の大きさは各地区を通じ、新村の遺跡群、島立条里的遺構、南栗遺跡(58年発掘)より小さい。小礫のほか細礫や砂が多く、扇状地の扇端の堆積をあらわしている。
- 3 礫の種類は砂岩 (硬砂岩)・チャート・粘板岩・けい岩・礫岩・花こう岩・安山岩で梓川水系の 円礫である。
- 4 遺跡面(遺物包含層、遺構検出面など)は、深さ60~70cm で作土の褐色土層にある。 次に各発掘地区の堆積の特徴をあげてみる。

I地区

東西に長く最も広い地区であり、土層が全域にわたり深い。土層は上から灰白色粘質土と斑鉄をもつ黄褐色粘質土 (耕土) 50cm、ローム質褐色土20cm、砂質ローム質褐色土 (10cm)、以下黄褐色土である。また地区の中央やや南よりを、砂礫層が東西に蛇行して走っている(溝1)。幅は表土で3~3.5m、深さは東から2 m、1 m (+)、1.3m (+)、70cm (+)、70cm (+)であって、底面の土層までは2 m である。堆積の仕方は土・砂・細礫の混成であったり、土層・砂層・礫層またはこれらの混成層の交指状の堆積である。このことからこの流れは自然流で扇端にあった静かな流れが、流速や流量の変化に応じて、いろいろな堆積を示したものと考えられる。流れの方向はほぼ西から東へである。

II地区

西側のトレンチII (第2図)の断面に、幅約10cm 中央で厚い砂礫土層があらわれた。表土の下30 cm からはじまり、厚さ60cm 以下で底部の褐色土層に断面が椀状に重なっていた。上から(1)灰色の砂質土層30cm、(2)灰色の砂細礫混り土層30cm、(3)底部に鉄分の汚染層 3 cm で、両端に行くほど薄くなる。ここでも砂質土層と礫まじり土層が交指状に重なっていた。地形異常として中央やや北よりに、底部の褐色土層への落ち込み(巾90cm、深さ100cm)があり、内部に粗砂・細砂・微砂・腐植をもつ褐色粘土が交指状につまっていた。落ち込みは、上の(1)層は破壊されていないが、(3)層を引き下げたり、(2)層を切っていること、内部の堆積物が(1)層のものに近い砂質であることなどから、(1)層の堆積直前のものと思われる。なおこの落ち込みは他の方向へ延びていないようであり土壙とした。砂礫土層全体の広がりや方向は、トレンチがここだけなので推定の域をでないが、両端が南北にあることから、流れは西から東へ延びていたものと考えられる。ただ幅の広さや、椀状の形から一時期流れの滞水性が生じたものと思われる。

III地区

耕土(表土)下の一部に砂礫があるほかは、土層の厚い地区である。

IV地区

褐色土層が薄い砂礫層に覆われている地区である。面積の $\frac{3}{5}$ は耕土下に、厚さ50cm 以下の薄い砂礫層に広がっている。面積の残り $\frac{2}{5}$ に当る南東部は土層がよく発達し、深さ 2 m を越える。地形異常として土層部分で、径およそ470~500cm、深さは検出面から210cm に及ぶ大穴が発見された(73 住)。内部は厚さ10cm 前後の粘土質土の互層で、植物質土壌の傾いた層が挟まっていた。大穴に近い南東隅の土層は、表土40cm の下に褐色土層($\mathbf{p}-\mathbf{a}$ 質)130cm、細礫を含む砂層20cm、再び褐色土層10cm(+)で 2 m を越え、後に述べるVI地区の土層に似ている。北西隅にもうけた小トレンチでみると砂礫層は幅3.5m、断面が皿状の堆積で中央近くの厚さは46cm である。礫は砂混りの細礫で、堆積の方向は土層部分との関係から西北西一東北東と考えられる。

V地区

IV地区と同じく褐色土層上を薄い砂礫層が部分的に覆っている。砂礫層は細礫・砂・土で、それぞれが上下層・漸移層となっている。北隅のトレンチV(第2図)の断面図でみると,厚さは30~50 cm であるIV地区と違うのは褐色土層の浅い波状の凹地の数条を埋めた状態にみえる。凹地形を流れの方向とみると南南西—北北東で、ある時期の小流の数条と考えられる。いずれも耕土下40~50 cm にみられるもので、南栗遺跡全体に共通した現象である。

VI地区

ここは以上の地区を離れた北東の奈良井川段丘崖すれずれの場所にある。すでに藤沢宗平氏により縄文遺跡地として指摘され、2 mの地下より土器の出土をみたという段丘面の一部に当っている。深掘地点の南東断面は、(1)表土(耕土)20cm、(2)灰白色土20cm(上部ほど灰白色の溶脱層、下部斑鉄)、(3)褐色土20cm(鉄・マンガン分が多くなる集積層)、(4)黄褐色土20cm(砂分が少ない)、(5)黄褐色土35cm(砂分が多い)、(6)砂質土8 cm、(7)褐色土12cm(砂質)(8)黄色粘土123cm(+)の2 mを越える堆積で、土性は壌土である。縄文中期の土器片の出土層は黄色粘土層である。

また地区の北西面の地表下60cm に粗砂と細礫による砂礫層があり、NE70°(西南西—東北東)の方向を示していた。

堆積層の礫については前に述べた通りであるが、92住カマドに使用されている石類は花こう岩・硬砂岩・安山岩で、径30×40cmの直方体がほとんどで、発掘地区外から運ばれた可能性が大きい。

(3) 遺跡の立地

すでにこの地域は、盆地中央での縄文時代遺物の出土地として知られている。また奈良井川段丘による台地面、梓川扇状地の扇端面として形成された地形面である。台地面は小流による浸食谷で起伏をもつが、居住地としての自然条件はすぐれている。梓川の自然流、後の用水せぎの発達は、 集落の発生や水田開発に深い関係をもったことは、多くの人びとの指摘するところである。 今回の調査で知ることのできた自然条件は、扇状地扇端の地層の堆積状態である。除土、トレンチなどによりあらわれた土層や流れと考えられる砂礫層の分布や存在状態から、表面の地形起伏や検土 杖では観察できない地下構造を知ることができた。

砂礫層の礫の大きさ・形からみると本遺跡の礫は小・細礫が中心で、多くの砂や砂層をともない 明らかに扇端の堆積状態を示していた。これに対し上流域の安塚古墳遺跡や秋葉原遺跡(いずれも 押出面)では大・中礫の亜円礫、中流域の新村条里的遺構や島立条里的遺構では中・小礫の亜円礫 が卓越していた。

また土層と砂礫の分布からは、安塚・秋葉原遺跡では混在することが多く、洪水性堆積もみられた。新村条里・島立条里的遺構では土層と砂礫層の横の分帯が明りょうとなり、基底の礫層の上に流れの状態が認められた。本遺跡では二層の横の分帯はさらに明りょうとなり、土層の幅・深さはともに増大している。砂礫層は蛇行の形をとり、おだやかな流れを思わせ、I地区を除いて一般に薄く、明らかに扇状地末端の堆積となっている。

地表面よりの土層の厚さは、新村条里・島立条里的遺構周辺では60~70cm で、基底の砂礫層の分布範囲が広いので、たいてい土層の下に砂礫層をみた。本遺跡では褐色土層の分布範囲が砂礫層より広く、またその層も厚い。褐色土層は砂質ローム質土壌である。土地の人びとは苦土と呼び、波田面・森口面にみられるロームの河川堆積物で、ロームと砂の混じった壌土である。

本遺跡の砂礫層は、褐色土層の中の小さい流れとして存在するらしく、洪水性やはん濫性の状況は認められない。 I 地区の砂礫層 (主な自然流) 以外は、地表面から60~70cm の地下に流れの形としてあり、土層が深さ1 m を越え2 m に達するところでは、やはり60~70cm に砂・細礫の薄い層として存在する。これはこの深さの堆積時に水の影響があったものと考えられるが、上流や中流にみられるような激しいものではない。またこの土層や砂礫層は土師器や須恵器の出土した遺構によって切られているので、地形面の形成は遺跡の成立以前で、当時も現在と余り変らない環境にあったと考えられる。

縄文時代の遺物は、VI地区の褐色土層(地表からの深さ1.8~2.0m)でみられた。過去の資料でも同程度の深さの土層から、縄文時代中期・後期の遺物が報告されており、その分布は奈良井川左岸段丘面全体に及んでいる。当時の遺跡の面を単純に計算すると、現在より約2 m ほど低いことになり(堆積平均0.4~0.5mm/年速度)、奈良井川の河床とは1 m ほどの高度差になるが、河床面の上昇を考慮にいれれば、現在の状態に近いものであったと考えられる。この地形面は奈良井川のはん濫も、梓川の新しいはん濫の影響(堂沢より北榑木川沿いのはん濫は奈良井川左岸段丘を破壊している)を受けていない面である。地形分類や地形面の対比からみると、この地形面は上海渡面~押出面の形成時に扇状地の末端面としてできあがり、奈良井川の回春(浸食の復活)により、右岸宮渕本村とともに段丘化したものと考えられる。

2 島立条里的遺構

1 位置と周辺の地形地質

本遺跡は松本市島立永田集落の南沿い、高綱中学校の北東にあって、海抜600~605m、傾斜 8/1000 S E の平たん地にのり、周辺はすべて水田地域で田中沢・境沢等によってかんがいされている。地形上は広大な梓川扇状地の末端に近く、扇状地性の沖積面上に位置する。

梓川は右岸に四段の段丘面をもち、この面を上より波田面・森口面・上海渡面・押出面(安塚・秋葉原遺跡がのる)と呼んでいる。波田面・森口面はロームに覆われていて、それぞれ洪積世後期中ごろ、後期末に形成されている。上海渡面・押出面は沖積世に属するもので、本遺跡は最も低位の押出面に続く沖積面にのっている。

遺跡から西へ向うと、押出面・森口面・波田面がつぎつぎにみられる(上海渡面はない)。この境界は段丘崖線で、下流で新しい面が形成されると、高位の面が低位の面にもぐるために、屋根瓦状の堆積となる。すでに筆者が和田村総合調査(東筑摩郡郷土資料編纂会文化部中間報告(昭和28年)でしたように、当時和田地区にあった「サイロ」や「いももろ」の地下内部で、50cm~2 mに及ぶローム層が耕土の下、あるいは砂礫にはさまれているのが発見された。島立地区の近くでは、下和田で砂礫層と互層をなしているのがみられた。

本遺跡及び島立地区は、押出面に続くはん濫原の堆積物である新村条里の発掘調査を概観して河 流の移動によってできた新しい地形面を三区分してみた。

- 1 根石一安塚一南新一和田(押出面)
- 2 上新一北新一下新一島立南堂沢より南
- 3 博木川沿い

これによると、本遺跡は2つの面にのっていることになる。

島立地区の地下構造は、基盤岩類の上にはん濫原堆積物として、波田砂礫層(波田面)・森口礫層 (森口面)・沖積層がのっていると考えられている。堆積物の厚さは100m以上といわれているが、 現在まだはっきりつかめてはいない。

遺跡と直接関係をもつのは、沖積層のはん濫原堆積物である。東筑摩郡松本市誌(自然編土壤)によると、島立地区の水田の土壌深度はほとんど60cm以上で、土性は壌土とされている。しかしはん濫原の地層の例にもれず、遺跡のトレンチの範囲でも土壌深度は変化は著しい。

・2 遺跡の堆積層と礫

本遺跡の地形面は新村条里的遺構から続く面で、はん濫原堆積物は、土層・砂層・礫層あるいは これらの混成層などさまざまである。東筑摩郡松本市誌(自然編土壤)では、本遺跡の地籍の土壤 深度を島状(40~60cm)の分布としているのが注目される。もちろん土壌深度は測定点での表面か らの深さとなるから、平面的にすべて同じものとは考えられない。

実際に本遺跡の地層は複雑で、広い面積の全面に碁盤目状の深さ1 m を越えるトレンチ(東西に4条、北より1・2・3・4。南北に3条、西より5・6・7)が設定され、地層の調査には好条件であるにもかかわらず、堆積状況の理解は難しかった。

一般に地層の上部は、耕土(作土)の灰黒色ないし灰白色の粘土で、下部は褐色ついで濃褐色に変わる、わずかに円礫を混えた砂質の土層である。耕土と褐色土の間は溶脱層に当り、続いて斑鉄が増して下部の土層になる。鉄・マンガンの汚染や集積は、濃褐色土の上部に多く、盤層(鬼板・鉄分)も一部にみられたが、新村条里的遺構ほど発達していない。砂礫層の浅いところは礫が直接汚染されている。最下層は砂礫層で、トレンチ2の中央に大礫が多かったが、他は小・中礫(径20×10、15×15、10×12cm)が目立った。また細礫や砂が混じるところから、小さい流れも考えられるが、トレンチが平面的に広げられていないのではっきりしない。

この堆積を壌層位でみると、灰黒色土は A_1 層、灰白色土は A_2 層、褐色土は B_1 層、濃褐色土は B_2 層に相当すると考えられる。これらの層は最下部の砂礫層の深さによって、その厚さも40cm から 1m に及んでいる。(第87図)

土器片などの遺物は、表面から60cm 位の深さで発見されているが、土層中だけでなく、砂層・礫層の場合もあるので、遺跡の成立は地形面が形成された後と考えられる。そこで条里の遺構や小流をみつけるため、砂礫層の分布、深さ、土層との相互関係などを調査してみた。

これによると、遺跡内で最も土層の厚いところは、北東隅の永田集落寄り(トレンチ1・6・7)で、1 m または1 m を越えている。次いで最南端のトレンチ4であった。

また砂礫層の浅いところは、トレンチ1の西、2・3・6の中央~南部で、遺跡の大体中心部に当る。砂礫層からみた流れの方向はおよそN60~65°W(西北西)で、下新南(北新南)の方向からとなり、前に述べた地形面の2つの面に当っている。また現地形面上の低地の方向(鉄塔付近を通る)でみるとN60°Wである。また砂礫層中にも中央の鉄塔の南西に、N60°Wを示す厚い土層が挟まれているが、砂礫層と土層が相互併入しているところから、同時堆積のものと考えられる。前記の厚い地層も下部の砂礫層とは整合であり、左右の砂礫層とも相互併入のところもあるので、堆積には余り時間的間げきはなかったと考えられる。

ただ鉄・マンガンの汚染度は、浅い砂礫層の堆積部分が、厚い土層部分よりも高いのは、流れや 構の存在を思わせたが、遺跡の中や周辺を境沢・田中沢およびその分流が東西に流れていて、その 影響も考えられ判断が難しい。実際にトレンチ1の西端や鉄塔の南側の強い汚染は、現在の流れの 影響と判断された。

また地形異常としては、遺物の出土した付近に落ち込みが多くみられた。N60°Wの方向につながるものもあるが、トレンチが平面的に広げられていないので、自然のものか人為のものか確認ができなかった。

腐植物については、トレンチ3の西端に、耕土(30cm)と細礫まじり土層の間に挟まれて、帯状の黒褐色腐植層(約10cm)があったが、すぐわきを現在のせぎ(田中沢)が流れているので、この影響とみられた。現在のせぎの影響は、トレンチ5の北端(境沢)でも大きく、ルーズな砂層としてみられた。腐植土層は他ではみられなかった。

砂礫層の礫の形は円礫や亜円礫で、硬砂層を主としチャート・花こう岩に安山岩・ホルンフェルスがわずかにみられた。粘板岩はほとんど細礫であった。いずれも梓川水系の礫で、流れの方向とあわせ、梓川のはん濫原堆積物であることが証明される。

3 遺跡の立地

条里遺跡の発掘は、条里制の土地制度がその場所に実施されていたことの裏付けの遺構を発見することである。

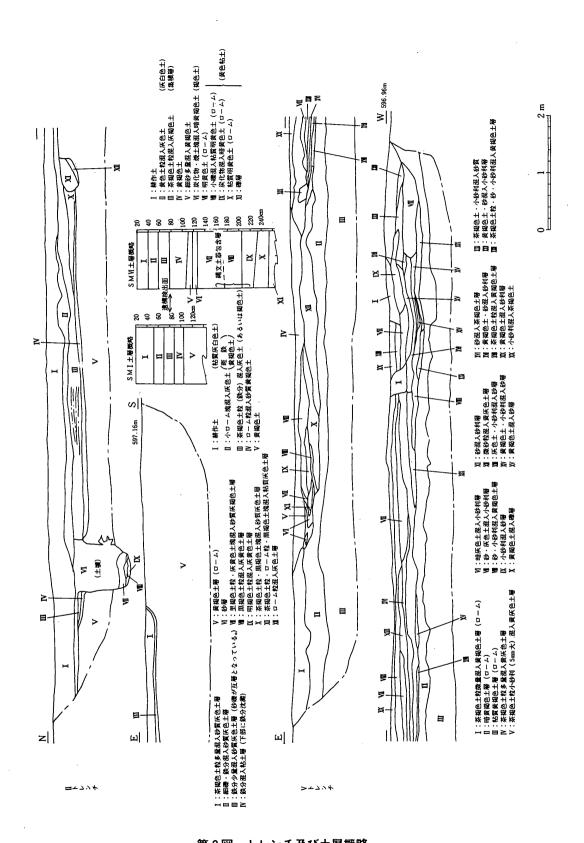
条里制立地の自然条件としては、まず土壌の深さ、肥よく度、土性があげられるが、本遺跡の土壌は河川堆積物の砂質ローム質土壌で、60cm を越える厚さをもっている。また肥よくな壌土で保水性透水性に富み、今日でも稲作の一等地である。

次に条里制の土地割に必要な平たんな地形面は、扇状地の末端に当り $\frac{7}{1000}$ の傾斜で、その条件を満しているといえる。

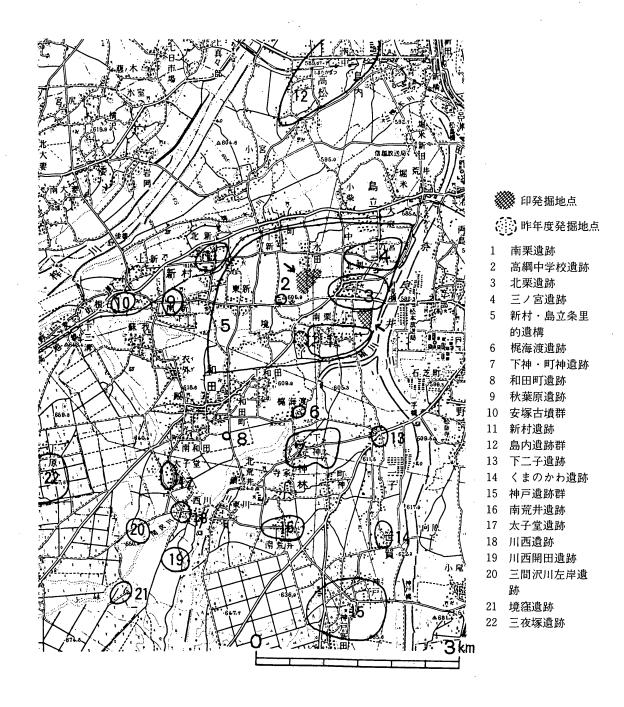
また水田開発に最も深い関係をもつ水利(取水・導水・排水のかんがいの仕組み)は、新村条里的遺構と同様に梓川本流に近く、その自然流利用の適地であり、わずかな土木技術でも導水の可能性をもっている地域である。

条里遺構の発掘としては、自然堆積中に人為的な状態であるせぎ・あぜ等を発見し、その土地割や方位を知ることである。そのためには自然堆積中の地形異常に着目する必要がある。

今回の発掘ではその発見に努力したが、決め手になるものがみつからなかった。 (太田守夫)



第2図 トレンチ及び土層概略



第3図 周辺 遺跡

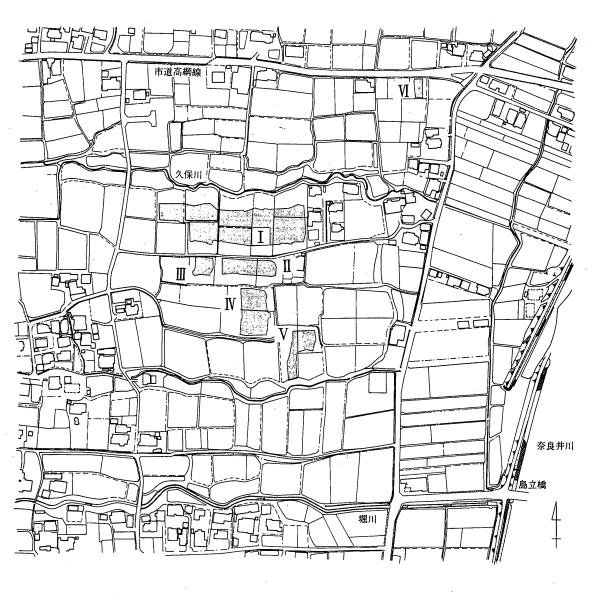
第3節 周辺遺跡

島立の遺跡については故藤沢宗平氏が詳細に調査しており(註1)。 それによると大きくみると奈良井川左岸100m あまりの段丘面と、集落の中とに分けられよう。しかし奈良井川だけが島立の遺跡の立地に影響を及ぼしたのではなく、むしろ西の梓川からの分流による何本もの堰の縁辺に遺物の出土が多く、今回の調査でも多数の溝址がそれを裏づけるものであろう。

まず南側をみると、栗林神社周辺では昨年度の調査で神社北側一帯から奈良期~中世までの住居 址を検出、完成の佐波理碗等の遺物出土を見ている(2)。 この一帯は神社南西際、擬宝珠、及木殿に も同様の遺物が散布し遺跡はかなり広い範囲になるものと思われる。北栗お乳神社周辺では周囲の 住宅造成の際に縄文中期後葉、平安期の土器が多量に出土しているのを聞いている(3)。三ノ宮神社周 辺では参道北、農協前、小学校校庭、出張所前などで須恵器を主とした遺物の出土をみており、他 にも古墳期の腿・直刀らしきものの出土を聞いている。近隣地区に注目すると、南側神林梶海渡で は平安期と思われる遺物の出土があり、鎖川を渡って神林下神に入ると、平安期を中心とした住居 址、建物址等が113軒検出され奈良三彩の小壺を出土する下神・町神遺跡が目を見張る(4)。 西側は和 田、新村地区になるが、点々と土師器、須恵器の出土のある遺跡がある程度で遺跡の分布密度は低 い。しかし新村秋葉原、安塚では古墳期末の群集墳が検出されており(5)、この地の開発が古いもので あることを示している。

さて今回は本書に掲載できなかったが、VI地区で縄文後期、久保川添いで縄文中期初頭土器を多量に採集している。近隣では該期の遺構、遺物、奈良井川上流左岸の笹賀地区で、牛の川、神戸、くまの川₍₆₎、川西開田、山形村の三夜塚遺跡に求める事ができる。 (高桑俊雄)

- 註1 「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」第2巻 歴史上
 - 2 「松本市島立南栗遺跡」松本市教育委員会(1984)に詳しい
 - 3 地元の中島要氏、浅田周一氏らが採集保管している
 - 4 「松本市下神・町神遺跡」松本市教育委員会(1984)に詳しい
 - 5 「松本市新村安塚古墳群」松本市教育委員会(1979)、「松本市新村秋葉原遺跡」同(1983)に詳しい
 - 6 松本市教育委員会編各報告售「牛の川」(1956) 「神戸」(1955) 「くまのかわ」(1982) 等参照



北栗・南栗遺跡調査地 I~VI地区

0	50	100m
		

第4図 調 査 範 囲

第3章 南栗・北栗遺跡

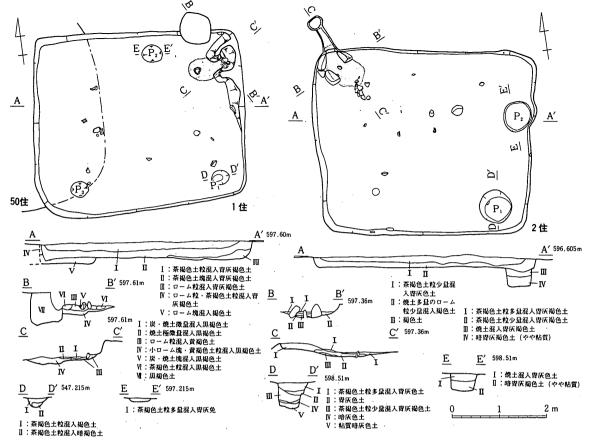
第1節 調査の概要

今回の調査において、実際に除土し、遺構検出を行なった実質面積は、I~VI地区で計9,056m2に 達する。ほ場整備により破壊の恐れのある地区を選定した為、このように各々の地区が離れてしまっ た。検出面は集積層下部あるいはその直下の黄褐色土中で表土上面から50~60cm という深さであ るが、II地区が他に比べ10cm 程深い。遺構の覆土は平安時代末迄のものと中世以降のものとでは明 瞭に異なり、後者ほど灰白色を呈し、又検出面も若干浅い所にある。これは昨年の南栗と同様の傾 向を示している。検出した遺構は住居址96、掘立柱建物址15、竪穴状遺構37、土壙19、ピット約700 である。住居址は遺物より明確に分るものだけで古墳時代5、奈良時代12、平安時代68、他に中世 のものがある。圧倒的に平安時代のものが多く、9世紀末~10世紀初頭を一番のピークとしている ようである。掘立柱建物址は切合関係より奈良時代末~平安時代中頃を中心としている。竪穴状遺 構には墓壙らしきものが多く含まれている。出土した遺物には土器、土製品、石器、鉄器、銭等が あり、他に金環1点、銅製帯金具2点がある。土器には土師器、須恵器、陶器、磁器、土師質土器 等があり、各器種が見られる。又繩文土器がVI地区深掘地点(中期後葉)と、未発掘の久保川添い・ (中期初頭)から出土、場所によっては歴史時代検出面下に異なる時代の生活面をもっている事を うかがわせた。土製品には紡錘車のおもり部、土錘が、石器には砥石、硯、鉄器は和釘を中心とし て完形の鎌、鋤頭等があり、銭は計47点のうち43点が紐を通してピットの上に置いた状態で出土し た。又金環は住居址から、帯金具の2点も住居址の床面及び壁際にあり伴出土器により良好な資料 となりえよう。各地区のうちでV地区は遺構に変化の見られた場所である。ここは調査地の南東に 位置し、東には奈良井川段丘崖が迫っている。中世の竪穴状遺構が20基あり周囲のピットも同時期 の小さなものである。

以上のことから本遺跡は古墳時代末期から平安時代末期にかけて長時期集落として営まれ中世に 至って一部を墓域として使用していたと考える。 (高桑俊雄)

第2節 遺構

1 住居址



第5図 第1・2・50号住居址

第1号住居址

位置 I 地区最西端 50住を切る 規模 $4.50\times3.67m$ 平面形 長方形 主軸方向 $N-90^{\circ}-E$ ピット $P_1-39\times30\times20$ $P_2-44\times36\times7$ $P_3-38\times34cm$

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直で茶褐色を 呈す。床面はローム混じりの褐色土で平坦だがやや 軟弱である。カマドは東壁の北端に設けられ石組粘 土カマドである。カマド前の床面には焼土が薄く散 布してみられた。尚、煙道は検出されなかった。

遺物は少なく、覆土~床面にかけて土師器坏・埦等が散在してみられたのみである。出土土器より本址はXI期に位置づけられるものと思われる。

第2号住居址

位置 I 地区西端 1 住東側 規模 4.56×3.86m

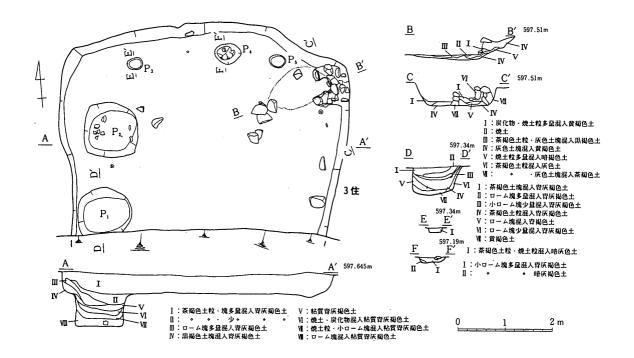
平面形 長方形 主軸方向 N-8°-E ピット $P_1-70\times69\times55$ $P_2-62\times59\times38$ cm

壁および床は褐色土で、床面は全般的に平坦で中 央部は特に堅緻で良好であった。カマドは北西隅に 河原石によって構築されており、袖石の間には支脚 石がみられた。カマド前の床はあまり掘り込まれて おらず焼土は薄く散布していた。

遺物は少ないが、灰釉碗、土師器坏・皿・塊・羽 釜等の土器の他、釘・鎗先、北壁に密着して青銅製 銙帯が出土した。本址は出土土器よりXI期に位置づ けられるものと思われる。

第50号住居址

1住床面精査中に検出されたが検出面が深いため 1住との重複部分のみ調査をした。出土土器より本 址はⅧ期に位置づけられるものと思われる。



第6図 第3号住居址

第3号住居址

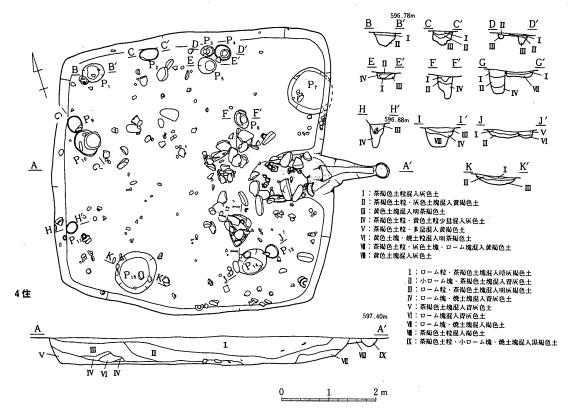
位置 I 地区西 南側盛土に隠れる 規模 $6.13m \times ?$ 平面形 不明 主軸方向 $N-90^{\circ}-E$ ピット $P_1-114 \times 96 \times 58$ $P_2-113 \times 117 \times 73$ $P_3-33 \times 25 \times 10$ $P_4-57 \times 44 \times 12$ $P_5-36 \times 28 \times 3$ cm

黄色土中に掘り込まれており、検出面における覆土の様相は $1\cdot 2$ 住と同様にやや灰色を帯びていた。壁は西側ではほぼ直に、北および東側ではややゆるやかに落ち込む。床面は茶褐色土粒が混じる黄色土で、カマド前の堅緻な部分を除いて軟弱であったが全般的に平坦で良好であった。ピットは5 本検出されたが、そのうち西側に並んで検出された $P_1\cdot P_2$ は規模が大きく、壁も直に落ち注意される。特に P_2 からは覆土下層~底にかけて、完形を含む数多くの土

器が出土し、その性格はP」と共に貯蔵穴であったと考えられる。カマドは北東隅に設けられ石組粘土カマドである。煙道は検出されなかった。カマド前の床は浅く掘り込まれ焼土が薄く散布している。焼土の厚さは、最も厚いカマド内で10cmを測る。またカマド前には、床面からやや浮いて人頭大の石がまとまってみられたが、カマドの構築材であったものと考えるには積極的理由を欠く。

遺物には、土師器皿・坏・埦、灰釉皿・碗等があり、その多くはカマド前およびP₂から出土したものである。本址は、出土土器より、XII期に位置づけるものと思われる。

尚、近接する1・2住と覆土およびカマドの位置が隅であることなど似た様相が窺え、**Ⅲ**期ごろにおける特徴としてとらえることができよう。



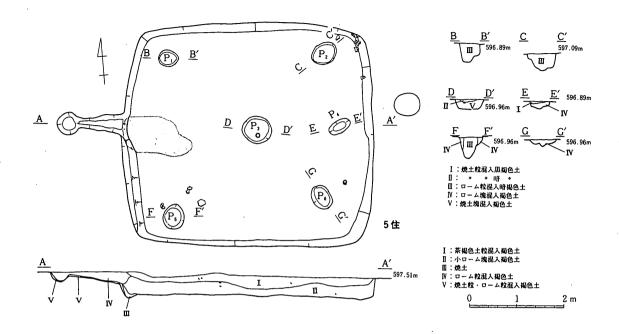
第7図 第4号住居址

第4号住居址

位置 I地区西側 規模 $6.03\times5.97m$ 平面形 方形 主軸方向 $N-105^{\circ}-E$ ヒット $P_1-47\times39\times30$ $P_2-41\times23\times30$ $P_3-30\times24\times12$ $P_4-37\times32\times22$ $P_5-39\times34\times14$ $P_6-40\times27\times47$ $P_7-98\times95\times25$ $P_9-35\times30\times50$ $P_{10}-59\times41\times10$ $P_{11}-27\times22\times48$ $P_{12}-68\times42\times40$ $P_{13}-30\times27\times15$ $P_{14}-65\times51\times14$ $P_{15}-93\times86\times18cm$

黄褐色土中へ掘り込まれる。検出面から床面迄は 非常に深く、上層から下層まで多量の遺物と、人頭 大の河原石が出土し、それらは遺構内に堆積したⅡ、 Ⅲ層に多く含まれる。壁は、黄褐色から黄色を呈し 直状をなす。床面は黄色土で中央部非常に固い。壁 際では固さは見られない。主柱穴は深さより、壁際の $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_9 \cdot P_{11}$ 、それと、カマド寄りにある $P_6 \cdot P_{12}$ と把えたい。カマドは東壁中央に位置し、煙道を設けた石芯粘土カマドである。かなり強固に構築されている。焼土は、カマド内から両袖部にかけてかなり多量に見る事ができる。

遺物は、今回調査した住居址のうちで量においては最大を示す。前述の如く状況より遺構廃絶後の埋没途時における廃棄行為の結果であろうと考える。本址のものとしては床面及び壁際よりの坏、灰釉瓶、四耳壺の他、緑釉陶器片一片を検出している。緑釉は今回調査ではこの1片のみである。他には該期の器種のほとんどを見る。なおこのような遺物出土の状態は他には見られなかった。遺物より本址はX期となる。



第8図 第5号住居址

第5号住居址

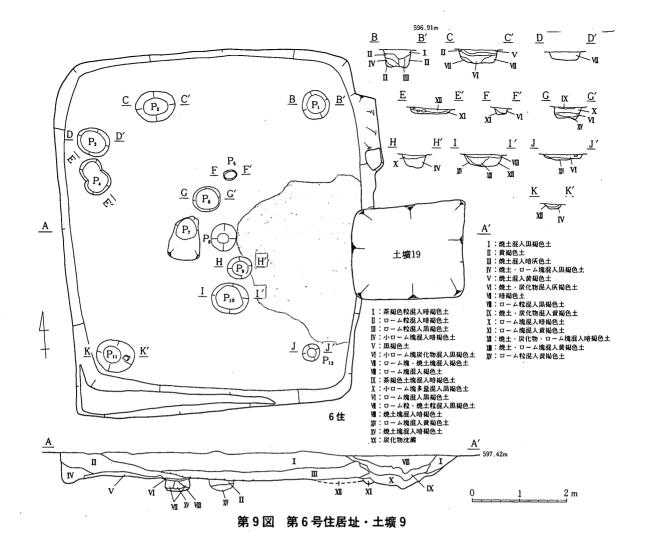
位置 I 地区西 4 住南側 規模 5.33×4.70m 平面形 正方形 主軸方向 N-84*-W ピット P₁-43×35×40 P₂-57×46×36 P₃-64×57×22 P₄-50×27×16 P₅-53× 45×45 P₆-54×39×15cm

黄褐色土中に掘り込まれ壁は直におちる。壁高は東壁が約40cm、南壁・北壁約36cm、西壁は約45cmを測る。覆土は褐色土であり、上層は茶褐色土粒、下層は小ローム塊の混入がみられた。床面は黄褐色土で、やや起伏があるものの良好な状態であった。ピットは6本検出されたが、そのうち、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_5 \cdot P_6$ は主柱穴であると思われ、 P_6 を除いて36~45cm

掘り込んである。また中央に位置するP3は、上層に 焼土粒、下層に焼土塊を含み、土師器甕片が数点出 土していることから、火と関係のある施設であった ものと考えられる。カマドは西壁中央に掘り込まれ て構築されており、煙道は約1.4mを測る。袖は確認 できなかったが、南側では壁がテラス状をなしてお り、袖の役割をしていたものとも考えられる。焼土 はカマド前に薄く散布してみられた。

遺物はピット3内と北東隅に集中して出土している。その多くは土師器甕であり、他に須恵器高杯・坏がある。また、北東隅の壁には計16個の編物用石錘が検出面から壁中位にかけて密着して出土した。

本址は出土土器からIII期に位置づけられるものと 思われる。



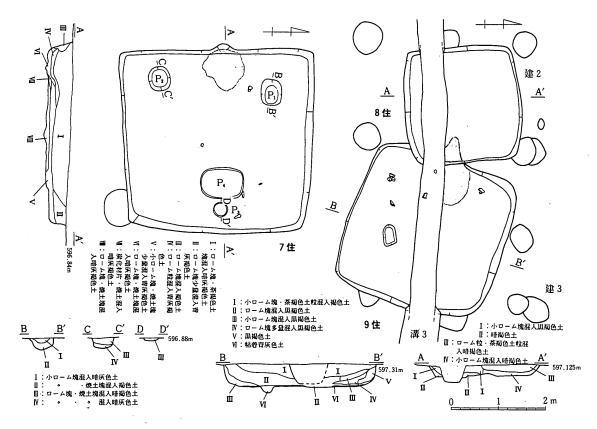
第6号住居址

位置 I 地区北西 土壌19に切られる 規模 7.50×6.64m 平面形 長方形 主軸方向 N-92°-E ピット P₁-60×58× 36 P₂-84×53×28 P₃-70×57×18 P₄-77×42×12 P₅-29×21×15 P₆-58× 52×25 P₇-96×54×25 P₈-58×53×24 P₉-52×46×27 P₁₀-80×64×25 P₁₁-80× 68×10 P₁₂-37×36×10cm

覆土は暗褐色を呈し、壁はほぼ直に落ちるが、東壁北側では張り出し部がありややなだらかに落ちる。また南壁西側には、床面より約50cmの高さで段が設けられている。同様の施設は29住にも認められ

る。床は黄褐色土でやや起伏をなし、あまり固くはない。床面上には、焼土・炭化物が一面に散布しており、東側では焼土が特に濃密であった。カマドは土壙19に切られている東壁中央にあったものと思われる。ピットは12本検出されたが、床面を正確に把握できなかったこともあり全てが同時に存在したものとは考え難い。 $P_1 \cdot P_2$ あるいは $P_3 \cdot P_{11} \cdot P_{12}$ は位置から主柱穴かとも考えられるが、掘り込みが浅く疑問が残る。

遺物は覆土上層~床までに全体的に比較的多く出土している。土師器の甕片が極めて多く、他に土師器坏・高坏、須恵器坏・高坏・長頸壺・蓋等がみられる。本址は出土土器よりIV期に位置づけられるものと思われる。



第10図 第7・8・9号住居址

第7号住居址

位置 I 地区北西 規模 4.00×3.84 m 平面形 正方形 主軸方向 N-90°-W ピット P $_1-54 \times 44 \times 25$ P $_2-51 \times 46 \times 23$ P $_3-32 \times 31 \times 6$ P $_4-93 \times 65 \times 7$ cm

やや小型の住居で壁はほぼ直に落ちる。一度深く掘って埋め直したように窺え、床面は軟弱であった。ピットのうち、 $P_1 \cdot P_2$ は位置から柱穴かと思われる。また P_4 は非常に浅いものであった。カマドは西壁中央に浅く掘り込まれている。遺物は、土師器甕が主で、他に須恵器坏もある。土器からは $IV \sim V$ 期に位置づけられると思われる。

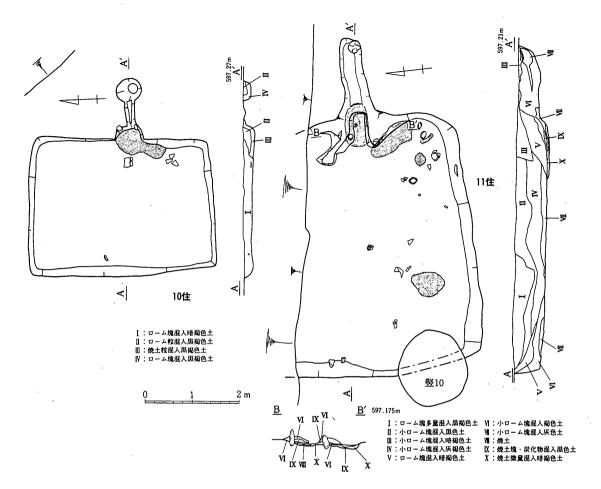
第8号住居址

位置 I 地区北西 9 住を切る ビット なし 規模 2.47×2.47m 平面形 正方形 壁はややゆるやかに落ち、床面は堅緻な黄色土であった。カマドは検出されなかった。遺物は少なく時期設定はし難いがVIII~X期に位置づけられよう。尚、本址は住居としてとらえるより竪穴状遺構としてとらえたほうが妥当だと思われる。

第9号住居址

位置 I 地区北西 8 住に切られる 規模 3.37×3.14m 平面形 正方形 主軸方向 N-73°-W ピット なし

壁はほぼ直に落ち込み、床は黄褐色土でやや軟弱であった。カマドは西壁中央を掘り込んで築かれている。焼土の厚さは約10cmであった。遺物は、土師器甕の一括品と須恵器坏・長頸壺の破片が出土したのみである。本址は出土土器からIV期に位置づけられるものと思われる。



第11図 第10・11号住居址

第10号住居址

位置 I 地区中央北端 規模 3.92×2.87m 平面形 長方形 主軸方向 N-87・-E ピット なし

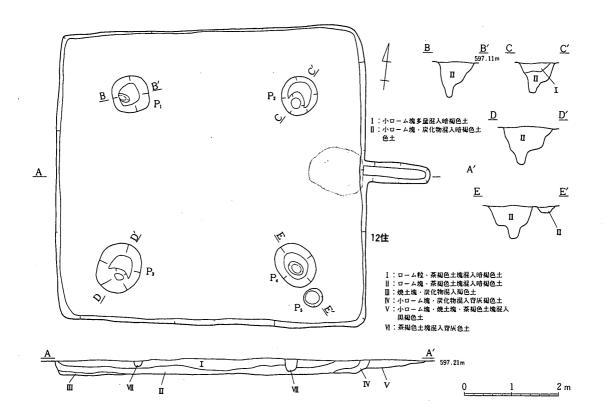
長方形の特徴あるプランをしている。壁はほぼ直に落ちるが部分的にややゆるやかに落ちる。壁および床面は黄褐色土である。カマドは東壁中央に掘り込まれて構築されており、煙道は細くくびれているが煙出口は径が大きく特徴的である。焼土はカマド内から南側床面にかけて散布して認められた。遺物は土師器甕が出土しているものの少なく時期設定は不明確であるがIII~IV期に位置づけられよう。

第11号住居址

位置 I 地区中央北端 図10に切られる 北側盛土 に隠れる 規模 5.50m×? 平面形 長方形 主軸方向 N-92°-E

黄褐色土中に深く掘り込まれている。床面は堅緻な黄色土で特に中央部では良好であった。カマドは石芯の袖を持ち、煙道先には土師器甕3個体がほぼ完形でみられた。

遺物は床面に多く、特に南東隅に集中してみられた。須恵器坏・土師器坏・甕でありⅢ期に位置づけられる。



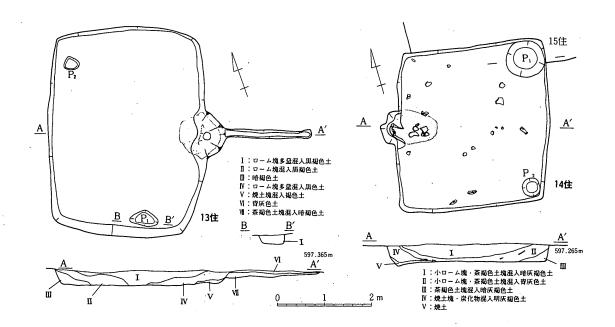
第12図 第12号住居址

第12号住居址

位置 I 地区中央 規模 6.60×6.20 m 平面形 長方形 主軸方向 $N-85^{\circ}-E$ ビット $P_1-77\times77\times74$ $P_2-79\times77\times62$ $P_3-107\times91\times81$ $P_4-98\times78\times71$ $P_5-40\times40\times14$ cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちる。床面は 黄色土で、比較的堅緻である。カマドは東壁中央に 位置し、煙道が構築されているだけであり、壁を特 別掘り込む、袖をつけるなどの構造はもたず、焼土 もカマド前にわずかに残るのみであった。又、煙道 先にあるピットは、本遺構に伴うピットではない。本址には、計5つのピットがあるが、P₁からP₄は、主柱穴と考えられる。それぞれ2段底で非常に深く、しっかりとしたピットであり、今回調査した柱穴を持つ住居の中でも、これほど明瞭な主柱穴のあるものは例がなかった。又、P₃からは、炭化物・焼土が検出された。

遺物は、床面からの出土はほとんどなく、わずかに、覆土中より、土師器甕、須恵器坏・蓋・四耳壺等の小片が出土しただけであった。本址の時期はV期にあたる。



第13図 第13・14号住居址

第13号住居址

位置 I 地区中央 規模 4.39×3.33m 平面形 不整方形 主軸方向 N-95°-E ピット P₁-62×33×20 P₂-31×27×11cm

カマド側がやや張る不整方形のプランを呈す。黄 褐色土中に掘り込まれ壁はややなだらかに落ちる。 床面は茶褐色土粒が混入する黄色土で、やや起伏を なすものの良好であり、特に中央部は堅緻であった。 カマドは東壁中央に壁を掘り込んで構築されてい る。極めて狭い煙道が2m弱のびるのが特徴的であ る。カマド内は浅く掘り込まれており焼土が約10cm 堆積し、中央には石が1つ据えられていた。

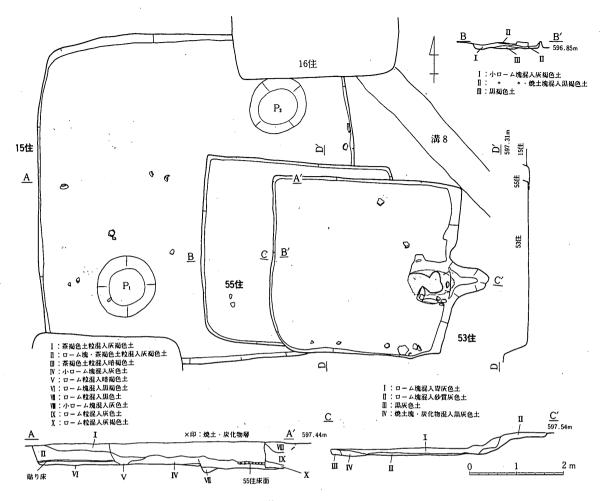
尚、本址からは土師器の甕がわずかに出土しているのみで時期を求めることはできない。

第14号住居址

位置 I 地区中央 15号住を切る 規模 3.39×3.27m 平面形 正方形 主軸方向 N-85°-W ピット P₁-83×82× 15 P₂-39×37×15cm

黄褐色土中に掘り込まれており、壁は直に落ちる。 床面は堅緻な黄褐色土で全般的に平坦をなし良好である。カマドは西壁中央を掘り込み構築されている。 短かい袖を有し、焚口部からは急に立ちあがる。焼 土の厚さは約10cmを測る。

遺物は多く、土師器坏・甕、須恵器坏・四耳壺・ 甕等がみられた。特にカマド内およびカマド前に集 中して出土している。遺物から見ると本址はⅧ期に 位置づけられる。



第14図 第15・53・55号住居址

第15号住居址

位置 I 地区中央 14・16・55住に切られる 規模 6.93×6.75m 平面形 正方形 ピット P,-197×77×32 P₂-129×116×35cm

壁はほぼ直に落ち、床面は黄色土で固くはない。 遺物は床面より土師器甕、須恵器坏・蓋・甕等が出 土しIV~V期に位置づけられる。

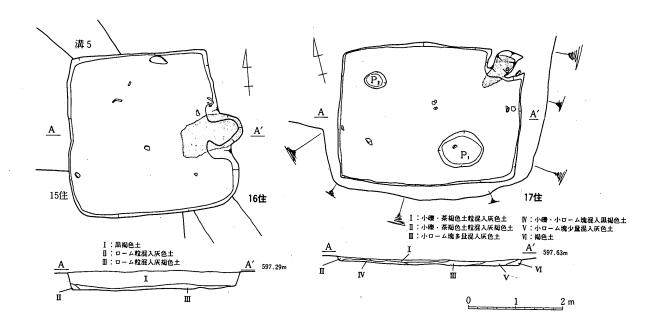
第53号住居址

位置 55住を切る 規模 3.90×3.67m 平面形 不整方形 主軸方向 N-100°-E ヒット なし 黄褐色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちるが東側ではややゆるやかである。床面は堅緻な黄褐色土で平坦をなす。カマドは石芯の袖をもち、焚口部から斜めに立ちあがっている。遺物はカマド周辺より土師器甕が多量出土している他、須恵器坏・甕等がみられ、VII期に位置づけられる。

第55号住居址

規模 3.90×3.88m 平面形 正方形 ピット 不明

床面は堅緻な黄色土の貼床である。遺物には須恵 器坏・甕、土師器甕等があり、V~VI期に属する。



第15図 第16・17号住居址

第16号住居址

位置 I 地区中央やや北寄り 規模 3.60×3.40 m 平面形 方形 主軸方向 N-91°-E ピット なし

15住と溝 5 を切っている。壁は黄褐色で、比較的 直に落ちこんでおり良好な状態である。床面は黄褐 色を呈しており堅緻であるがやや起伏がある。カマ ドは東壁中央やや南寄りに位置し、粘土袖を設けて いる。

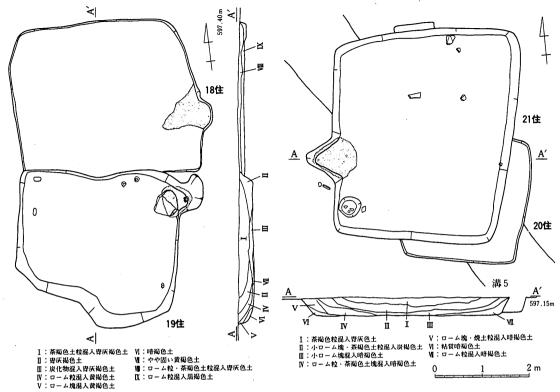
遺物には土器と鉄器がある。土器には土師器甕、 須恵器坏、蓋等があるが少量である。鉄器は鋤頭が カマド北壁際より、鎌が床面中央北西寄りからいず れも完形で出土している。遺物からしてWII期に属す る。

第17号住居址

位置 I 地区南側西寄り 規模 $3.88\times3.01m$ 平面形 長方形 主軸方向 $N-18^{\circ}-E$ ピット $P_1-97\times77\times32$ $P_2-48\times36\times10cm$

盛土際に検出され、周辺を拡げて調査した。壁床ともに黄褐色を呈す。壁はほぼ直に落ち込む。床面は検出面より10cm程で、平坦だが共に軟弱であった。又、北東隅の床面の一部は小礫となっている。カマドは北壁東隅に位置し、住居址中心に向いている。両側に粘土の袖を設けている。

遺物は少ない。灰釉陶器碗・長頸瓶片を中心としており、他には土師器坏・埦等がある。遺物からしてXI期に属する。



第16図 第18・19・20・21号住居址

第18号住居址

位置 中央やや西寄り 19住に切られる 規模 4.16×3.20m 平面形 不整方形 主軸方向 N-94°-E ピット 不明

床面は検出面より浅く軟弱な黄褐色土である。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。

遺物は土師灰釉陶器碗片等が少量出土した。遺物からしてXI期に属する。

第19号住居址

規模 3.40×3.20m 平面形 不整形 主軸方向 N-96°-E ピット なし

壁・床とも黄褐色を呈す。カマドは東壁隅にある。 カマド前の土器上に流れ込みの大石がある。

遺物は土師灰釉陶器碗等があり、Ⅷ期に属す。

第20号住居址

位置 中央やや東寄り 規模 2.68×2.52m 平面形 胴張方形か

溝5を切り21住に大半を切られる落込である。床面は21住床より5 cm 高く軟弱な状態であった。 遺物は土師器坏・甕小片にすぎない。遺物からし

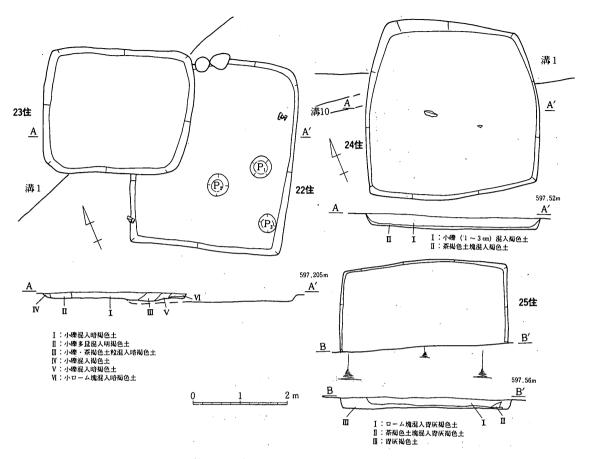
第21号住居址

てV期に属する。

規模 4.48×3.35m 平面形 方形 主軸方向 N-78°-W ピット-47×44×15cm

建物址 4 を切る。床面は黄色を呈す。カマドは西 壁中央やや南寄りにある壁掘込カマドである。

遺物はすべてが少片で土師器甕、須恵器坏・甕等 が少量である。



第17図 第22・23・24・25号住居址

第22号住居址

位置 I 地区中央南東 規模 4.03×3.39m 方形 ピット $P_1-47\times43\times12$ $P_2-47\times44\times7$ $P_3-39\times38\times18$ cm

床面は小礫混の黄色土で軟弱。遺物は土師器甕、 須恵器蓋・甕片等が少量ある。VI~VII期に属する。

第23号住居址

規模 3.15×2.59m 平面形 隅丸方形

床面は22住と同じ。むしろ竪穴状遺構か。遺物は 土師器坏、須恵器甕片等が微量あり、紅期に属する。 遺物からして紅期に属する。

第24号住居址

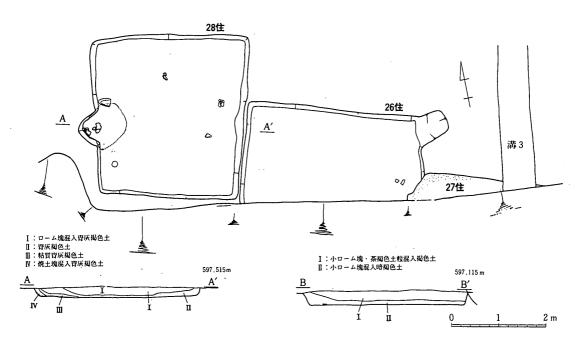
位置 I 地区中央南西 規模 3.72×3.69m 平面形 不整方形 ピット なし

床面は小礫を含む黄褐色土で比較的良好。遺物は 土師器甕、須恵器坏・甕・長頸壺等が少量ある。遺 物からしてVII期に属する。尚カマドは見当らない。

第25号住居址

規模 3.57m×? 平面形 方形か

遺物は土師器、灰釉陶器碗片等が少量出土した。



第18図 26・27・28号住居址

第26号住居址

位置 I地区南側中央 住居址南半分ほど盛土中、 27住にわずかに切られる。

規模 3.82m×? 平面形 方形 ピット なし

砂質黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄褐色土で比較的良好である。カマドは 検出範囲内では確認されなかった。住居址北東隅の 突出部は、ゆるやかに検出面より住居址へ落ちこん でいる。その遺構が住居址に伴うものか断定することは困難であった。

遺物は、床面より土師器甕・小形甕、須恵器坏・ 甕・長頸壺が出土している。時期は、VII期にあたる。

第27号住居址

砂質褐色土中に灰褐色の覆土を持つ遺構として検

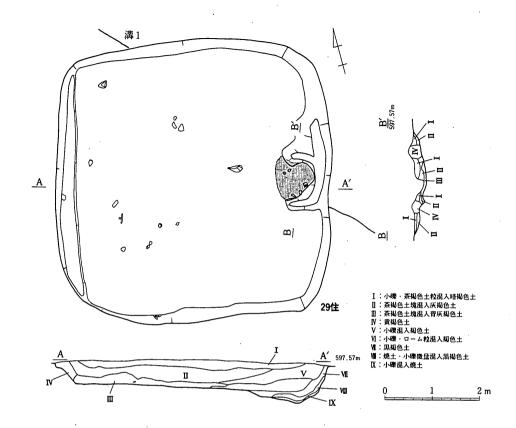
出されたが、住居址の大部分が盛土中のため一部プランを検出したのみで、調査はしていない。

第28号住居址

位置 同上 規模 3.44×3.07m 平面形 正方形 主軸方向 N-77°-W ピット なし

砂質黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄褐色土で、中央部は固くしまっているが、他は軟質である。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、壁を掘り込んでおり両袖を持つ。北側袖のみ、石芯としている。又住居址南東隅、カマド北側に、炭化物がみられた。

遺物は、カマド内より土師器甕、須恵器甕が、又 床面より土師器甕、須恵器坏・蓋・長頸壺・甕が出 土している。本址の時期はVII期にあたる。



第19図 第29号住居址

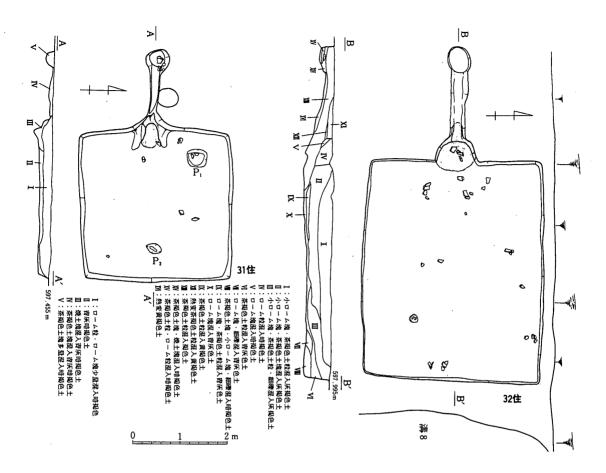
第29号住居址

位置 I 地区中央南部 規模 6.37×5.91m 平面形 隅丸方形 主軸方向 N-106°-E ピット なし

北東部が構1上部に掘り込まれている為、この周辺の覆土中には特に礫が多く埋没時の影響を示している。プラン検出も困難であり、小礫の入る褐色土のやや軟弱な床面を追い確認した。壁は溝上の部分が礫を露出させており、一番高い東部で46cm、低い西側では34cmであった。この西壁には床面より約20cmのレベルでテラス状の平坦部が見られる。幅は約30cmと狭く、床面同様固さは見られない。カマドは東壁中央に位置している。周囲の壁が礫の為、

黄褐色土を用いて袖部をつくっている。焼土は当初 全く検出できず、カマド断面作成時にようやく検出 した。焼土の量は狭い範囲ではあるが比較的厚く、 最厚部で約25cm であった。このことより使用時の 火床は周囲より20~25cm 程低く設けられ、又、高い 壁の状況、袖部に焼土が見られない点から、あるい は煙道を設けて使用していたのではないかと推察す る。ただ煙出部分も溝1中にあったものとすると、 廃棄され、埋没時に礫の流れ込み等によって大きく 破壊されてしまったものであろう。

遺物は覆土上層より下層まで一様に出土した。比較的多く、カマド内より土師器甕、床面からは土師器塊・坏・小形甕・甕、須恵器坏・蓋・甕等である。 これらより本址の時期はVIII期とする。



第20図 第31・32号住居址

第31号住居址

位置 I 地区中央 規模 3.26×3.23m 平面形 正方形 主軸方向 N-79°-W ピット P₁-42×37×10 P₂-34×21×12cm

小形の住居址である。壁、床面とも黄褐色を呈す。 壁はほぼ直に落ち込む。床面はほぼ平坦で比較的良好である。カマドは西壁中央に位置し粘土袖を設ける。煙道際には本址より古いピットを検出した。

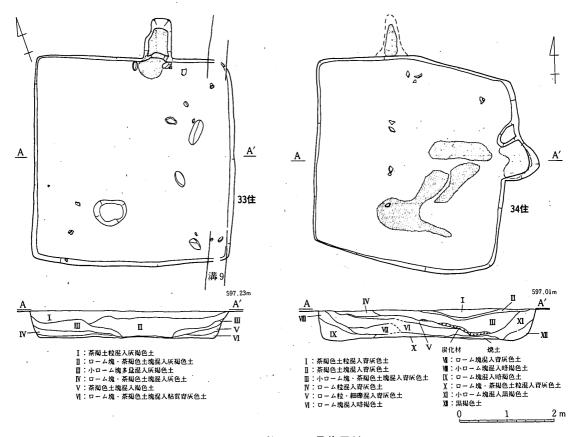
遺物は煙出部から土師器甕が出土しており、他に 床面より須恵器坏等がある。遺物からしてVI期に属 する。

第32号住居址

位置 I 地区北側東寄り 規模 4.64×3.87m 平面形 長方形 主軸方向 N-88°-W ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれている。壁は直に落ち込んでおり良好な状態であった。床面は検出面より60 cm 程で堅緻である。カマドは西壁中央に位置し、長い煙道を持つ。

遺物はカマド付近より土師器・須恵器甕片が多く、 坏等は少ない。遺物からしてVIII期~IX期に属す。



第21図 第33・34号住居址

第33号住居址

位置 I 地区南東 規模 4.39×4.24m 平面形 正方形 主軸方向 N-18°-E ピット 70×52×40cm

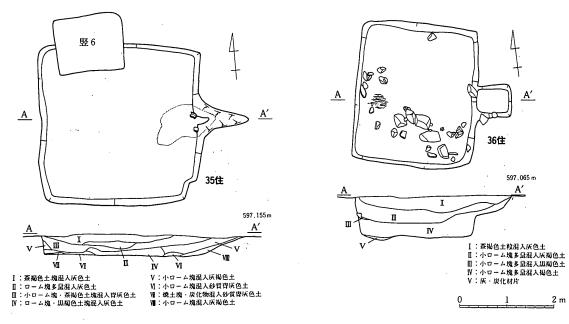
本址東部分は溝 9 に切られる。壁はほぼ垂直に落ち、固い。床面も黄色土で堅固で平坦である。カマドは北壁の中央やや東寄りにあり、カマドの両袖に一対の石があり、石芯であろう。カマド規模は巾60 cm、奥行きは80cmである。床面には数個の石と1ケのピットがある他は柱穴等はない。遺物はカマド内から須恵器坏片の他、土師甕片が多数出土した。この他床面から須恵器長頸壺・蓋などがあり、これらにより時期はVII期としたい。

第34号住居址

位置 I 地区北東 規模 4.40×4.05m 平面形 正方形 主軸方向 N-94°-E (旧) N-3°-E ピット なし

壁は垂直に60cmと比較的高く、作り直しをしたためカマドは北壁と東壁にある。床面も二層にあり、上下ともほぼ良好でしっかりしている。上面は下面より10cm高い。中央より東側にかけて炭化材(1)が斜めに層をなして存在した。北壁のカマドは旧時のもので、煙道部分だけ残り、東壁のカマドは焚口が60cmと広い。出土遺物は須恵器、土師器の甕他で少ないが、これらにより本址の時期はVI期としたい。

(1)森義直氏の分析によると、ニレ属の炭化材・カバノキ科の炭化片等の落 葉樹が多いとの結果である。



第22図 第35・36号住居址

第35号住居址

位置 I 地区東 竪 6 に切られる。 規模 3.46×3.43m 平面形 正方形 主軸方向 N-89°-E ピットなし

黄褐色土中に茶褐色土粒混入灰色の覆土を持つ遺構として検出された。壁はほぼ直に落ちる。床は黄色土で、堅緻である。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、壁を深く掘り込み、煙道がのびており、袖はない。

遺物は、カマド付近を中心に、土師器小形甕、須恵器坏・甕等が出土している。本址の時期はVI期にあたる。

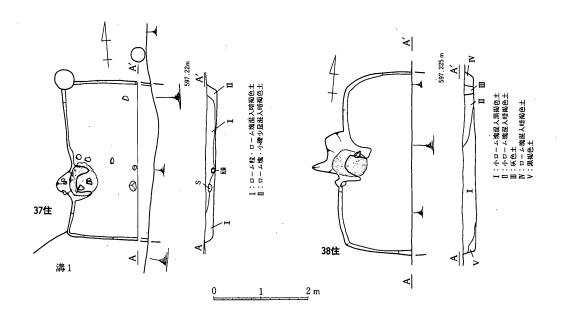
(1)森義直氏の分析によると、禾本科植物(イキ科)のアンヤススキ等の硅酸分の多いものの白色の灰であるとの結果をえた。

第36号住居址

位置 I 地区北東隅 規模 3.03×2.62m 平面形 長方形 ピット なし

本址は I 地区の他の住居より掘り込み面が高く鉄分を多く含む灰色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちる。床面は、黄色土で、軟質である。プランの南側半分、覆土上層より中層にかけ、20~50cm 大の火を受けた石が数多く見られた。又西側床面より白色の灰(1)が多量に検出されている。プラン東側突出部は、床面より一段高いが、土質等が同じため本遺構のものである。

遺物は、覆土から床面にかけ内耳土器片が多くみられた。又、口縁部肥厚の白磁碗の小片も出土している。尚、本遺構は、V地区竪29と類似する点が多い事から、竪穴状遺構の範疇と考えたい。時期は、中世である。



第23図 第37・38号住居址

第37号住居址

位置 I 地区東端 東半分は用地外 規模 3.33m×? 平面形 方形か 主軸方向 N-83°-W ピット 不明

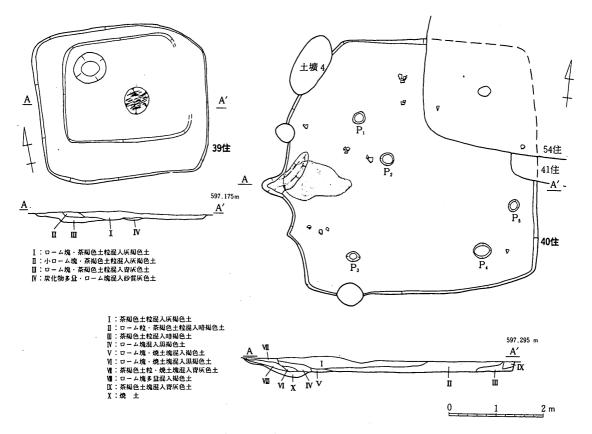
小形の住居址である。黄褐色土中への掘り込みであるが、南側は溝1上に乗っておりその部分は溝1の礫が覆土中に含まれている。壁は黄褐色を呈し、ほぼ直に落ち込むが軟弱である。床面は検出面より15cm程で平坦だが軟質であった。カマドは西壁中央やや南側に位置する。粘土袖を設けているが、低くしっかりしたものではない。焚口部より壁上に向かってゆるやかに傾斜している。遺物は少なく、土師器坏・甕、須恵器 駆等が出土している。時期は遺物からして I 期に属する。

第38号住居址

位置 I 地区東端 東側用地外 規模 3.84m×? 平面形 隅丸方形か 主軸方向 N-94°-W ピット 不明

黄褐色土中に掘り込まれている。壁は直に落ち、 床面は平坦である。共に黄褐色を呈し軟弱であった。 カマドは西壁中央に不定形に掘り込まれて構築され ている。粘土袖を設けているが37住と同様にしっか りしたものではなかった。北側には楕円形の石が 立った状態でみられた。

遺物は比較的少ない。土師器坏・小形甕・甕が出土している。遺物からして37住と同様 I 期に属する。



第24図 第39・40号住居 址

第39号住居址

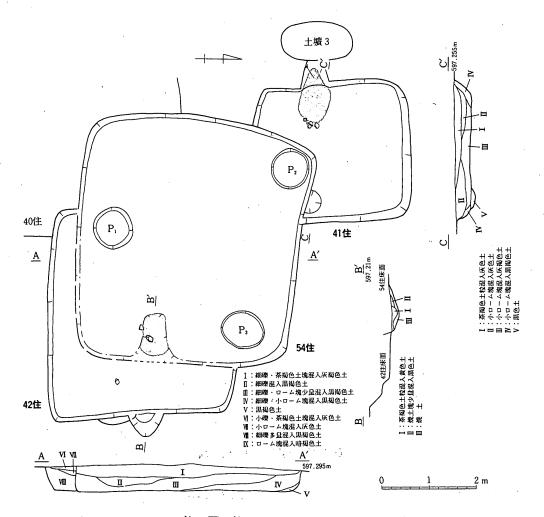
位置 I 地区東南端 規模 3.59×3.24m 平面形 正方形 ピット 70×63×20cm

他の住居址とは趣がやや異なるもので、壁は浅くゆるやかに落ち、やや固い黄褐色土の床があり、更に10cm程下って、2.6×2.2mの方形の落込みとなる。中央には径55cmの範囲で炭化物を多量に含む砂質灰色土があり、炭化物は完全燃焼したワラ状の物である。他に北寄りにピットがある。本址は一応住居址として扱ったが、青灰色土層の存在から、中世の竪穴状遺構とも考えられる。遺物は須恵器片等多少の出土はあったがいずれも覆土からであり、流れ込んだものと思われる。

第40号住居址

位置 I 地区東中央、 $54\cdot41$ 住、土壙 4 に切られる。 規模 5.36×5.29 m 平面形 ほぼ正方形 主軸方向 N -95° -W ピット P_1 - $30\times27\times$ 10 P_2 - $30\times27\times22$ P_3 - $30\times22\times21.5$ P_4 - $39\times34\times7$ P_5 - $27\times23\times7.5$ cm

54住、41住との切り合いでプランがつかみにくく、本址の床面を検出した時点でようやく54住、41住の切り合いを捉えた。床面は褐色土で水平ではあるが軟弱である。カマドは西壁中央にあるが、片袖状で異形であり、その前面には $1.5m \times 80$ cm の範囲に焼土があった。ピットの中には灰色土を含んだものもあり本址に伴わないと思われる P_1 、 P_3 、 P_4 などもある。時期については出土土器から $I \sim II$ 期としたい。



第25図 第41・42・54号住居址

第41号住居址

位置 I 地区中央東寄り 規模 4.44×4.02m 平面形 正方形 主軸方向 N-94°-W ピット なし

壁はなだらかに落ち床は黄色土で軟質。カマドは壁を掘り込み構築。遺物はカマド付近より土師器甕等出土。時期はV~VI期である。

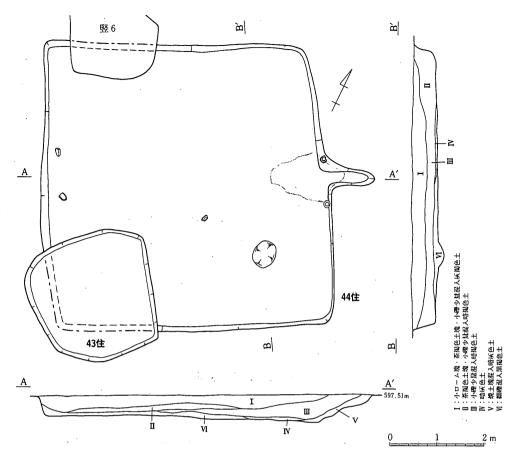
第42号住居址

規模 3.31×2.96m 平面形 正方形 主軸方向 N-88°-E ピット なし 壁は直に落ちる。床は黄色土で軟質。カマドは壁を掘り込み構築。遺物は覆土上層より須恵蓋片多く出土。時期はVI期にあたる。

第54号住居址

規模 5.19×4.77m 平面形 長方形 主軸方向 N-94°-E ピット P₁-88×85× 57 P₂-85×80×47 P₃-94×79×42cm

壁は直に落ちる。床は黄色土、42住と同色で床の 段差もなく切り合い検出困難。カマド焼土検出面を 床とした。土師坏・甕より時期はIX~X期である。



第26図 第43・44号住居址

第43号住居址

位置 I 地区東南 44住を切る 規模 2.66×2.54m 平面形 不整方形 ピット なし

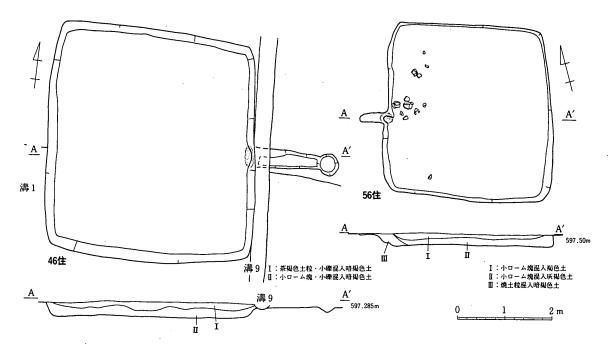
44住上にあるが、プランはわかりにくかった。壁は直に落ち込み、壁高は低く20cm である。床面は黄褐色土でしっかりしていない。ピット、焼土、カマドもなく遺物も僅少であるので、竪穴状遺構と考えたい。本址の時期は出土遺物からみてVI期と考えている。

第44号住居址

位置 I地区東南、43住、竪3に切られる。

規模 6.20×6.03m 平面形 正方形 主軸方向 N-99°-E ピット56×47×23cm

溝1上にあり、プランが明瞭に出ず、当初2軒かとも思われた。壁はほぼ垂直に落ち、床面は判然とせず、細砂礫を含む黄褐色で僅かに東側に傾斜する。カマドは東壁中央にあり、煙道は1mである。カマドの両側には意識的に置かれたように須恵器の坏が1対あった。カマドの南側1.5mには浅いピットがあるだけで、他に柱穴等はない。43住よりは10cm低い。また床面の細礫は溝1にあるためであろう。遺物は前記坏の他須恵器、土師器甕片等で、これらから時期をV期に位置づけたい。



第27図 第46・56号住居址

第46号住居址

位置 I 地区東側44住北東 溝 1 を切り溝 9 に切られる 規模 4.87×4.45m
平面形 正方形 主軸方向 N-90°-E

北側で黄褐色土中に、南側では溝1の砂利層に掘り込まれており、覆土中には溝1の小礫の混入が多い。特に南東隅からカマド近くにかけて多量の礫が流れ込んでいた。床面は黄褐色で平坦ではあるが小礫が多量に混入し良好な状態とはいえなかった。カマドは東壁中央に設けられている。煙道は溝9に切られているものの比較的良好な状態で検出されたが袖は確認されなかった。カマド焚口部は特に掘りくぼめられている様子は窺えず、焼土もわずかに認められた程度である。

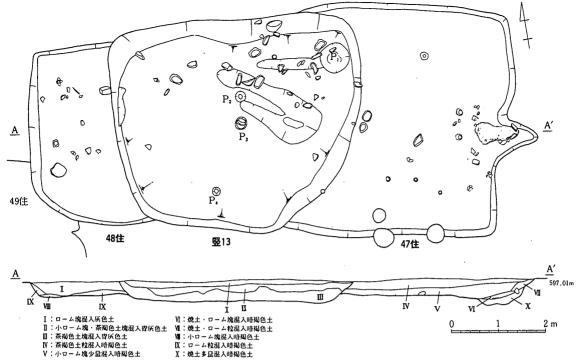
遺物には須恵器坏・甕・壺、土師器甕等がありVII 期に位置づけられる。

第56号住居址

位置 I 地区中央南側 規模 3.70×3.52m 平面形 正方形 主軸方向 N-70°-W ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれており、覆土もほぼ同色を呈すため検出は因難であった。壁はほぼ直に落ち特に北側で顕著であり、壁高は約25cmを測る。床面は褐色土であり、固くはないが平坦であった。カマドは西壁中央に設けられている。幅の狭いカマドで煙道は焚口部から一旦斜めにたちあがってからのびている。またカマド北側には短かい袖状のものが見受けられたが、積極的に袖と見なせるものではなかった。

遺物には須恵器坏・甕、土師器坏・甕等があり、 特にカマド周辺には土師器甕が集中してみられた。 本址は遺物からV~VI期ごろに位置すると思われる。



第28図 第47・48号住居址、竪穴状遺構13

第47号住居址

位置 II地区北東部 西側を竪13に切られる 規模 4.85m×? 平面形 方形 主軸方向 N-108*-E ピット 不明

黄褐色土中に掘り込まれ壁は黄褐色を呈しほぼ直 に落ち込む。東側に本址を切るピットがある。床面 は堅緻な粘質黄色土で良好な状態であった。カマド は東壁中央、壁を掘り込み石2ケが左右に配されて いる。

遺物は土師器坏・埦が多く、他に土師器甕、須恵器坏・甕・四耳壺・長頸壺・短頸壺等が出土している。時期は遺物からみてIX期に属すると思われる。

第48号住居址

位置 II地区中央やや東寄り 規模 3.84m×? 平面形 不整方形か ピット 不明

覆土は47住と同色暗褐色土である。南西部で49住を切り、東半分は竪13に切られている。壁・床面は

共に黄褐色土で軟弱である。

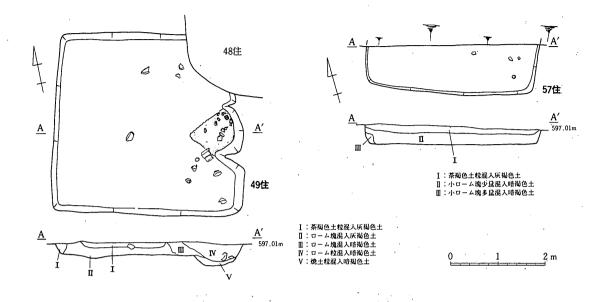
遺物は少ない。覆土下層及び床面より土師器坏・ 境・甕・羽釜、須恵器坏・甕・壺が出土している。 遺物からみて、本址はIX~X期に属する。

竪穴状遺構13

位置 中央やや東寄り 規模 5.40×4.20 m 平面形 楕円形に近い ビット $P_1-66\times66\times30$ $P_2-24\times18\times10$ $P_3-14\times22\times20$ $P_4-18\times16\times26$ cm

覆土は概して礫を含む灰色土である。床は緩傾斜 し、床面は中央部がやや凹み非常に堅緻である。覆 土中の石は落ち込んだものと思われる。

遺物は他の竪穴状遺構に比べ多いがほとんどが47、48住のものと思われる。土器片と他には中国龍泉窯しのぎ蓮弁の青磁碗1片と北宋銭等が出土している。灰色土の覆土・遺物からして中世に属すると思う。



第29図 第49・57号住居址

第49号住居址

位置 II地区中央東側 北東隅を48号住に切られる 規模 4.12×3.81m 平面形 方形 主軸方向 N-108°-E ピット なし

壁は黄褐色土であり、ほぼ直に落ち込む。南壁中央から北東隅にかけて1 cm 大の小礫が混入している。床面も同色でありやや固く、特に中央部では比較的良好な状態であった。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。本址構築の際に壁の一部を袖として利用できるように作られている。この様な傾向は他の住居址にも窺うことができるが、そのうちでも一番顕著なものであった。又、カマド前は深く落ち込んでおり焼土が厚く堆積していた。

遺物はカマド内から土師器甕、カマド前およびカマド南際からは土師器内黒境、坏が5個体程出土している。カマド周辺の覆土中層から床面上にかけて土師器杯・埦類を中心として比較的多い。その他に

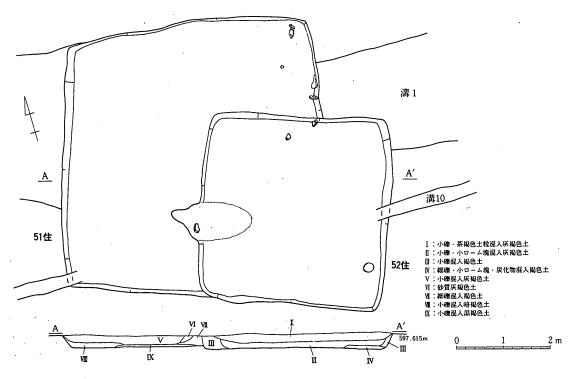
は土師器皿・小形甕、須恵器四耳壺・甕が出土している。遺物からして本址はIX期に属すると思われる。

第57号住居址

位置 II地区北側東寄り 規模 3.67m×? 平面形 方形か ピット 不明

北側に生活道路があり本址は南側 ¹/₃程度しか検出 調査できなかった。黄褐色土中に掘り込まれ、暗褐 色のきめ細かな土が落ち込んでいる。壁・床面とも 黄褐色を呈し、壁は直に落ち良好である。床面も平 坦で堅緻な状態であり、比較的良好である。東側床 面上に焼土がみられ、北側は盛土中に広がる様子か らカマドは東壁にあるものと思われる。

遺物は少ない。土師器坏・塊・甕、須恵器長頸壺・ 甕片が出土している。以上の遺物からして本址はIV 期に属すると考えられる。



第30図 第51・52号住居址

第51号住居址

位置 I 地区中央南西寄り 52住・溝10に切られ、 溝1を切る 規模 5.72×5.47m 平面形 方形 ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 又、東・西壁で溝1を切った面は小礫が混入する。 床面は、ローム塊混入黄色土で比較的堅緻である。 カマドは当初、石が東壁やや北側にあり袖つきのカ マドであると予想されたが、焼土・掘り込みも見あ たらず不明であった。

遺物は、住居址北東部より、口縁部に特徴のある 須恵器鉢が出土。その他覆土下層から床面にかけて、 須恵器坏、土師器甕が出土している。本址の時期は III期である。

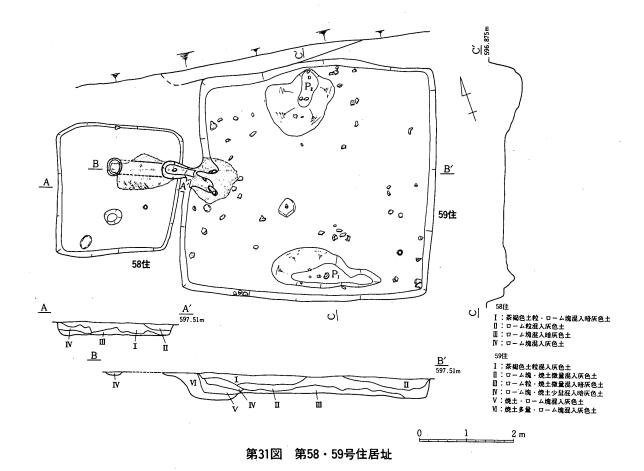
第52号住居址

ピット なし

位置 同上 51住・溝1を切る 規模 4.06×3.90 m 平面形 正方形 主軸方向 N-76°-W

黄褐色土中に小礫混入黒褐色の覆土を持つ遺構として検出された。壁はほぼ直に落ちる。床は黄色土で比較的堅緻である。カマドは西壁中央やや南よりに位置し、壁を浅く掘り込み、袖はない。

遺物はほとんどなく、須恵器坏、土師器小形甕・ 甕がわずかに出土しただけであった。本遺構の時期 は、VII期にあたる。



第58号住居址

位置 III地区北側中央やや西寄り、59住煙道に切られる 規模 2.73×2.57m 平面形 正方形 ピット 37×34×4 cm

黄褐色土中に小ローム塊少量混入黒灰色を落す、 Ⅲ地区の他の住居址とは異なる土質の遺構としてと らえた。壁はほぼ直に落ち、床面は検出面より20cm と浅く、黄褐色土で軟質であった。カマド等の施設 は認められなかった。

遺物は少なく、覆土中より土師器、須恵器甕片が、 北壁中央より須恵器蓋が出土しているのみである。 時期はV期にあたる。尚、本遺構は他の住居址とは 性格が異なる事から、竪穴状遺構の範疇と考えたい。

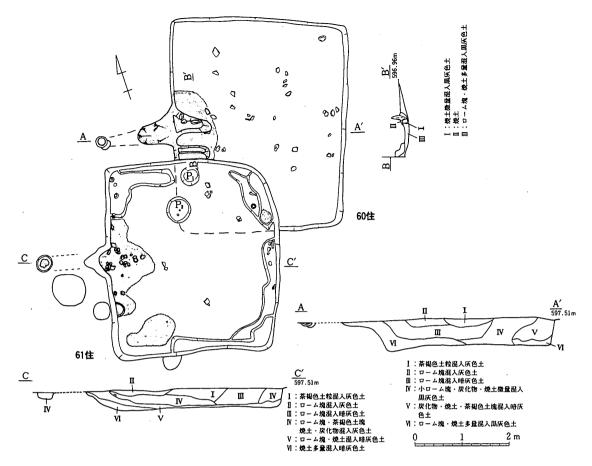
第59号住居址

位置 III地区北側中央 58住を切り北側中世遺構? に切られる。規模 5.35×5.04m 平面形 正 方形

主軸方向 N-72°-W ビット P₁-234×81× 26 P₂-145×131×34cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 床面は黄色土で堅緻である。カマドは西壁中央に位置し、壁を深く掘り込み、煙道がのびており、両袖 を持つ。南側袖のみ石芯としている。南壁と北壁の ピットは、焼土粒・炭化物を含む黒灰色を落とす。

遺物は覆土上層から床面にかけて、又カマド付近 ビット内より、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が 多量に出土している。中でも須恵器高台杯の量は著 しい。時期はVI期にあたる。



第32図 第60・61号住居址

第60号住居址

位置 III地区北東寄り、南西隅を61住に切られる 規模 4.43×3.76m 平面形 長方形 主軸方向 N-66°-W ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 床面は黄色土で比較的良好である。カマドは、西壁中央に位置し壁を掘り込み、煙道がのびており、両袖を持つ。北側袖は石芯としているが、南側袖は石を用いてはおらず、不明確であった。

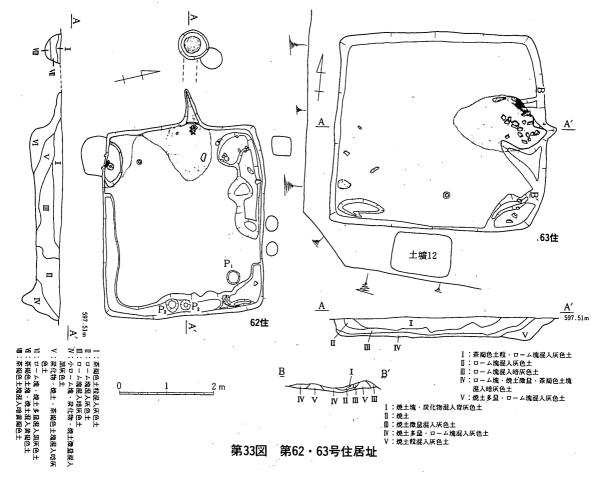
遺物は比較的多く、住居址全域にわたって覆土上層から床面にかけ須恵器坏・蓋、土師器甕等が出土している。又住居址南東部より砥石、煙出口に、完形の須恵器蓋が裏がえしで出土している。時期はVII期にあたる。

第61号住居址

位置 III地区中央東寄り、60住・建13を切る 規模 4.10×3.69m 平面形 長方形 主軸方向 N-69°-W ピット P₁-39×38×12 P₂-52×51×15cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 床面は黄色土で良好である。浅い周溝が東・南・北 に検出された。カマドは西壁中央に位置し、壁を掘 り込み煙道は浅い。住居址東側北寄りと周溝内に、 焼土がみとめられた。

遺物は、北西床面×地点より青銅製銙帯が、北東側より土錘が出土している。その他にカマド付近から土師器坏・甕・小形甕、須恵器坏・蓋等多量に出土している。時期はVIII期にあたる。



第62号住居址

位置 III地区南東隅 建12を切る 規模 $4.02 \times 3.19 \mathrm{m}$ 平面形 長方形 主軸方向 N $-77^{\circ} - \mathrm{W}$ ピット $P_1 - 29 \times 28 \times 7$ $P_2 - 21 \times 22 \times 20$ $P_3 - 28 \times 26 \times 24 \mathrm{cm}$

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 床面は黄色土で堅緻である。又、周溝が東・南・北に 検出された。カマドは西壁中央に位置し壁を掘り込 み煙道がのび煙出口が建物址13の柱穴を切る。南西 隅の周溝は深く落ち込み多量の焼土を含んだ黒灰色 土であり、火と関係のある施設と考えられる。

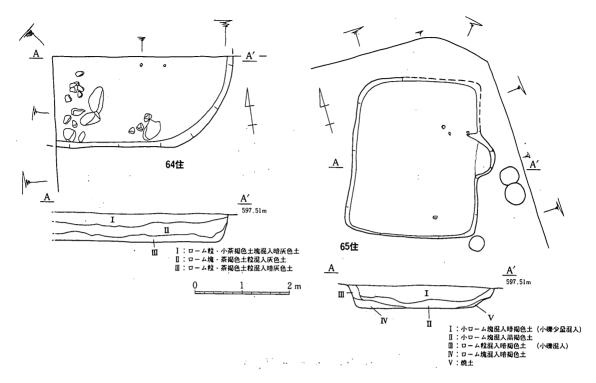
遺物は南東隅周溝内より土製紡錘車が、南西隅周 溝からは土錘が出土している。その他の遺物は覆土 下層から床面にかけて比較的多く、土師器坏・埦・ 甕・小形甕、須恵器坏・蓋・短頸壺・甕等が出土し ている。時期はWIII期にあたる。

第63号住居址

位置 III地区南西隅 規模 4.49×4.12m 平面形 正方形 主軸方向 N-85°-E ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。 床面は黄色土でやや軟質である。カマドは、東壁中 央に位置し、壁を浅く掘り込んでおり、両袖をもつ。 煙道は見あたらなかった。住居址南東隅に落ち込み がある。

遺物は床面上には少なく、カマド内からカマド前にかけて土師器甕が、南東隅落ち込みから、須恵器甕片・坏が出土しているのみで、その他の遺物は、 覆土下層より、須恵器坏・蓋・短頸壺・四耳壺等の出土をみる。時期はVI期にあたる。



第34図 第64・65号住居址

第64号住居址

位置 IV地区北西隅 $\frac{3}{4}$ 程は盛土中 規模・平面形 主軸方向・ピット 不明

覆土は灰色土で壁はほぼ直に落ち床面近くで急に 内側に入る。検出された部分から推定して平面形は 隅丸方形ないし楕円形と思われる。床面は全体的に よい状態で把えることができ、平坦で堅緻な黄褐色 砂質土である。床面には赤い鉄分が沈殿しており、 南壁際に河原石が並べられたような状態でみられ た。

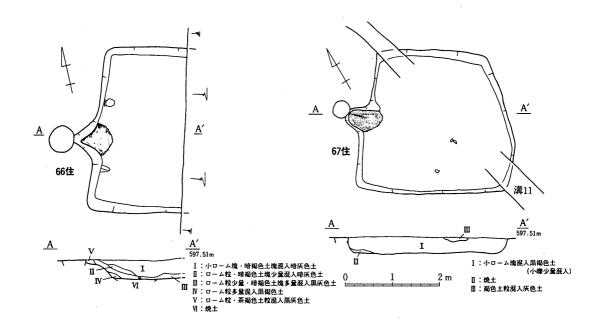
遺物は非常に少なく、土器片と銅銭がある。土器は覆土上層より青磁の高台部が出土している。銭は北宋銭・元豊通宝である。灰色土の覆土、遺物、銭からして時期は中世に属すると考えられる。なお本遺構は他の住居址とは異なり、竪穴状遺構と分類した方がよいと思う。

第65号住居址

位置 IV地区北東隅 規模 3.24×2.68m 平面形 長方形 主軸方向 N-107°-E ピット なし

壁はほぼ直に深く落ち込み、黄褐色を呈し小礫が 混入している。北東隅の一部はブランが良くわから なかった。床面も黄褐色であり平坦で固く良好であ る。カマドは東壁中央を掘り込み、北側は壁の一部 を内側に少し出して袖の役割をはたしている。焼土 がカマドの部分のみに比較的狭い範囲で見られた。 煙道などは見当らなかった。

遺物は少ない。覆土下層東側よりいわゆる甲斐型の土師器坏が出土している。その他には覆土上層から下層にかけて須恵器坏・蓋・短頸壺・甕・四耳壺、土師器坏等が認められた。時期はV期からVI期である。



第35図 第66・67号住居址

第66号住居址

位置 IV地区北東 東側盛土に隠れる 規模 3.50m×? 平面形 方形か 主軸方向 N-76°-W ピット なし

黄褐色土中に掘り込まれ覆土は暗灰色を呈し検出は容易であった。壁はほぼ直に落ちる。床は堅緻な黄色粘質土で全般的に平坦で良好である。カマドは西壁中央に掘り込んで構築されている。南側には袖石として用いられたと思われる石が1つあったが、北側に袖は確認できなかった。またカマド前部は浅く掘り込まれ焼土の堆積がみられる。

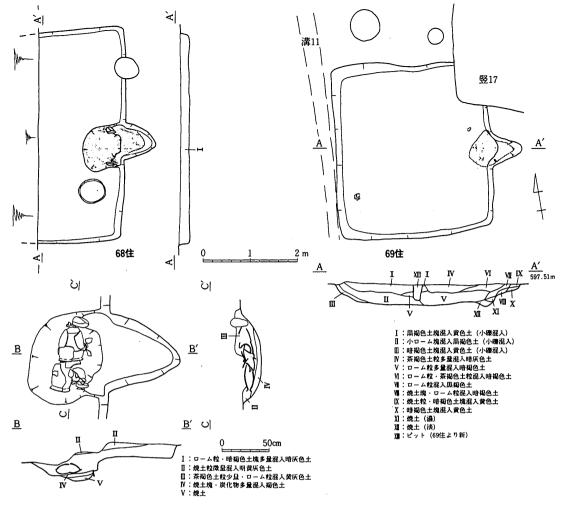
遺物は少なく、カマド北側から出土した完形の土 師器小形甕の他、須恵器甕、土師器坏・甕片がみら れる。遺物から本址はⅧ期に属すると思われる。

第67号住居址

位置 IV地区北東 溝11に切られる 規模 3.31×3.03m 平面形 不整方形 主軸方向 N-63°-W ピット なし

北側は砂利層に掘り込んであり、そのため覆土中には小礫が混入し特に混入が多かった北東隅ではプランの検出が困難であった。不整方形としてとらえたが、むしろ方形を呈す住居であったと考えられる。壁はほぼ直に落ち、床は黄色土でほぼ平坦でありしっかりしている。カマドは壁中央を楕円形に掘り込んで構築されており、北側には短かい袖が確認できた。焼土はカマド内で厚さ10cmを測るものの全体量は少ないものであった。

遺物は須恵器坏・甕、土師器甕片がわずかに出土 しているのみである。遺物から見て本址はⅦ期に属 する。



第36図 第68・69号住居址

第68号住居址

位置 IV地区西側やや北寄り、西約半分が盛土中 規模 4.50m×? 平面形 方形か 主軸方向 N-90°-E ピット 59×52×10cm

壁はほぼ直に落ち込む。床面は黄褐色土、軟弱ではあるが平坦をなす。カマドは東壁中央に位置し石芯の短かい袖をもつ。焚口部からは2個体の甕が入れこの状態で出土した。その下には多量の焼土と炭化物が見られた。甕内部の土は覆土と同色であり、カマド際にあったものが遺構廃棄時以降に転倒したものであろうと考える。

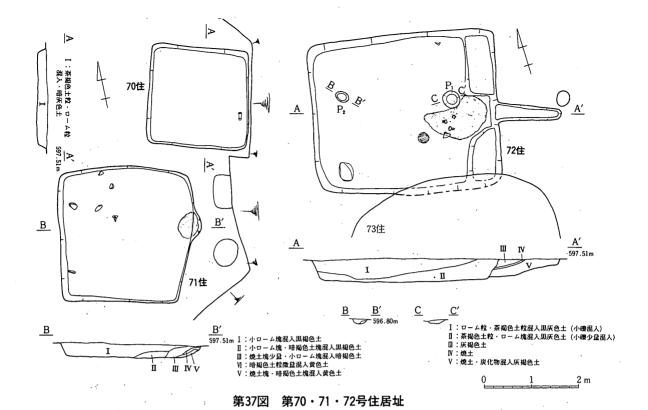
遺物は非常に少なく、覆土下層から出土した須恵 器蓋が主なものである。遺物から見てII期に属する。

第69号住居址

位置 IV地区東側やや北寄り、竪17に切られる。 規模 3.63×3.32m 平面形 方形 主軸方向 N-98°-E ピット なし

壁、床とも黄褐色土を呈し、明瞭で固く良好である。カマドは東壁中央に壁を掘り込んでいる。

遺物は少なく覆土上層~床面まで見られ、須恵器 坏・蓋・甕、土師器坏・甕・小型甕がありⅧ期に属 する。



第70号住居址

位置 IV地区中央東端71住北 規模 2.19×2.10m 平面形 正方形 ピット なし

壁はややゆるやかに落ち、床はやや軟弱な黄色土である。カマドは検出されなかった。遺物は覆土中層からの須恵器長頸壺頸部のみであり、III~IV期に位置づけられる。尚、本址は竪穴状遺構としてとらえるほうが妥当であろう。

第71号住居址

位置 IV地区中央東70住南 規模 2.85×2.26m 平面形 方形 主軸方向 N-102°-E ピット なし

壁はほぼ直に落ち、床面はやや軟弱な黄色土である。カマドは東壁中央を浅く掘り込んで構築されているが、袖・煙道は検出されなかった。

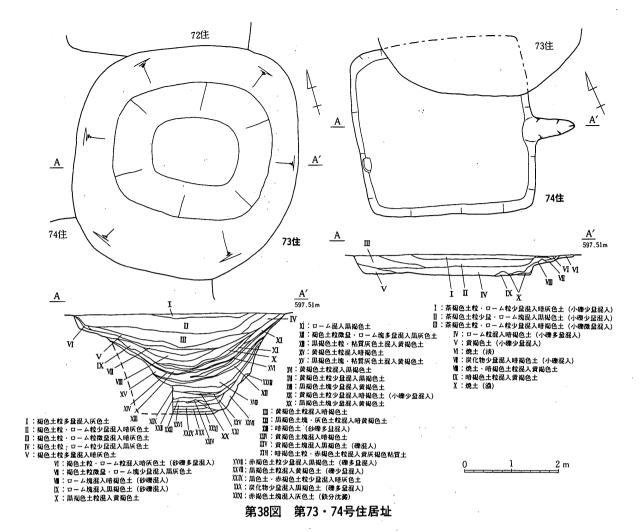
遺物は覆土中層南側を中心に出土し全て土師器甕である。少量のため不明確ではあるがIV期以前に位置づけられるものと思われる。

第72号住居址

位置 IV地区南東 73住に切られる 規模 $3.96 \times 3.32 \mathrm{m}$ 平面形 長方形 主軸方向 $\mathrm{N}{-}103^{\circ}{-}\mathrm{E}$ ピット $\mathrm{P_1}{-}37 \times 36 \times 30}$ $\mathrm{P_2}{-}30 \times 21 \times 14 \mathrm{cm}$

砂利層に掘り込んであり覆土中には小礫がはいっている。壁はややゆるやかに落ちるが、東壁では幅約50cm、高さ約30cmにわたってベッド状になっている。床はやや軟弱な黄色土で平坦である。カマドは東壁中央に構築されており、ベッド状のものが袖の役割をしている。

遺物はカマド前に集中し須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕等がみられる。また北壁東寄りから鉄製品が出土している。本址はVI期に属する。



第73号住居址

位置 IV地区南東 72・74住を切る 規模 4.94×4.73m 平面形 不整円形 ピット なし

当初、灰色土を含むVII層までを覆土としてとらえていたが、底面が安定しないためトレンチを入れて南東側を掘り下げた結果、検出面より210cmを床面としてとらえた。断面はスリバチ状を呈して、覆土は上層が灰色、中層以下は黄褐色土と黒褐色土の互層が基本になっている。床面は黄色で平坦をなすようである。遺物は小形の土師質土器が上層から、縄文土器小片が下層から得られたが共に流れ込みと考える。本址は検出時住居としてとらえたが調査結果より住居とはし難い。その性格は不明であるが、覆

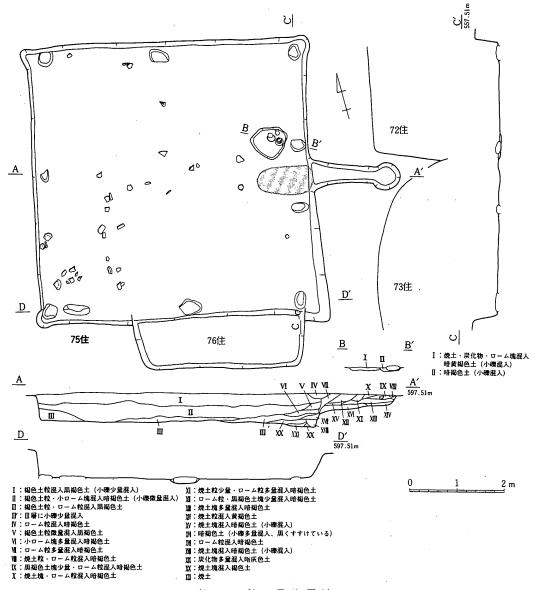
土上層の灰色土は他の中世の遺構に共通にみられた ものであり近世までは下らないと思われる。

第74号住居址

位置 IV地区南東 73住に切られる。 規模 3.77×3.60m 平面形 正方形 主軸方向 N-109°-E ピット なし

砂利層に掘り込んであり覆土には小礫が混入する。壁はややゆるやかに落ち、床面は小礫が混じる 黄褐色土で平坦をなす。カマドは東壁中央に設けられており、特に煙道内に焼土の散布が認められた。

遺物は須恵器長頸壺、土師器甕片等が出土しているが数は少ない。遺物から見て本址はV~VI期に属する。



第39図 第75号住居址

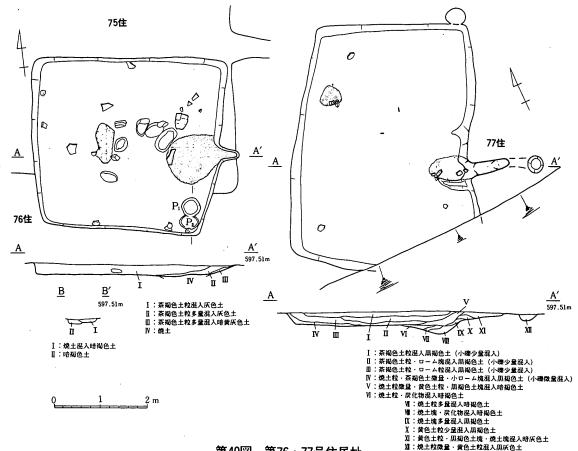
第75号住居址

位置 IV地区中央南側 76住にきられる 規模 5.98×5.85m 平面形 正方形 主軸方向 N-96°-E ピット 71×67×15cm

方形の大形住居で四隅が丸く突出する特徴を有す。掘り込みは深く壁は直に落ちる。床面は黄色粘質土の貼床で平坦をなし、特に中央部は堅緻であった。また四隅および各辺の中央壁際には比較的平坦な丸石が掘り込まれて配置されている。カマドは東壁中央に設けられている。袖は検出されなかったが

比較的しっかりした構造であり、煙道内には焼土塊 が多量に散布しており、煙出口には須恵器甕片が数 点みられた。

遺物は覆土上層~床面まで全体的に多量出土しており、須恵器坏・蓋・盤、土師器坏・小形甕・甕等がみられる。特に床面上では南西側に破片が散在している他、ピット上面からは完形の坏類が重なって出土した。また文字の書かれた紙および漆が付着した須恵器坏がそれぞれ出土している。その他には北壁際より鎌の出土があった。遺物から本址はV期に位置づけられる。



第40図 第76・77号住居址

第76号住居址

位置 IV地区中央南側 75住を切る 規模 4.02×3.62m 平面形 不整方形 主軸方向 N-101°-E ピット P₁-41×40× 9 P₂-42×30×8 cm

東側および南側は砂利層に掘り込んであるが周辺の他の住居と違い覆土への礫の混入は少ない。壁ははほ直に落ち、床は小礫が多量に混じる堅緻な黄褐色土で平坦をなしている。尚、中央の覆土中には7つの大石が含まれていた。カマドは東壁中央に設けられておりカマド前の床面には焼土が広く散布している。焼土は中央床面にも薄くみられた。

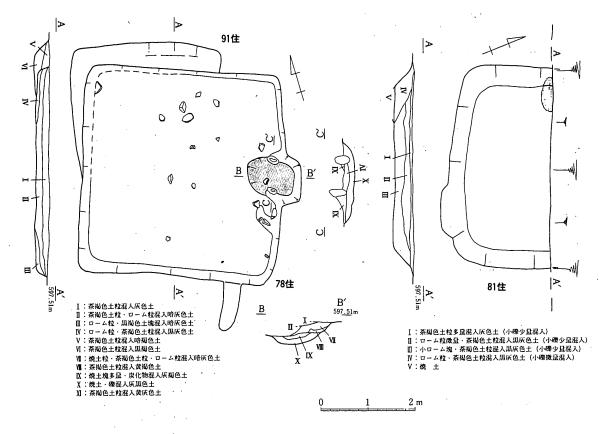
遺物は覆土下層~床面にかけて出土し、須恵器長 頸壺・坏・甕、土師器坏・埦・甕、灰釉碗がみられ る。本址は遺物よりX期に位置づけられよう。

第77号住居址

位置 IV地区中央南端 南側盛土に隠れる 規模 5.19×3.63m 平面形 長方形 主軸方向 N-123*-E ピット なし

砂利層に掘り込んであるため覆土中には小礫が混入する。壁はややゆるやかに落ち、床は黄色土でやや起伏をなしている。カマドは東壁中央に構築されている。南側にはしっかりとした粘土袖が確認できたが、北側にはやや短かな袖状のものが見受けられたが判然としなかった。焼土はカマド内に厚く堆積している他、北西側床面にも少量確認された。

遺物は主として覆土下層〜床面にかけて土師器 坏・甕・甑把手が出土している他、北西側の覆土中 層(×地点)から金環が出土している。遺物から本 址は I 期に属する。



第41図 第78・81・91号住居址

第78号住居址

位置 IV地区最西端 91住を切る 規模 4.29×4.29m 平面形 正方形 主軸方向 N-104°-E ピット なし

床面は黄褐色土で平坦ではあるが、やや軟弱である。カマドは東壁中央に位置し、カマド両側には礫があり、芯材として用いられたものと思われる。床面には10~20cm あまりの礫が散在している。柱穴はない。本址の北側には砂利を含む溝があり、ために本址覆土では北側に小礫が多く混入し、南にいくに従って減少する。遺物は床面よりも覆土中・下層の方が多く、須恵器、土師器坏・甕等が出土している。本址の時期は出土遺物によりVII~VIII期と推定される。

第81号住居址

位置 IV地区最北端 規模 4.25m×? 平面形 方形か 主軸方向 N-67°-W ピット なし

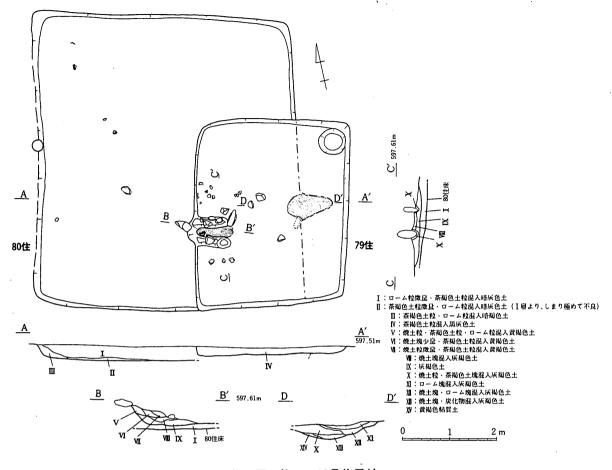
 $\hat{A}^{(i)}$.

壁はゆるやかに傾斜し、西壁中央に焼土がある。 床は小礫を若干含む堅緻な黄色粘質土である。遺物 は須恵器甕片等少量であるが、時期的にはV~VI期 とみたい。

第91号住居址

位置 IV地区最西端 78住に切られる 規模 不明 平面形 方形か ピット 不明

西・北二辺を残すのみで、遺物も少ない。切り合いの関係、遺物によりV~VI期と思われる。



第42図 第79・80号住居址

第79号住居址

位置 IV地区中央西側 西側80住を切る 規模 3.96×3.29m 平面形 長方形 主軸方向 N-82*-W ピット 57×55×17cm

東壁はゆるやかな落ち込みを示す。西側の23程が80住の覆土の上に設けているため床面は不明瞭であり、80住覆土のローム粒が見られる所を床面として把えた。床面は軟弱である。西壁中央寄りに石組みカマドが構築されている。煙道等は見当らなかった。

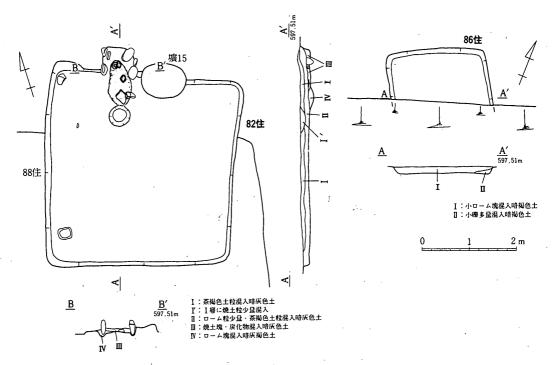
遺物はカマド付近に多く、土師器杯・埦・甕、須 恵器長頸壺・甕、灰釉碗・瓶等が出土している。時 期はIX期からX期である。

第80号住居址

位置 IV地区中央西側 東側を79住に切られる 規模 6.12×(5.52) m 平面形 方形 主軸方向 N-84°-E ピット なし

壁は直に落ち込んでいる。西側上面検出がやや困難であった。床面は黄褐色土を呈し平坦である。カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、煙道があったものと推察するが、79住に切られており、明確には分らない。

遺物は覆土中層から下層にかけて比較的多く土師 器坏・甕、須恵器坏・甕等が出土している。時期は Ⅷ期に属する。



第43図 第82・86号住居址

第82号住居址

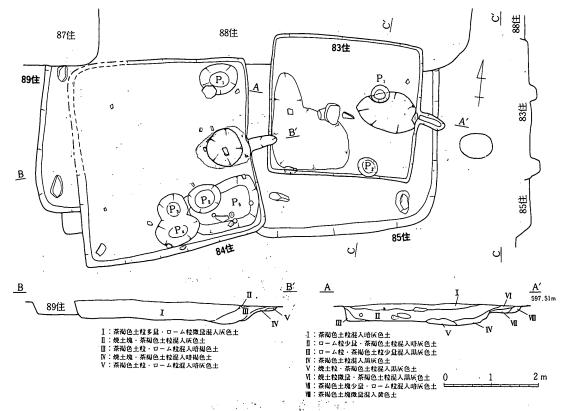
位置 IV地区南西部 88住を切る 土壙15に切られる 規模 4.07×4.00m 平面形 正方形 主軸方向 N-7°-E ピット 45×42×8 cm

壁はほぼ垂直で、その高さは20cmである。床面は 黄褐色土で平坦であるが、やや軟弱である。カマド は北壁やや西寄りにあり、礫の散乱状況からみて、 石組みカマドではないかと思われる。カマド前に ピットがあるが浅く、カマド使用にはさして邪魔に ならない深さである。カマドの東側には95×80cm の穴が本址を切っているが、この穴の性格は不明で ある。遺物は覆土上層から須恵器のすり鉢底部が検 出されたが、これは明らかに流れ込んだものであり、 本址に属さない。他に覆土下層から床面までの間で、 土師器、須恵器坏・甕片などの他、灰釉皿・短頸壺 片等が出土している。本址の時期はこれら出土遺物 によりX期とみたい。

第86号住居址

位置 IV地区最南端 規模 2.14m×? 平面形 方形か ピット 不明

発掘区域南端のため排土の山により、北側半分あまりしか調査ができなかった。壁は、ゆるやかにおち、その高さは13cm と浅い。床面は黄褐色土で軟らかい。柱穴・ピット・カマド等はなく、また遺物も全くないので、住居址というより竪穴状遺構とした方が良いのかも知れない。従って本址の時期は不明である。



第44図 第83・84・85・89号住居址

port of the Contract of

第83号住居址

位置 IV地区南西 85・88住を切り84住に切られる 規模 3.16×2.93m 平面形 正方形 主軸方向 N-103°-E ピット P₁-39×37× 13 P₂-41×40×13cm

床は黄褐色粘質土の堅緻な貼床である。遺物は主としてカマド近くから出土し、土師器坏・埦・甕、 須恵器甕等がありIX期に位置づけられる。

·ŧ.

第84号住居址

位置 $83 \cdot 85 \cdot 88 \cdot 89$ 住を切る 平面形 正方形 規模 4.14×3.76 m 主軸方向 N-85°-E ピット $P_1 - 80 \times 64 \times 32$ $P_2 - 71 \times 59 \times 34$ $P_3 - 62 \times 60 \times 36$ $P_4 - 97 \times 66 \times 36$ $P_5 - ? \times 100 \times 14$ cm

床は堅緻な黄褐色土である。遺物は覆土上層から 多く、特に南側のピット群に集中していた。須恵器 坏・甕、土師器坏・埦・甕等がありX期に属する。

第85号住居址

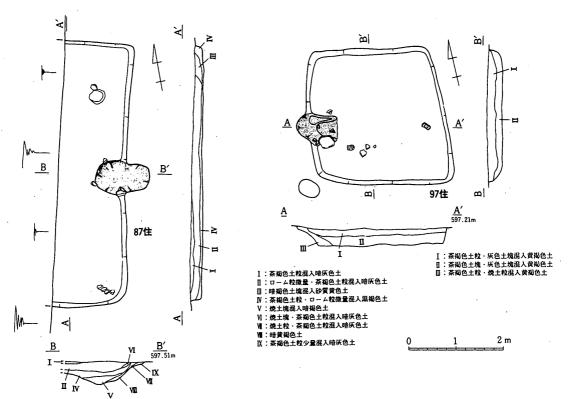
規模 不明 平面形 隅丸方形か

床面は黄色土で軟弱である。南東隅・北東隅の床面には大石があった。遺物には須恵器甕、土師器坏・甕等がありIV期に属する。

第89号住居址

規模 不明 平面形 不明

床面は黄色土で軟弱である。西壁際には大石がみられる。遺物は少なく不明確であるが、切り合い関係も考慮に入れるとVIII~IX期と思われる。



第45図 第87・97号住居址

第87号住居址

位置 IV地区西側南、西側光以上盛土中 88住を切る 現模 5.55m×? 平面形角のはった方形主軸方向 N-102°-E ピット 不明

検出面より住居南東隅を中心に焼土がみられた。 壁はほぼ直に落ちる。床は黄褐色でやや固く南側に 焼土がひろがる。カマドは東壁にあり、壁を楕円形 に掘り込み構築され、袖はない。又、住居址南東隅 床面より、約10cm 程の大ぶりの石が、あたかも配列 されたかのように出土している。この石は、他の住 居から出土している編物用石錘に比べ大ぶりだが、 同じ用途の物と考えたい。

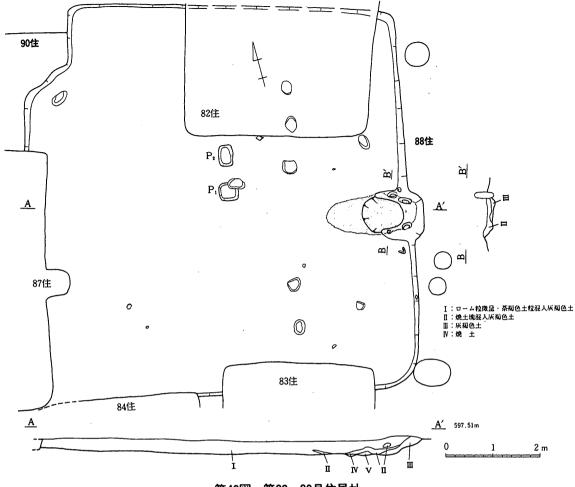
遺物は覆土中層より主に出土し、土師器坏・甕、 須恵器坏・蓋・四耳壺・甕、灰釉碗・皿のそれぞれ 小片がみられた。時期は、X期にあたる。

第97号住居址

位置 V地区北西 規模 2.95×2.89m 平面形 不整方形 主軸方向 N-81°-W

小形の住居址である。壁はほぼ直に落ち込んでいる。床面は黄褐色を呈し平坦である。カマドは壁を 浅く掘り込んでおり、両袖を持つ。南側袖は石芯と しているが、北側袖は石を用いてはおらず、不明確 であった。

遺物は全般的に少なく、カマド前床面より土師器 小形甕が完形で出土している。その他、カマド内よ り須恵器坏・蓋片が、住居址中央東より須恵器坏が 出土している。時期は、V期にあたる。



第46図 第88・90号住居址

第88号住居址

住に切られる 規模 8.20×8.15m 平面形 不整方形 主軸方向 N-96°-E $E_{\nu} \rightarrow P_1 - 42 \times 36 \times ? P_2 - 45 \times 30 \text{cm} \times ?$

大形の住居で検出時には数軒の重複が考えられた が最終的に一軒の住居としてとらえた。床は堅緻な 黄褐色で平坦をなし、西側にいくに従い床面はすこ しずつ上昇しているようである。カマドは東壁中央 に設けられており石芯の袖をもつ。

遺物には須恵器坏・蓋・甕・壺、土師器坏・甕等 があり、床面よりも覆土中において多く出土した。

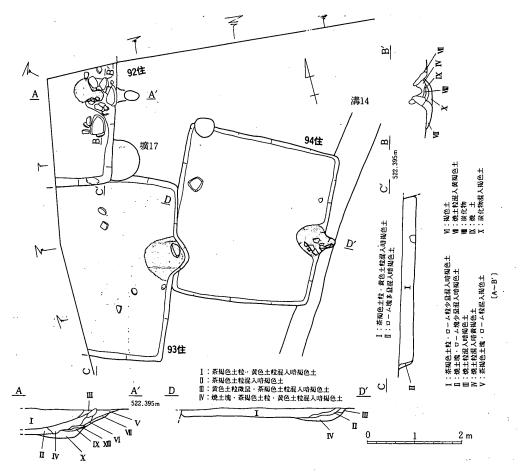
またカマド南際より鋤頭が出土している。本址は遺 位置 IV地区南西 85・90住を切り82・83・84・87 物から見るとIV~V期に位置づけられる。

> 尚、本址のカマドより2 m 東に土師器甕が2点横 位で出土した。そのレベルは住居の検出面より 10~15cm 高く周囲に焼土が散布していた。付近の 住居よりも古く既に破壊された住居のカマドとして 考えられる。土器はIII期に属するものである。

第90号住居址

位置 87・88住に切られる 西側盛土に隠れる

プランを確認したのみで掘り下げ調査は行なわれ なかった。



第47図 第92・93・94号住居址

第92号住居址

位置 VI地区北西 93住を切る 規模 不明 平面形 方形か ピット 不明 主軸方向 N-107-E

壁は内傾して落ち、床面はやや軟弱な黄色土であった。カマドは石組で煙道は壁より20cmと短かい。カマド内および北際より灰釉碗・段皿、土師器皿等が出土している。本址は7回期に位置づけられる。

第93号住居址。

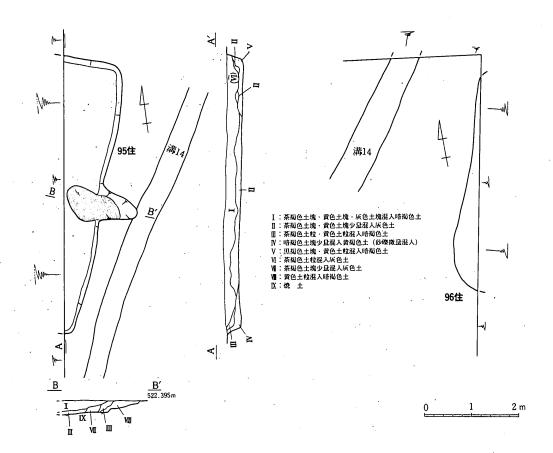
位置 92住に切られ94住を切る 規模 3.99m×? 平面形 方形か 主軸方向 N-128°-E ピット 不明 壁は直線的に内傾し、床面はやや軟弱な黄褐色土であった。カマドは壁を丸く押し出した形をとっている。遺物は須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕等がありVI~VII期に位置づけられる。

第94号住居址

Burn Bry S.

位置 93住に切られ溝14を切る 規模 3.51×3.29m 平面形 正方形 主軸方向 N-119°-E

壁は直に落ち、床は堅緻な黄褐色であり小礫が少量混入していた。遺物はカマド内から土師器甕片がまとまって出土した他、須恵器坏・蓋・壺、土師器坏等を出土しVI期に位置づけられる。



第48図 第95・96号住居址

第95号住居址

位置 VI地区南西 西側盛土に隠れる 規模 5.77m×? 平面形 不明 主軸方向 N-115*-E ピット 不明

VI地区の他の住居址と同様に砂質黄色土中に掘り込まれている。東側しか調査していないので全容はつかみにくいが、壁は斜めに落ち35cmを測る。床面は軟質で粘性をもった黄色土である。カマドは東壁中央にあり焼土は薄くひろがる。煙道は形を整えておらず僅かに溝14を切っている。

遺物は少なく須恵器の坏・蓋・壺片、土師器甕片

等が出土したにすぎない。本址の時期は出土土器から推してVI~VII期とみたい。

第96号住居址

位置 VI地区北東 東側盛土に隠れる

規模 不明 平面形 不明 ピット 不明

溝14の東側2 m あまりのところに位置する。盛土に隠れ、西側プランを検出したのみである。北側からVI~VⅢ期に属する土師器甕片がまとまって出土している。

2 掘立柱建物址

今回の調査で検出された掘立柱建物址は、I地区11棟、III地区2棟、V地区2棟の計15棟である。 これらについて、建物の規模・柱穴の掘り方・集落内での建物の位置および企画性等について窺え ることを簡単にふれたい。尚、建1・12は調査区域外へさらに続くことも予想されたが残存部だけ について考えていく。

15棟の建物址を規模別に分類すると、1間×1間が1棟(建11)、2間×1間が3棟(建9・10・12)、2間×2間が2棟(建1・13)、3間×1間が1棟(建6)、3間×2間が6棟(建3・4・7・8・14・15)、3間×3間が2棟(建2・5)となる。面積は全て30m²以下であり、特に建10・11は小形であった。また、建物の構造から総柱式と側柱式に分類すると、総柱式は4棟(建1・2・4・15)だけであり、側柱式が多い。柱間寸法はほぼ1.5~2.2mで、各建物址によって異なる。今後、仔細な検討が必要であろうが、全柱穴に柱痕が観察できた建7では桁行が1.8~2.0m、架行が2.0~2.1mを測る。また柱痕の径は20cm 程のものが多かった。なお参考に、主柱穴が最も良好に確認された12住および、柱の礎石が確認された75住(共にV期)の柱間寸法を求めたところ前者は3.6~3.7m、後者は2.4~2.9mであった。柱穴の掘り方は全て坪堀で、平面形には主として方形のものと円形のものがみられる。方形のものは建4・7・8・9・10で全てI地区の中央からやや東側に位置する。また柱穴の規模は、概して方形のものの方が大きいことが窺える。

次に集落内における建物の位置関係を見た場合、建 $1\cdot11$ を除き全ての建物址が重複あるいは接していることが注目される。特に I 地区中央やや東側には建 $4\sim8$ の5棟が集中している。これらの主軸方向はほぼ、建 $4\cdot7$ がN-10°—Eに、建 $5\cdot7\cdot8$ がN-85°—Wになっており、ある程度の企画性が読みとれる。また周辺には建物址として把握することはできなかったが、多数の良好なピットが検出され、柱痕をもつものもみられた。おそらく継続して建物があったと考えられ、集落において建物が一定の位置を占めていたことが窺える。

最後に住居址との切り合い関係によってある程度時期が求められる建物址についてふれたい。建 $2\cdot3$ は共にIV期以前に位置づけられ、周辺の $5\cdot6\cdot10\cdot11$ 住と同時期に属すると思われる。おそらく今回検出された建物址の中で最も古いものであろう。建4 はVII~VIII期以前に位置づけられ、遺物は $V\cdot V$ II期ごろの様相を呈している。周辺の建物址も出土土器からその前後に位置づけられると思われる。建 $12\cdot13$ は共にVIII期以前に位置づけられ、遺物はVI期以前の様相を呈している。III地区には $V\sim V$ III期の住居址が検出されているが、そのいづれかと同時に存在したことは間違いないであろう。

以上、検出された掘立柱建物址について概観してきたが、資料的制約等から十分な分析・検討ができなかった。松本平では近年、掘立柱建物址の検出例が多くなってきており(1)、それらも含めて今後の課題としたい。 (山田 真一)

註(1) 1983年に調査された松本市下神遺跡では35棟が検出されている。

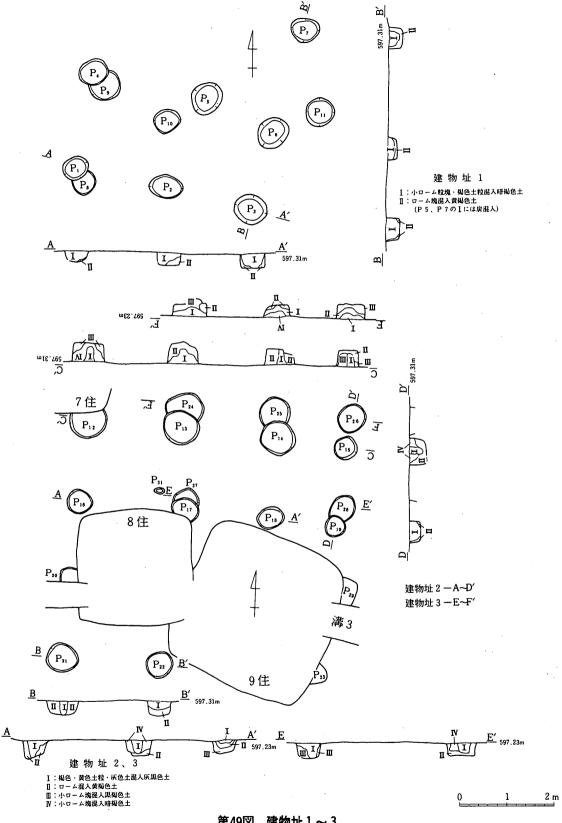
表 1 南栗・北栗遺跡掘立柱建物址一覧表

						T					·	T
番号	平面形	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸	法 (m)	低	穴 易	短径	(cm) 探さ	柱穴平面形	柱穴備考	20 物 址 所 見
1	方形か	N-16°-E	(2間)×2間	桁 1.7~	2. 3	1	56	48	24	円 形		1 地区北端, 6 住の北側に位置する。
			3.9 × 8.8	梁 1.7~	2.0	2	78	51	26	楕円形		 P₁~ Pァまでを柱列として把握した。 P8・P9
						3	71	62	34	円形		はそれぞれP _I ・P ₄ の強て直しと考えられる。
						4	65	50	29	"		P ₁₀ ・P ₁₁ は柱列からややずれているが、建
						5	70	62				1と関係あるものとして把握した。
									25	"		1
						6	70	61	27	"		総柱式の建物になると思われ、柱穴の掘り方
						7	61	58	31	"		は円形である。
						8	(54)	50	21	"		遺物は ♥ 期以前に属する土師器甕が出土して
						9	66	(60)	27	"		いる。
						10	57	49	24	不整円形		
						11	61	60	16	円形	ļ	
2	長方形	N-85°-W	8間×8間	桁 1.5~	2. 1	12	78	(72)	88	"	柱痕あり	地区中央やや北西に位置する。建 8 を切り.
			5.5×5.0(4.9)	梁 1.6		18	79	71	45	"		7住・8住・9住・溝8に切られる。
						14	76	78	33	不整円形	柱痕あり	総柱式の建物で、柱穴の掘り方は円形である。
						15	50	49	36	"	柱痕あり	- 柱痕は灰黒色を呈し、比較的良好に観察でき
						16	55	51	85	円 形		t: •
						17	61	(50)	32	不整円形	柱痕あり	 遺物は土師器甕片が出土している。切り合い
						18	60	48	28	"		 関係から 期以前に位置づけられる。
						19	47	46	24	"		
						20	(54)	45	19	?		
						21	69	62	30	不整円形	柱痕あり	
						22	59	58		円 形	TIR OF	-
									81			
					-	28	(55)	48	81	?		
8	万形	N-4°-E		桁 1.8		24	82	(62)	87	不整円形		建3・8住・9住・溝8に切られる。
	,		3.8 × 3.6 (3.4)	架 1.6~	1.8	25	(69)	65	26	円形		側柱式の建物で、柱穴の細り方は円形である。
						26	65	60	80	"		切り合い関係からは,処2と同様Ⅳ期以前に
						27	55	(47)	33	?		位置づけられる。
						28	(62)	50	26	楕円形		
						29	/	/	/	?		
4	長方形	N-11°-E	8間×2間	桁 1.7~	1.9	33	92	88	45	円・形	柱痕あり	I 地区中央やや東側に位置する。溝 5 を切り
			5.7 (5.4)×4.5	梁 2.0~	2.8	84	98	87	49	方 形	柱痕あり	21住に切られる。尚、20住との切り合い関係
						85	75	71	38	不整円形		│ は確認できなかった。 │ │ 総柱式の建物で,柱穴の掘り方は主として方
						36	90	85	82	"		形である。
						37	69	69	18	方 形		P ₃₈ は21住床面下に柱痕のみ検出された。
						38	49	42	/		柱痕のみ	柱痕は比較的良好に観察でき、灰黒色を呈し
						39	84	65	38	不整方形		概してしまりは不良であった。 油めけり、W베アスに扇オス須田豊は、麻片
			,			40	74	68	21	長方形	杆痕あり	│ 遺物は∜・∜期でろに属する須恵器坏・甕片 │ │ が出土している。
						41	88	72	87	. "	柱痕あり	切り合い関係からはVI~VIII期以前に位置づけ
						42	62	60	50	方 形		られる。
5	古 彫	N-86°-W	PR C V FR	桁 1.6~	. 2 0	59	62	62	42	不整円形	仕班より	地区中央やや東側・21住北に位置する。建
J	13 NS	11-00 -W	5.5×5.8(5.0)									1
			0.0 × 0.8 (5.0)	柴 1.7~	1.8	60	62	57	28		柱痕あり	6を切る。
						61	68	60	45	"	柱痕?あり	1
						62	64	55	46	"		P ₇₁ · P ₇₂ · P ₇₃ · P ₇₄ · P ₉₁ は庇になった
						68	58	57	82	円形	柱痕あり	かと思われる。
						64	64	60	42	"		柱痕は比較的良好に観察でき、灰黒色を呈し
						65	78	60	85	不整円形		概してしまりは不良であった。

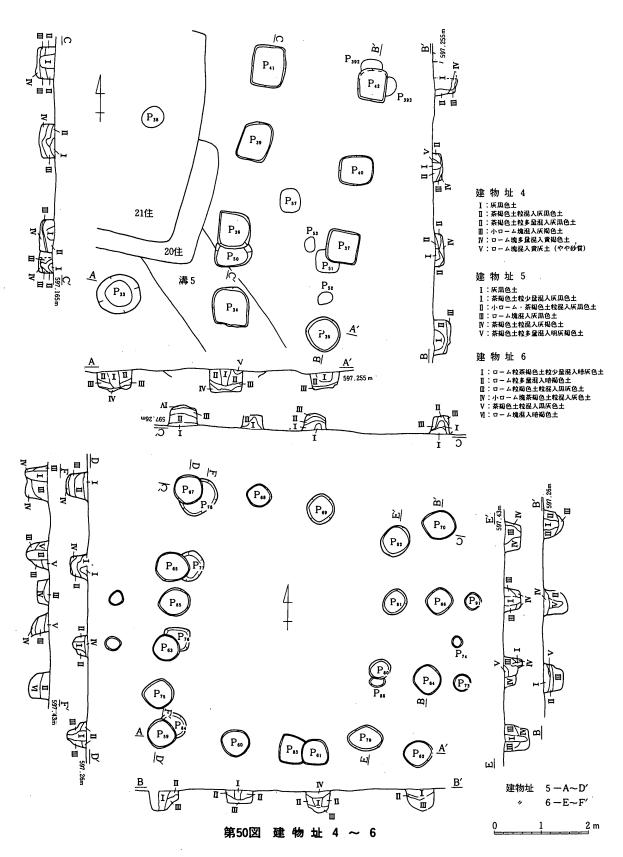
en Menderakan bes

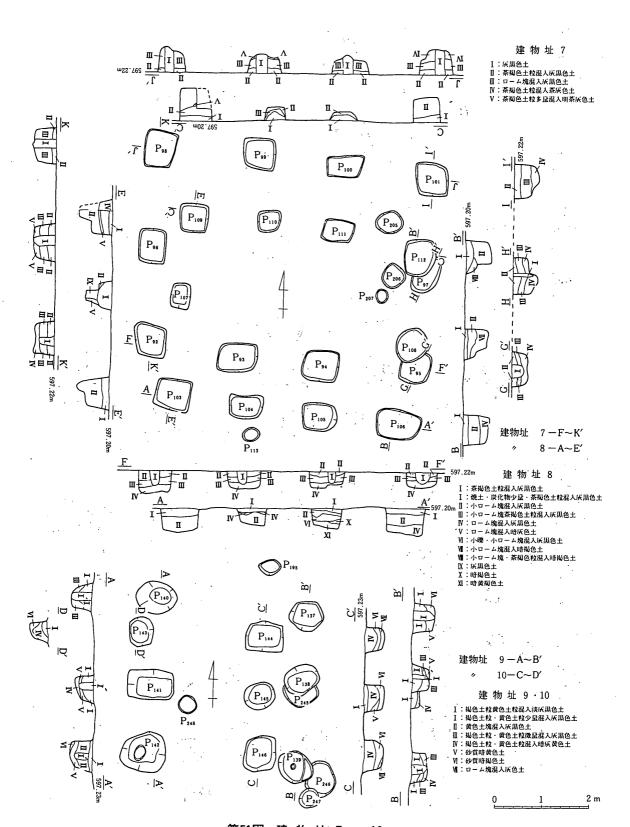
			· ····	ľ	柱	穴:	見憶	(cm)	柱穴	,	
番号	平面形	主軸方向	規 · 模 (m)	柱間寸法		長径	短径	深さ	平面形	柱穴備考	建物 址 所 見
5					66	55	50	51	円形		遺物はV・N期でろに位置づけられる須恵器
					67	60	60	46	"		坏・蓋・甕, 土師器甕片が出土している。
					68	54	49	30	"	-	20, 20, 20, 20, 20, 20, 20, 20, 20, 20,
		·	,		69	64	59	37	,,		
					70	75	62	44	不整円形		
		*			71	86	81	9	円形		
		,			72	35	80	10	"		
					78	38	38	19	<i>"</i>		
					74	25	24	9			·
					-	-			. "	-	
	TC	N 50 D	0.00 × 1.00	<u> </u>	91	89	86	15	- //		Fib. 11 to 170 d. b. or
6	א מ	N-7°-E	3間×1間	桁 1.8~1.6	<u> </u>	69	68	45	不整方形		建ちに切られる。
			4.4 × 4.4	架 4.4	76	58	(50)	38	方 形		│ 側柱式の建物で,柱穴の掘り方は主として円 │ │ │
					77	65	(56)	47		柱痕あり	形である。
			•		78	84	(64)	48	楕円形	-	柱痕は暗灰色を呈し概してしまりは不良であ
					79	77	55	58	"	柱痕あり	った。埋土は主として灰黒色を呈す。
			•		80	47	42	40	円形		遺物は Ⅵ~Ⅷ期に位置づけられる土師器甕・
					81	59	49	35		柱痕あり	·小形甕などが出土している。
					82	68	57	34	円形		尚, P ₈₃ ~ P ₈₅ は比較的しっかりしており。
					88	60	(57)	38	方 形		建5あるいは建6と関係ある柱穴かとも思わ
					84	55	(58)	?	円 形		れる。
					85	70	60	24			
7	長方形	N-85°-W	8間×2間	桁 1.8~2.0	92	67	65	89	不整方形	柱痕あり	地区中央やや北東側に位置し建8に切られ
			5.7 × 4.1 (4.0)	梁 2.0~2.1	98	86	61	87	長方形	柱痕あり	る。
					94	78	66	34	方 形	柱痕あり	個柱式の建物で、柱穴の掘り方は方形である。
					95	66	(66)	88	"	柱痕あり	柱痕は全ての柱穴に確認できた。灰黒色を皇
					96	78	58	45	長方形	柱痕あり	し、埋土には茶褐色土粒あるいはローム塊の
					97	85	(50)	52	"	柱痕あり	混入がみられる。
					98	78	66	51	方 形	柱痕あり	遺物には須恵器坏・蓋・甕・土師器甕片がみ
					99	70	66	41	不整方形	柱痕あり	5nt.
					100	75	42	40	長方形	柱痕あり	
					101	70	70	53	方 形	柱痕あり	
8	長方形	N-84°-W	3間×2間	桁 1.5~1.8	103	75	67	68	不整方形		建7を切る。
			5.0 × 3.7	梁 1.7~2.0	104	71	49	39	畏方形		側柱式の建物で、柱穴の掘り方は方形である。
					105	74	60	41	不整方形		遺物には須恵器坏・蓋・塞片がみられた。
				;	106	98	65	57	長方形		
		,			107	54	48	56	"		
					108	72	65	50	不整方形		
		i .		:	109	61	60	69	方 形		•
					110	50	46	87	"		
					111	65	48	20	長方形		
					112	78	56	58	不整方形		, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
9	方 形	N - 8° - E	2間×1間	桁 1.3.~ 1.9	137	72	62	46	"	柱痕あり	地区北東に位置し、建10と重複している。
	,	<u> </u>	3.4 × 3.1 (3.0)	梨 3.0~3.1	. 138	75	58	44	"	柱痕あり	 側柱式の建物で、柱穴の掘り方は方形である。
					139	80	64	55	"	柱痕あり	 柱痕は灰黒色土で、しまりは不良であった。
					140	87	70	50	楕円形	柱痕あり	遺物は須恵器甕片が出土している。
9-10					141	(98)	(68)	(53)	長方形		尚,建10との新旧関係は把握できなかった。

						柱	穴 扌	e no	(cm)	柱穴		
番号	平面形	主軸方向	規 模 (m)		間 寸 法 (m)	16.	長径	短径	探さ	平面形	柱穴備考	建物址 所見
						142	(98)	85	(64)	不整方形		建9と重複している。
10	方 形	N-2°-E	2 閏×1 間	Ħī	1. 2 ~ 1. 4	143	68	51	37	//		P ₁₄₃ および東西にやや長い平面形を示すP ₁₄₁ ・ P ₁₄₂ をP ₁₄₄ — P ₁₄₅ — P ₁₄₆ に対応する柱列とし
	73 112		2.6×2.6	架		144	80	67	41	長方形		てとらえた。 .
			2.0 / 2.0	*	2. 0	145	66	54	44	不整円形		- 側柱式の建物で、柱穴の掘り方は方形である。 - P ₁₄₂ には全掘時、土層断面図に現われた建9
						146	74	66	41	方 形	· .	の柱痕とは別の柱痕が確認されている。
11	E + E	N-88°-E	1間×1間	桁	1.0	147	44	40	44	円 形		遺物には土師器甕片がある。 地区中央北側,竪2の南西に位置する。
11	長方形	N-00 -E	1.8×1.2(1.1)		1. 1 ~ 1. 2	148	50	40	40	//	柱痕あり	掘り方はP ₁₅₀ を除き円形である。
			1.0 × 1.2 (1.1)	*	1.1~1.2	149	43	30	26	构円形	江坂のり	遺物の出土はない。
						150	42	34	82	長方形		AS 120 P III I IO S V II
10	+- E/	N-10°-E	2間×1間	te:	1.8 ~ 2.0	344	75	71	40	円 形		■ 地区南側に位置し、62住に切られる。盛土
12	方形	N-10 -E								不整方形		のため確認できないが、さらに南側に柱列が 続く可能性がある。
			3.8 × 4.3	946	2. 1	845	69	60	36			側柱式の建物で、柱穴の掘り方は円形である。
					•	346	70	69	49	方 形		P ₃₄₈ の底には径85cmの平坦な石が据えられて いる。
						348	70	64	38	円 形	底に石あり	遺物は VI 期以前に位置づけられる須恵器蓋・ 甕片等が出土している。
				-		349	(70)	60	54	"		切り合い関係からは畑期以前に位置づけられる。
13	方 形	N-16°-E	2間×2間		1.5	850	55	54	50	方 形	•	■地区中央やや南側、61住・62住に切られる。 - 側柱式の建物で柱穴の掘り方には円形と方形
			8.0 × 3.5	梁	1.8	851	58	50	40	"		がみられる。
	ļ					352	54	47	36	不整円形		遺物はVI期以前に位置づけられる須恵器坏・
						353	(50)	40	21	不整円形か		蓋が出土している。
		,				854	43	40	36	方 形		切り合い関係からは細期以前に位置づけられ る。
						355	(57)	51	20	不整円形		
14	長方形	N-8°-E	8間×2間	桁	1.5 ~ 1.6	549	78	. 61	58	楕円形	,	V 地区南東に位置する。
			4.8×4.2(4.1)	梨	$1.9 \sim 2.1$ (4.2)	550	81	71	53	"		側柱式の建物で、柱穴の掘り方は円形である。
					.(4.5)	551	90 .	73	47	"		埋土7は暗黄灰色~黄褐色を星し、 V 地区に多
						552	85	72	28	段方形	柱痕あり	い中世に属する遺構の灰色を呈す埋土とは区
						553	68	58	38	円形		別される。
						554	87	73	46	不整円形		尚, P ₅₅₈ ~P ₅₆₃ は,全て建14の柱穴と重複し
						555	85	72	49	円形		ており、柱穴として用いられた時期があった
						556	78	. 74	42	"		ものと思われる。
			٠.		÷.	557	82	73	55	方 形		遺物の出土はない。
						558	?	?	46	円形か		
						559	?	?	54	"		
						560	?	?	46	"		:
						561	66	(63)	83	円 形		
						562	.80	(75)	51	"		
						563	72	(57)	40	"		
15	方 形	N-10°-E	3 間× 2 間	桁	1.1 ~ 1.5	564	78	70	87	不整円形	柱痕あり	V 地区北東、建14の北に位置し、横18を切り
			4.0 × 4.0	架	2. 0	565	68	47	16	"		竪81に切られる。
						566	45	45	26	"		総柱式の建物で、柱穴の細り方は円形である。
						567	65	62	81	"		埋土は黄灰色~黄褐色を呈し、 V 地区に多い
			Í			568	75	70	34	円 形		中世に属する遺構の灰色を呈す埋土とは区別
						569	?	?	49	,?		される。
					-	570	87	79	29	円形		尚, P500の北側には柱穴が検出されなかった
						571	86	72	89	不整円形		ことから、P ₅₆₇ · P ₅₆₈ は庇で2間×2間の亞
						572	75	67	45	"		物であったとも考えられよう。
						578	82	64	30	"		
				.		574	82	68	29	桁円形		,
]			575	103	50	37	f., ,,		
	<u>L.</u>	<u>l</u>	I	<u> </u>		575	103	50	87	C: //	L	

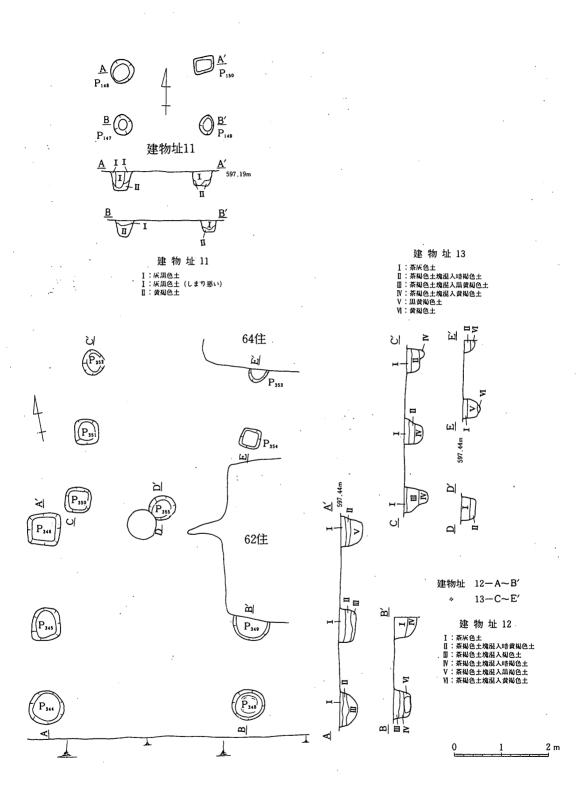


第49図 建物址1~3

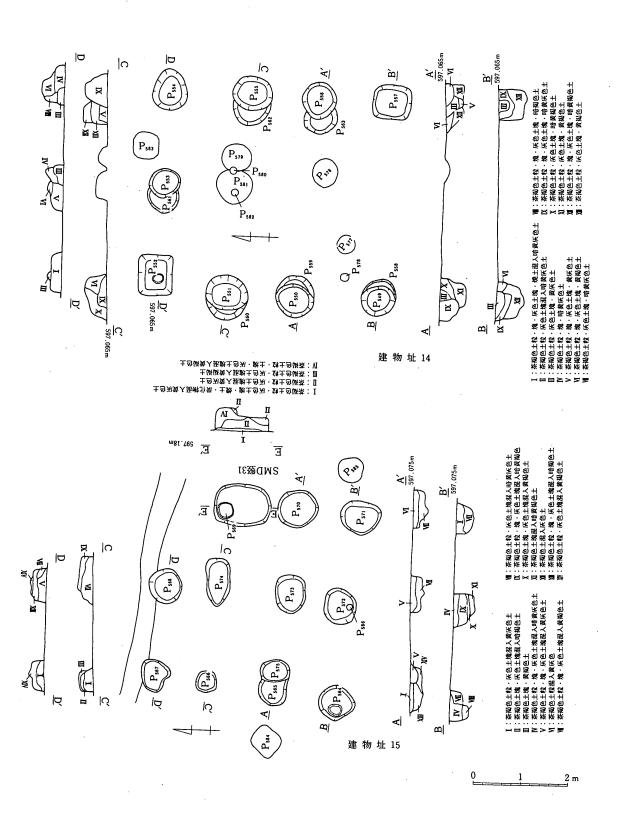




第51図 建物址7~10



第52図 建物址11~13



第53図 建物址14・15

3 竪穴状遺構・土壙

竪穴状遺構は当初、検出時において覆土が灰色を呈し規模の大きいものを把えた。しかし発掘調査が進行するに従い、竪穴状遺構と土壙とを明確に区別することができず、結果的には土色以外何ら変わりのないものを区別して扱かってしまった。一覧表では便宜上、竪穴状遺構と土壙を分けて掲載したが、ここでは上記の理由によりまとめて記述していく。(遺構名は検出時につけたものを踏襲し、竪穴状遺構は以下竪 No.として記述する。)尚、詳細については一覧表に記載する。

今回の調査で確認された竪穴状遺構・土壙は I 地区23基、II 地区 4 基、III地区 1 基、IV地区 4 基、V地区21基、VI地区 2 基で総計55基を数える。 I 地区・V地区に多く、特にV地区では密集していた。規模をみると最大が竪13(540×420cm)で、最小は土壙16(85×69cm)であった。最も多いのは長径が100~150cm のもので16基を数える。覆土中に焼土がみられるものは13基あり、概して長径が120cm 前後の小形のものに多い。また比較的大形のものの中にはピットを持つものもあり 4 基を数えている。

次に特徴的であった竪1と竪29について簡単にふれたい。

竪穴状遺構 1 — 規模は510×360cm と大形である。覆土は青灰色を呈し上~下層にかけて拳 ~人頭大の石が計20個見られた。床面は堅緻な黄色土で、西側と南東部は高くなっており段状を呈す。遺物は山茶碗の小片と頁岩製の硯が出土している。遺物および覆土から中世に属するものと思われる。竪穴状遺構とするより、むしろ住居址として把えられるものかもしれない。尚、竪1に類するものには竪13がある。

竪穴状遺構29——径2.96mの正方形を呈す。検出面から非常に深く、底面は軟弱な黄褐色土である。覆土中には多数の石があり、そのほとんどが火を受けていた。また中層~床面にかけては焼土・炭化物が層をなしてみられた。尚、炭化物の中には稲あるいはよし・すすきといった植物灰が認められた。遺物は内耳土器片が多数、刀子1点、石臼1点が出土している。また、覆土が灰色であることからも中世に属すると考えられる。以上の状況等を考慮すると、火葬墓と考えることもできようが、火葬を行なった場合には少なくとも骨片は現在まで残る筈である。しかし骨は1片も出土しておらず、本遺構を火葬墓とするか否かは判断できない。尚、竪29と同様の性格を持つと思われるものに竪32~36があげられる。何れもV地区に位置する。

以上、竪1と竪29について概観してみたが、今回の調査で確認できた竪穴状遺構・土壙は多様なあり方を示し、その性格は一概には律しきれないものであった。その中で、竪穴状遺構が密集して確認されたV区は特殊な空間として位置づけられよう。尚、ここではふれなかったが、住居址としてとりあげたものの中にも竪穴状遺構として位置づけられそうなものもあった。 (三村 竜一)

表 2 竪穴状遺構一覧表

					I				
北 投資×気積 戻き 水 投資×気積 戻き 水 長百米気積 日本 N 84°W 山本碗・碗 水 長百米 日本 N 84°W 山本碗・碗 水 石を方形 250×186 20 ペ N 16°W なし 水 不整方形 21×186 20 ペ N 16°W なし 水 不整方形 21×186 20 ペ N 10°W 有限 水 不整方形 21×186 20 ペ N 10°W 有限 水 有数形 21×186 20 ペ N 10°W 有限 水 有数形 20 ペ N 10°W 有限 所 水 有数形 20 ペ N 10°W 有限 所 水 20 20 ペ N 10°W 有限 の 水 20 20 20 20 20 20 20 水 20 2020 20 20 20 </td <td></td> <td></td> <td>桓</td> <td></td> <td>(3)</td> <td>断回形</td> <td>長軸方向</td> <td></td> <td></td>			桓		(3)	断回形	長軸方向		
北 不整方形 10 × 355 45 回 形 N 84*W 山系島、現場路・電影 東 石整方形 20 × 186 20 " N 16*W 40 山系島・銀場路・電影 東 不整方形 21 × 186 20 " N 16*W 40 1 " 不整方形 21 × 186 20 " N 16*W 40 1 " 不整方形 21 × 186 20 " N 16*W 40 1 中央 内 有			١,	長径×短径	化账				
東方形 376×196 38 不整形 N 15°W 生命醫費・須惠路・通過路・通過路・通過 " 不整形 250×186 20 " N 16°W なし " 不整形 21×186 20 " N 16°W なし " 不整形 21×186 20 " N 2°E 須鹿路 " 不整形 146×120 82 方 形 N N 8°E なしし 中央 荷 円形 150×58 8 才 40 N 8°E 4 中央 荷 円形 150×58 8 力 40 N 8°E 4 市 不整形 150×28 8 力 40 8 7 4 市 不整形 150×28 8 4 7 4 4 8 N 8°E 4 4 7 市 150×28 18 7 4 5 8 N 8°E 4 4 7 4 7 4 7 4 7 4 7 4 7 4 7 4 7 4 7 <td>_</td> <td></td> <td>不整方形</td> <td>510×356</td> <td>45</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>溝5を切る。観土上層より下層まで10~30∞大の礫の傷あり。西・南東側は一段と高い。床面は整盤な黄色土。</td>	_		不整方形	510×356	45				溝5を切る。観土上層より下層まで10~30∞大の礫の傷あり。西・南東側は一段と高い。床面は整盤な黄色土。
東 不整形 250×186 20 " N16"W 4 し " 不整形 211×186 20 " N2" E 須銀路 " 不整形 211×186 20 " N2" E 須銀路 " 万 形 146×120 82 方 形 N8" E 3月 本 中央県 内 形 146×120 82 方 形 N8" E 40 し 中央県 内 形 150×58 8 すり鉢形 N8" E 40 し 市央県 所 所 13 すり鉢形 N8" E 40 し 市場 所 150×26 13 すり鉢形 N8" E 40 し 市 16 18 19 対域 N8" E 40 し 市 17 18 対域 N8" E 40 し 40 し 市 18 18 18 18 18 18 18 市 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 <t< td=""><td></td><td></td><td>ħ</td><td>376×196</td><td>38</td><td>884</td><td></td><td>, 須恵器坏・亜</td><td>底面は西側に傾斜し、起伏あり。ピットあり。遺物は流れ込みか。</td></t<>			ħ	376×196	38	88 4		, 須恵器坏・亜	底面は西側に傾斜し、起伏あり。ピットあり。遺物は流れ込みか。
(本義方後) 34 面 形 () () () () () () () () () ()	l		翻	250×186	20	"	N 16°W		44任と溝1を切る。浅い。底面は固く良好な状骸で、北側に浅いピットあり。
(本) 不整形 211×186 20 " N2°E 須藤線 (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (中) (有) (五) (五) (五) (五) (五) (五) (中) (有) (五) (五) </td <td></td> <td></td> <td>不整方形</td> <td></td> <td>34</td> <td> </td> <td></td> <td>"</td> <td>滑1を切る。壁は破やかに落ちる。底面はやわらかく,構1の切合部は礫,その他は黄褐色で軟弱。</td>			不整方形		34			"	滑1を切る。壁は破やかに落ちる。底面はやわらかく,構1の切合部は礫,その他は黄褐色で軟弱。
(本) (方 形) (46×12) (82 方 形) (84°12 (30×18) (40×12) <td></td> <td></td> <td>翻</td> <td>211×186</td> <td>20</td> <td>"</td> <td>N 2° E</td> <td>須惠器囊</td> <td>底面は黄色土。</td>			翻	211×186	20	"	N 2° E	須惠器囊	底面は黄色土。
中央東 円 6 面 形 4 なし 中 角 円 形 150×58 8 すり鉢形 NO° 鉄序2点 北 不整方形 11 不整 形 11 不整 形 12				146×120	82	,			36任を切る。瞳は核出面より深く面に落ち込む。底面はやわらかく平坦で,瞳は良好。覆土は蛭11と共に褐色土で他のものと異なる。
中央 格内形 150×58 8 4 5 4 5 4 6 No* 数率2点 北 不整方形 41 不整形 42 人を形形 42 人を形形 川 不整方形 18 寸 5 4 6 No No 82*B 7 C し 南	ı	Ì	E		ဖ				検出面より非常に茂く壁は観やかに落ちる。
北 不整方形 41 不整形 42 不整形 42 不整形 42 不整形 42 不整形 42 不整力 42 不整力 42 不整力 43 44		#	翻田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田			すり鉢形	Z	鉄滓2点	55圧を切る。掘り込み残く壁は緩やかに落ちる。床面は鉄分沈澱の茶褐色土で,固く良好。
前 円 形 161×146 18 寸移移 N82°B " 南 商報汽布 213×187 9 面 形 N82°B " 「 北 不整方形 303×224 13 " N82°B 計磁路环・鉢・甕、須鹿路环・蓋 東 不整方形 540×420 60 " N82°B 清磁路环・鉢・甕、須鹿路环・蓋 北 不整方形 518×262 69 逆台形 N14°B 清磁路・減 本 北 不整方形 518×262 69 逆台形 N14°B 有職等者通 報題完 北 一 250×183 20 回一形 N18°B 中 中 中 北 一 266×9 83 方 形 N18°B 内上 中 北 一 120×203 43 不整 形 N18°B 内上 中 北 一 120×203 21 不整 形 N18°B イ 中 市 所 120×203 21 不整 形 N18°B イ			不整方形		41	翻			12住の東側に位置する。壁はやや緩やかに落ち込む。中央部は深い。
南 扇翅 (大松) 13×187 9 面 形 N85°W " 北 不整 方形 540×420 60 " N 82°E 有磁路、 340×54 水 不整 方形 540×420 60 " N 82°E 有磁路、 340×54 水 不整 方形 518×262 69 逆 台 形 N 14°E 有磁路、 340×54 水 二 250×183 20 面 形 N N8°E 中國數有 北 、 260×183 20 面 形 N N8°E 40 人 北 、 260×183 76 79 N N8°E 40 40 北 、 182×109 48 不整 形 N N8°E 40 40 水 、 N N8°E 40 40 40 40 水 水 水				161×146	13	すり鉢形		"	11住を切る。浅く緩やかに落ち込む。
北 不整方形 303×224 18 " N52" Hangk 计算、须思路环。 東 不整方形 540×420 60 " N82" E 有融路、完疊至 " 不整方形 513×262 69 逆台形 N14" E 有融路、完疊至 " 不整方形 513×262 69 逆台形 N14" E 有磁路、完疊至 " " 250×183 20 面下 N8" E 内国数有 北 " 266×9 83 万 形 N8" E 化 L 東面 182×103 48 不 整 形 N8" E 化 L " " 160×9 37 形 38 所 40" E " " 150×9 12 不 整 形 N6" E 化 L " " 150×9 12 不 整 形 N6" E 化 L " " 150×9 12 不 整 形 N6" E 化 L " " 150×9 12 不 数 形 12 12 12 " " " "			厢摄方形	213×187	6		_	"	溝1を切る。覆土は小磯が組入する褐色土で,浅く壁は破やかに落ちる。底面はほぼ平坦。
東 不整方形 540×420 60 " N82"E 有融码、元号通宝 " 不整方形 518×262 69 逆台形 N14"E 荷田、都括通宝、紹昭元宝 北 " 250×183 20 面、形 N8"E 中国製育研 北 " 266×79 83 方 形 N8"E 存 D 北 不 明 124×9 62 方 形 N8"E 存 D " 不 明 124×9 62 方 形 N8"E 存 D " 「 128×129 48 不整形 N8"E 存 D " (120×20 21 不整形 N8"E 内 D " (<			緇	303×224	13	"	N 52°W	は・	覆土に炭化物を含み、蛭6-11と共に褐色を呈す。壁ははは百直に落ち込み、検出面から茂い。西側に突出部あり。ピットを持つ。他と比べ遺物多し。
"			不整方形	540×420	09	"	N 82° E	育磁碗,元豊通宝	別に記記載。
" " " 250×183 20 面 形 N8°E 中国政市 " 北 " 216×192 76 有948 N2°E 中国政市 地区 東側北 " 266×9 83 方 形 N8°E 水 位 地区 東側北 " 266×9 83 方 形 N8°E 水 人 " " 182×109 48 不整形 N8°E 水 人 " " " 182×109 48 不整形 N6°E 内且提出 項 " " 185×128 31 不整形 N6°E 水 小 " " " 185×128 31 " N5°E " " " " " 185×128 31 不整形 N1°M " " " " " 185×158 10 並 N8°E " " " " " "			不整方形	513×262	69	40		嘉祐通宝,	徴土中に炭化物あり。壁面・底面は小礫砲入黄灰色土。優土から底面に20~400m大の礫7個あり。
地区 果園北 ボ 216×192 76 寸54秒 N 21°E 常待整、脊盘 地区 果園北 ボ 266×9 83 方形 N 84°M なし 地区 北西崎 情日形 182×109 48 不整形 N 86°E なし ボ ボ 市 150×9 21 不整形 N 86°E なし ボ ボ ボ 150×9 21 不整形 N 86°E なし ボ ボ ボ 138×128 31 ボ N 86°E なし ボ ボ ボ ボ 138×128 31 ボ N 86°E ボ ボ ボ ボ ボ 148×101 23 ボ N 80°E ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ ボ			*	250×183	20			中国製青磁	検出面からは残い。優土に炭化物が混入。北東隅に大石2個あり。
地区 東側北 () () <th< td=""><td></td><td></td><td>*</td><td>216×192</td><td>92</td><td>すり鉢形</td><td></td><td></td><td>検出面からの細り込み深い。覆土から底面までに20☎大の石15側が東北壁上より崩れ落ちた状態である。</td></th<>			*	216×192	92	すり鉢形			検出面からの細り込み深い。覆土から底面までに20☎大の石15側が東北壁上より崩れ落ちた状態である。
地区 北西森		地区			83				69住を切る。覆土上層に炭化物の薄層が入る。壁には小礫が露出。ピットあり。南側に焼土あり。
" 不 明 124.X ? 62 方 形 N 86°E 内 1248 須鹿路小 " " 150.X ? 21 不養形 N 64°N 利益路外・ 項 " 188.X ? 12 而 N 12°E 4.0 1.0 " 188.X ? 12 而 N 12°E 4.0 1.0 " 185.X 128 31 " N 5°E " 1.0 " 4 円 形 143.X 101 23 不 整形 N 12°M " 1.0 中 央 万 形 158.X 183 1.8 " N 89°E " 中 央 万 形 158.X 183 1.0 1.0 N 10°E 1.0 1.0 中 央 万 形 182.X 183 1.0 1.0 N 10°E 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 <		型区	在田田	182×109	48	翻			
""" """ 150×9 21 不整形 N 64°W 須越路环・建 """ 138×9 12 m R N3°E 化 """ 138×128 81 "" N5°E " """ 216×205 83 不整形 N1°W " "" 有円形 148×101 23 万 形 " "" 長方形 246×159 60 逆台形 N89°W " 中央 万 形 158×183 13 " N89°E " 市央 万 形 16 迎台形 N90°E 内耳士器 "" 182×163 10 m N N90°E 以 "" 182×162 16 迎台形 N90°E 以 "" 182×163 16 迎台形 N90°E 以 "" 182×162 16 迎台形 N90°E 以 "" 182×163 17				124× 9	62		_	內耳土器,須恵器蓋小片	西側は盛土下。壁は直に落ち込む。底面は黄灰色土で敷弱。
前 二 188×9 12 面 形 N8°E はしたいためのでは、 百 方 形 185×128 31 一 N8°E 二 二 工 216×205 33 不整形 N1°W 二 二 付 143×101 23 万 形 N0° 二 中 方 形 158×133 13 二 N89°E 二 市 方 形 158×133 10 四 形 N90°E 四 市 不 182×162 16 並 所 N90°E 以 中 中 元 182×162 16 並 N			"		21	\$		須恵器坏・甕	西側は盛土下。底面は黄灰色土で軟弱。製土中に炭化物含む。
商 方 形 185×128 81 " N5°E " " 126×205 83 不整形 N1°M " " 付用形 143×101 23 方 形 N0° " 中央 方 形 158×183 13 " N89°E " 西 不整形 179×143 10 面 形 N90°E " 市 二 182×162 16 並台形 N2°E 4 C 中央 正方形 296×296 71 方 形 N Pate 内耳上器 7 中央 正方形 296×296 71 方 形 N Pate N Pate			"	138× 9	12		s a		西側は盛土下。検出面からは浅く壁はゆるやかに落ちる。
" " 16 内形 16×205 88 不整形 N1°W " " 有 日彩 143×101 23 方 形 N 8° " 中 方 形 16×158 13 " N 89° " 市 大 影 158×183 13 " N 89° " 市 大 數 179×143 10 m 形 N 90° P 月井上器 " " 182×162 16 並 台形 N 2° 4 し 中 正 方 形 296×296 71 方 形 N 9° 内耳上器・石臼・刀子 北 西 日 形 100×98 83 並 台形 N 9° P 内耳上器・石臼・刀子				135×128	31	"			覺 土中に15~30㎝程の石 3 個あり。
" 特用形 143×101 23 方形 NO° " 北 長方形 246×159 60 逆台形 N 89° " 中央 方形 158×183 13 " N 89° " 南 不整形 179×143 10 m 形 N 90° 日村土路 " " 182×162 16 迎台形 N 2° 4 C 中央 正方形 296×296 71 方形 N 4° 内封土器、石臼、刀子 北西 田 形 100×98 83 逆台形 N 4° 內 均其土器			"	216×205	33	翻	N 1° W	,,,	底面黄灰色土。中央部は8 ∞程聚くなる。
北 長方形 246×159 60 並台形 N 89°E " 中央方形 158×183 13 " N 89°E " 西 不整形 179×143 10 面 形 N 90°E 内耳士器 中央方 不整形 179×143 10 面 形 N 90°E 内耳士器 中央方 正方形 296×296 71 方形 所 内耳上器 石B 北西 内 形 100×98 33 逆台形 N 4°W 内耳上器			E	143×101	23			,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	雙は直に落ち込む。底面黄灰色土。
中 央 方 形 158×138 13 " N 89°E " 西 不整形 179×143 10 面 形 N 90°E 内 142 " " 182×162 16 並台形 N 2°E 4 し 中央 正方形 296×296 71 方 形 内 142 内 37 北西 田 形 100×98 38 並台形 N 4°W 内 142			九	246×159	09	40	_	"	検出面からは細り込み茂く,壁は直に落ち込む。底面は黄灰色土。
西 不整形 179×148 10 面 形 N 90°E 内耳上器 " " 182×162 16 逆台形 N 2°E 4 C 中央 正方形 296×296 71 方形 所 内耳上器・石臼・刀子 北西 円 形 100×38 33 逆台形 N 4°W 内耳上器		#	力	158×133	13	"	N 89°E	"	溝12を切る。底面は黄灰色土。
" " 182×162 16 逆台形 N2°E 4 C 中央 正方形 296×296 71 方形 内与土路、石臼、刀子 北西 円形 100×98 83 逆台形 N4°W 内耳土器			翻	179×143	10			内耳上器	假土上層に焼土含む。
中央 正方形 296×296 71 方形 内耳上路,石臼,刀子 北西 円形 100×98 88 並台形 N4°W 内耳上路			*	182×162	16	40	N 2°	- 1	東側はピットに切られる。壁・底面は黄灰色土。
北西 円 形 100×98 83 逆台形 N4°W		#	正方	296×296	7.1				ピットを切る。土崎器豊は流れ込み。
		뀨	EC		33	40		内耳土器	

	数 (G) 数 数 (G) 当 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	∃ }	② 内円形 120×88 34 不整形 N1°E 土師器裏 強15を切る。壁・底面は黄褐色土で軟弱。	円 形 262×244 59 国 形 N 61°E 内耳土器 底面は黄褐色土。覆土に焼土を含む。拳大の石が覆土上層~下層にあり。	i 方 形 227×211 32 逆 台 形 N 5°W " 運・底面とも黄褐色土。壁は直に落ち込む。覆土及び底面に石あり、上層に挟多量に認められる。	" 172×149 35 方 形 N 4°E " ■ 壁・底面とも飲弱な黄褐色土。覆土中層~底面にかけ77頃の拳大の石あり。	" 158×136 26 " N6°E " . 須恵器豊 壁・底面とも飲弱な黄灰色土。北側に火を受けた拳大の石8個あり。	" 120×111 36 " 内耳少量,天目茶碗 壁・底面とも軟弱な黄褐色土。壁は直に落ち込む。底面は軟弱。覆土中に砕けた石あり。	検出のみ
	Н	三	Œ		別	"	"	"	"
l	E	₫	単	"	ÆI		,	"	東
	5	11%	V地区	"	"	"	"	"	"
ŀ	梅	中	31 1	32	33	32	35	36	37

土壙一覧表

	_		,	,										_						
		三	徵土は灰色を呈す。	骰 士中焼土あり。	41庄矮道を切る。	覆土中に焼土・炭化物あり。40住を切る。		寒	賢士中に焼土・炭化物あり。	優土は灰色を呈す。	数土中12小碳硅入。	" に焼土あり。	" に小像眼入, 隣1を切る。		競		82住を切る。未知。	费士は灰色を呈す。	92월 ເຫິດກຸ 93월 2 ຫຼວ	費士中に焼土・炭化物あり。
			# L	土師器甕,須恵器甕	士師器甕・須恵器坏・甕・坏蓋	ئة ل ئة ل		土師器類	須恵器坏・甕	N-61°-W 土師器墾,須恵器坏・甕	ない	"	"	"	*	"	8	3	6	8
	-{	を登り回		N-62°-E	0-N	N-21°-E		-	N-10°-E	1-61°-W				N-89°-W			N-72°-W	N-0°	-	
	ğ		目	不整形	V "	目形	半円形		目形	, ,	不整形	目. 形	设合形	" N			Į.	* 円形 N	"	目
	(cm)	化账	24	48 7	20	28 □	₹ 88		32	24	54 4	20	36 3	54				k 09	36	16
	規模(長径×短形		106× 78	152× 82	136× 66			118× 70	110× 96				128× 86			96× 72	85× 66	98×9	
Ŕ	H	三	円 形	開丸長方形	格田形	不整楕円形	看田形	"	"	方 形	植円形	H W	楕円形	長方形	备円形	"	<i>u.</i>	"	円形か	植田形
ľ	8		K A	北側	中央東	"	中央南谷り	南便	·	"	華	中央東	南帝り	区南西	№地区中央北寄り		西	X 南	区 北西	₩.
		∄	地区	*	*	"	"	"	"	"	"	"	"	■地区		"	"	7 地区	N地区	*
- 1	묖	臣	1	2	3	4	2	9	2	80	6	10	11	12	13	14	15	16	17	18

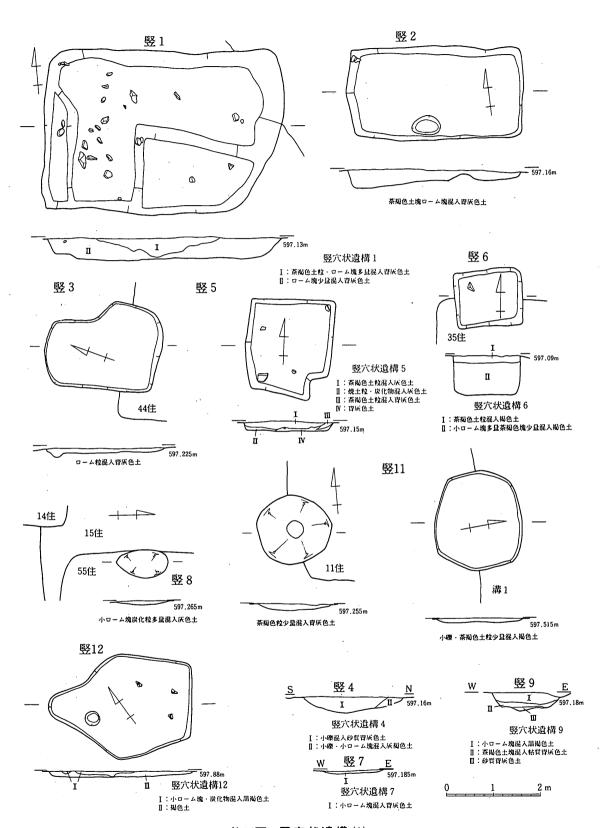
今回の調査で確認された溝は、I地区8本、II地区2本、IV地区1本、V地区2本、VI地区1本の計14本である。このうち溝1および合流する溝2は、地形・地質の項でふれている様に溝とは区別されるものである。規模は最大幅が50cm 前後の小さいものが、方向は西一東方向のものが最も多くみられた。 覆土は溝1・5・12・13・14を除き、全て灰色を呈している、切り合い関係も考慮にいれると、これら灰色の覆土をもつものは他の遺構同様中世に埋没したと考えられる。

次に、各溝について概観すると、溝 3 ・ 6 は規模・方向などの点から、つながっていて方形の区画を有していたと予想され、集落内に生活用水として引かれてきたものと考える。溝 8 は規模が大きく、 I 地区北東部ではほぼ直角におれる。底部には鉄分が沈殿しており滞水していたことが窺える。おそらく、生活用水として引水された堰で、さらにここから小さい溝によって取水していたと思われる。また、 I 地区の溝 5 と V 地区の溝12・13は、共に覆土が黒褐色を呈し、方向がほぼ一致することから同じ溝であったと思われる。尚、方形の区画を有する溝 4 は、覆土および底面の様相から水を伴なっていたとは考え難く、その性格は不明である。

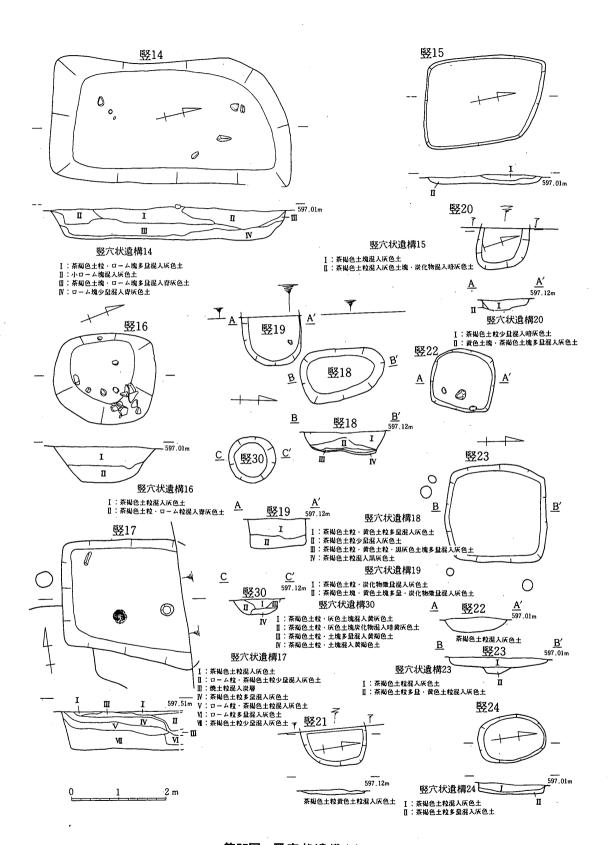
以上、簡単にふれてきたが、これらの溝の埋没時期は、覆土が灰色のものは前述の通り中世に、 それ以外のものは住居址との切り合い関係により溝 5 は V 期以前、溝14 は VI 期以前と考えられる。 尚、流れの方向等さらに検討を要す。 (山田 真一)

表 3 溝 一 覧 表

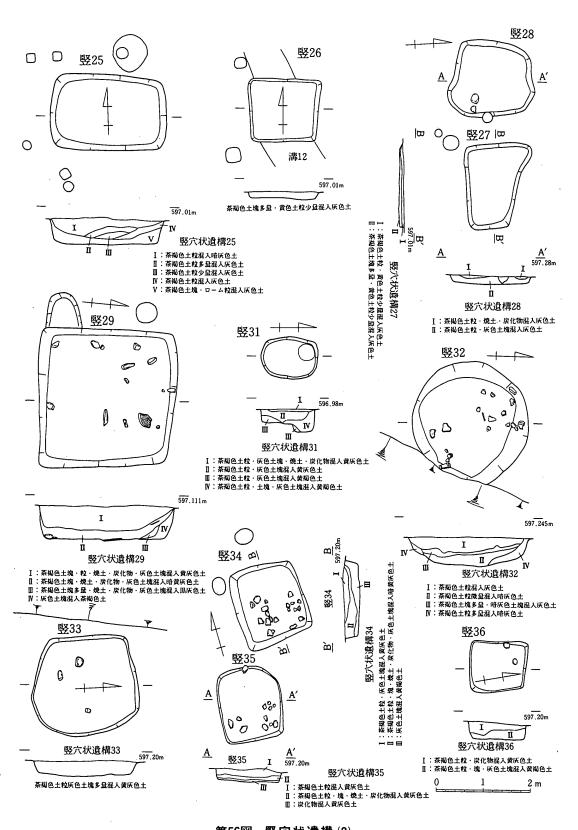
番号	位 置	方 向	 以大幅 (<i>cm</i>)	断	衐	形	. 遺 物	切り合い関係	備 考
1	地区南側	西-東	不 明	Ū	字	形	縄文土器・石鏃	全ての遺構に先行する	
2	地区南西	南西-北東	150	Ū	字	形			溝1に合流
3	l 地区中央西側	南一北一西	75	Ū	字	形	須恵器・土師器	8 - 9 - 27住,建2・3,溝1を切る	
4	▮地区 中 央	南一北一東	25	U	字	形		溝7を切る	断続的
5	地区 中央	北西-南東	170	U字A	€~ 1	V 字形		溝 1 を切り16・20・21. 建 4・竪 1 に切られる	
6	地区南西	南一北	70	Ū	Ÿ	形		溝1を切り溝10に切られる	溝8とつながるか
7	▮地区 南	北西-南東	135	浅い	Ü	字形		溝4に切られる	
8	地区東側	南一北一東	265	U	字	形	須恵器・内耳土器	溝1を切る	
9	地区東側	南一北	40	U	字	形		溝1.33・46住を切る;	溝8に合流
10	地区南側	西 - 東	40	U	字	形	須恵器·土師器	51・52住を切る	
11	N 地区 北 東	北-南	50	U	字	形		67住を切る	
12	V 地区 中 央	北一南	85	Ū	字	形		緊26に切られる	
13	V 地区 北	西-東	105	v	字	形		建15に切られる	溝12から分流
14	N地区 中 央	南西一北東	45	U	字	形		94・95住に切られる	



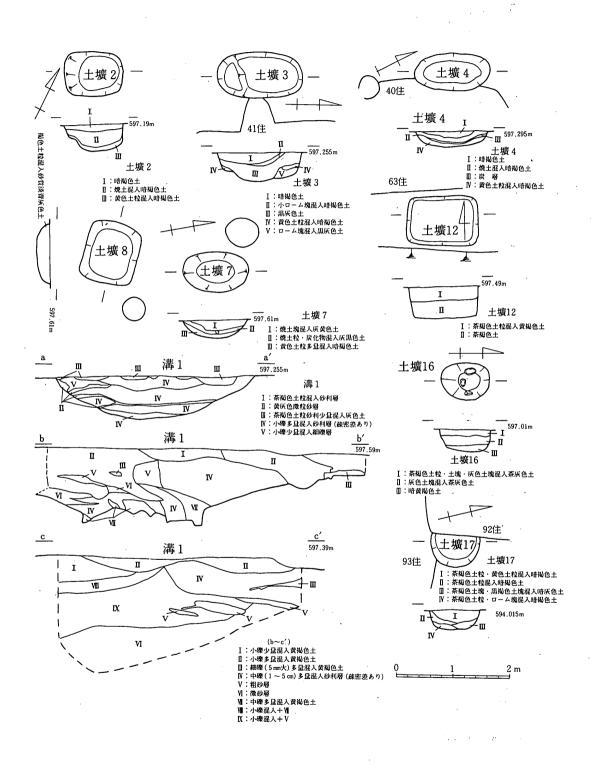
第54図 竪穴状遺構(1)



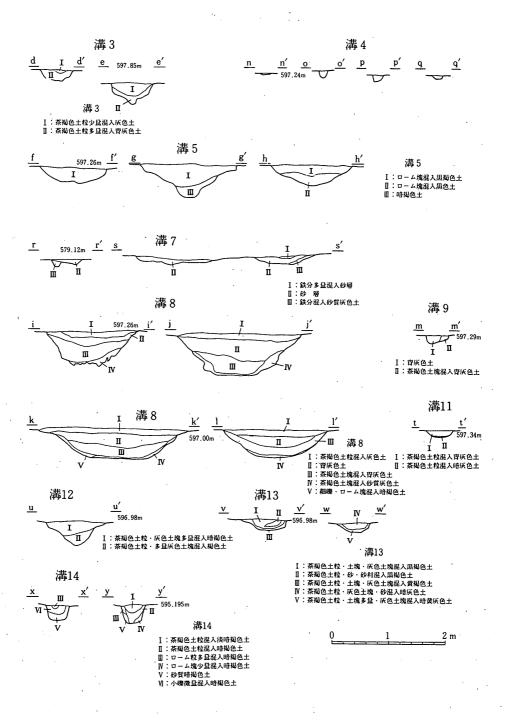
第55図 竪穴状遺構(2)



第56図 竪穴状遺構(3)



第57図 土壙・溝(1)



第58図 溝 (2)

第3節 遺物

1 十器

期日的な制約のため、すべての土器個々について細かな観察がなされず、土器を概観して、その 共伴の傾向を把えて遺構の時期を把握するため便宜的に I ~XIIIという時期を設定した。それは試 論であり今後更に検討が必要である。尚、紙面の都合上ここでは供膳形態中心に書きたいと思う。 又土器器形の名称については、高台の付くものを埦。そうでないものを坏。器高の低いものを皿と した。

I期の遺物を出土する代表的な住居に第37・38・77号住居址がある。供膳形態には土師器坏があり内面黒色処理(以下内黒と略記する)するものとしないものとがある。内黒坏は丸底気味の底部から内湾する口縁部が稜を境に短かく外傾し口縁端部は再び内傾するものの丸底の底部から内湾しつつ立ちあがるものがある。内黒以外のものは、内湾気味に大きく開いた口縁部下位内外面に稜を持ち丸底の底部に移行するものである。煮沸形態ではハケで調整された土師器甕(以下ハケ甕と略記する)とミガキを施した土師器甕がある。

II 期の遺物を出土する代表的な住居址に第68号住居址がある。供膳形態は出土遺物が少なく詳細は不明であるが擬宝珠状のつまみが付き、かえりのある小形の須恵器蓋がある。煮沸形態では烏帽子状の細長い体部に外反する口縁部をつけ底部に木葉痕を残す土師器甕があり、下部から3~4段に分けて作り積重ねる成形が認められるものである。又粘土紐巻き上げ痕の目立つものも多い。

III期の遺物を出土する代表的な住居に第11号住居址がある。供膳形態では須恵器坏・土師器坏がある。須恵器坏には2種あり無台で器高が高く底部を回転へラ切りをした後手持ちへラ削りを行なったやや丸底を呈すものと、無台で器高が低く口径・底径が大きく、底部を回転へラ切りした後手持ちへラ削りを行った所謂盤状を呈すものとがある。土師器坏は上記のやや丸底を呈す須恵器坏に類似するものである。この類の土師器坏は、本遺跡より西へ3 km 弱の地点にある新村秋葉原1・2号墳より出土をみている。煮沸形態では土師器甕が2大別でき、ハケ甕・それ以外のものがあり量的には後者が多い。ハケ甕は厚手長胴で丸底に木葉痕を残すものと、厚手丸胴で底部が大きいものがある。ハケ甕以外のものには厚手で胴が張り胴部をナデ又は削り調整を行うものがある。

IV期の遺物を出土する代表的な住居に第6号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏があり土師器坏はきわめて少ない。須恵器坏には無台と有台があり、無台坏は回転へラ切り痕を残したやや丸底を呈すものがある。有台坏は底部を回転へラ切りをした後回転へラ削りを行い高台は丸味をおびた底部端に外反気味に付く所謂ふんばる高台をなすものである。その他供膳形態に坏部が脚部より大きい須恵器高坏と脚部の太い土師器高坏がある。煮沸形態において土師器甕はバラエ

ティーに富む。ナデ調整された甕は、外湾する口縁に最大径があり長胴を呈し胴部に粘土紐巻き上 げ痕が残り木葉底であるもの。八の字形に長く外湾する口縁に最大径があり肩部が張るもの等があ る。内外面へラミガキ調整された甕は口縁部が短く立ち上がり気味に外反し肩部は強く張って横方 向にのびるものである。ハケ甕は八の字形に外湾する口縁に最大径があり肩部張らずに底部へ集約 し、ハケ目は不整方向で木葉底であるものがある。

V期の遺物を出土する代表的な住居に第57号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏があるが主流は須恵器坏である。須恵器坏には無台と有台がある。無台坏には底部回転へラ切りをした後回転へラ削りを行うものと、底部回転糸切りのみ行っているものの2つに大別でき前者と後者の比はほぼ、10:1であった。又回転糸切りのみ行っているものは、二次底部面をなすものと、底部が大きく二次底部面をなさずに立ち上がるものに細分できる。有台坏は底部を回転へラ削り調整を行い高台は底部端よりやや内側に付くものである。又有台坏は口径12cm未満の小坏12cm以上16cm未満の坏・16cm以上の大坏の3種類が認められた。土師器坏には全体が赤褐色の色調で内面に放射状暗文を施す、所謂、甲斐型坏と呼ばれるものと、厚手で底部と体部下半をへラ削りナデ調整を行う内黒坏があるが後者の個体数は非常に少ない。須恵器蓋は比較的大形で頂部が尖るあるいは偏平な擬宝珠状つまみを持つものと環状つまみを持つものがある。量的には前者が主流であり、形態的にはどちらも端部は丸味を持ちおさまるものが大部分で、端部が若干反り気味のものもある。その他、供膳形態は須恵器盤がある。煮沸形態では土師器甕と削り調整をするものがありへケ甕が主流である。ハケ甕は、くの字形に口縁部が外反し最大径が胴部上方にあり木葉底を呈すものである。以上の器種の他、ロクロナデ成形でカキ目を持たない土師器小形甕がある。

VI期の遺物を出土する代表的な住居に第59号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏土師器坏があるが主流は須恵器坏である。須恵器坏は無台と有台があり、無台坏はすべて底部回転糸切りを行っている。その中で体部が二次底部面を若干残し立ちあがるものと、底部はあまり大きくなく二次底部面をなさずに立ち上がるものとに細分できる。有台坏は底部を回転へラ削り調整を行っているものと、回転へラ削りを行っているが中央に回転糸切り痕を残すものがある。両者とも巾太の高台が底部端より内側にほぼ直立につくものである。又V期と同様大・中・小の3種類の大きさの坏が認められた。尚上記の小坏は新村秋葉原3~5号墳出土の小坏に形態・手法の点で酷似する。土師器坏は、甲斐型坏のみで、他のタイプの坏はほとんどない。V期の甲斐型坏と比べると外径指数が50~60代と変化する。須恵器蓋はほとんどのものが偏平な擬宝珠状つまみを呈すもので数は少いが若干頂部が尖るものもある。端部は嘴状のものと丸くおさまるものの2種である。煮沸形態では口縁部が短く外反がきつい土師器ハケ甕と器壁が薄く口縁がくの字に外反し胴部へラ削りの、所謂武蔵型と呼ばれているもの2種がある。その他の器種ではロクロ成形でカキ目調整を施す小形甕等があり本期より定形化する。

Ⅷ期の遺物を出土する代表的な住居に第60号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土

師器坏があり量的にはほぼ同量となる。須恵器坏は有台と無台があるが形態・手法ともVI期とほとんど変化はない。ただしVI期より有台坏がいくぶん減少する傾向にある。土師器坏は内黒の坏とそれ以外のものに分れ、内黒の坏は底部に回転糸切り痕を残すものと回転糸切りを行ったのちナデ調整をするものである。又内黒以外の坏には甲斐型の坏と底部回転糸切り痕を残し内面へラミガキ調整をするものとがあるが量は少ない。須恵器蓋は端部がもり上がり嘴状を呈すものが大部分となる。煮沸形態ではVI期とほとんど変化はないが、武蔵型の甕にコの字に外反する口縁を持つものが現れてくる。

VIII期の遺物を出土する代表的な住居に第61号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏がある。須恵器坏でVII期にある有台坏は非常に少なくなり無台坏で底部に回転糸切り痕を残すもののみとなる。その中には、わずかに二次的底部面が残っているものと二次的底部面がまったくなくなるものがある。土師器坏は内黒坏で回転糸切りの底から直線的に体部が開くものが大部分をしめ、内黒以外の坏はきわめて少ない。又上記の土師器坏の中に口径16cm以上の大形のものもある。須恵器蓋はVII期とほぼ同様である。煮沸形態の土師器甕では、武蔵型の甕のほとんどがコの字に外反する口縁を持つものとなるが武蔵型の甕がしめる割合はへる。ハケ甕はVII期のものとほぼ同様である。

IX期の遺物を出土する代表的な住居に第47号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏・埦がある。量的には土師器坏・埦で内黒のものが主流をしめ、須恵器坏の量は著しく少なくなる。須恵器坏は有台と無台があるが有台坏はⅧ期同様きわめて少ない。無台坏は回転糸切り痕を残す薄く極端に小さい底部より直線的に開くものである。土師器坏は回転糸切り痕を残すやや小さめの底部から内湾気味に体部が開くものである。土師器埦はほとんど内黒で回転糸切り痕を残す底部に断面が三角形の高台が直立に付くものである。供膳形態には上記の他に内黒の鉢がある。須恵器蓋はきわめて少量となる。煮沸形態ではハケ甕が主流をしめ若干武蔵型の甕もある。小形甕は前期と同様である。

X期の遺物を出土する代表的な住居址に第4号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏・境・皿・灰釉碗・皿がある。この時期では土師器が主流をしめ、灰釉はこの時期から確実に姿を現す。須恵器坏はほとんどが回転糸切り痕を残す小さな底部よりやや内湾気味に体部が開く無台の坏であるが、量は少ない。又色調は灰色・黒灰色を呈し焼成胎土とも悪く多孔質の特徴的なもので所謂、酸化焰焼成の須恵器と呼ばれるものの範囲にはいるものではないかとみている。土師器坏・境は内黒でミガキを施すものが主流でIX期とほぼ同様のものだが、境の中に高台が下端まで丸いものがある。又坏には口径16cm以上の大形のものもある。土師器皿は内黒で底部に回転糸切り痕を残し下端まで短い丸い高台が付くものである。灰釉碗は底部および体部下半をヘラ削りをし所謂三日月高台が付くものと巾広の下端まで丸い高台の付くものがある。器壁は全体的に薄く八の字形に開き口縁端部がやや外反するものである。煮沸形態では最大径が胴部上方にあり口縁内部に

カキ目を施す土師器ハケ甕がある。土師器小形甕は変化はない。

XI期の遺物を出土する代表的な住居址に第2号住居址がある。供膳形態の主なものに、土師器坏・皿・焼・灰釉碗がある。土師器坏は回転糸切り痕を残す小さな底部から内湾気味に体部が開くもので、この時期土師器皿は坏の器高の低いもの境の器高の低いものを指し、坏・皿とも全体的に厚手でつくりも雑な所謂土師質土器になる。土師器境はX期のものとほぼ同様の形態を示すが数量は減少する。灰釉碗は底部に回転糸切り痕を残し体部下半はヘラ削りがなされ、やや長めで下端まで丸い高台が付く深碗で、口縁内部に沈線がまわるものである。煮沸形態では羽釜が現れる。

Ⅲ期を代表する遺物を出土する住居址に第3号住居址がある。供膳形態の主なものに土師器皿・ 坏・塊・灰釉碗・段皿がある。土師器皿・坏・塊とы刈期のものとほぼ同様の形態を示すが、塊の 中に高台が高い所謂足高高台と呼ばれるものがみられる。灰釉碗は刈期に比べるとやや高台が短か くなり、器壁も厚くなる傾向を示す。灰釉段皿は回転糸切り痕を残す底部外側にわずかに丸く突出 する程度の高台が付き直線的に横にのびるものである。

XⅢ期を代表する遺物を出土する住居址に第92号住居址がある。供膳形態の主なものに土師器皿・ 塊・灰釉碗・皿がある。土師器皿で無台のものは底部が知期より厚くなり台状に突出する所謂疑似 高台と呼ばれるものになり、有台のものは足高高台が知期より顕著となる。灰釉碗は知期とほぼ同様であるが、いくぶん小形になる。

以上、I~XⅢの時期分類は、調査団内で検討したものをまとめたものである。不備な点が数多く あると思われるが、御教示いただければ幸いである。 (山下 泰永)

参考文献

樋口昇一・笹沢浩他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告む一諏訪市その4一』長野県教育委員会 1975

小林康男・島田哲男他『吉田向井―長野県塩尻市吉田向井遺跡発掘調査報告書―』塩尻市教育委員会 1983

岡田正彦「平安時代土師器等の編年試論~特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として~」「信濃」29巻~9号 1977年

荻野繁春・高木洋・楢崎彰一他『老洞古窯址群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 1981

斎藤孝正他『正家 1 号煞発掘調査報告書』恵那市教育委員会 1983

前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の路線相~瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として~」「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要III」瀬戸市教育委員会 1984

神沢昌二郎他『新村秋葉原遺跡発掘調査報告書』松本市教育委員会 1983

表 4 出土土器観察表

			ĺ								
Ą	出土地点	楚	魏	₽	地	3	4 D	飅	6. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5. 5.	\$	Ħ
			- 1	口徭	底径	臨	外面	内面		E	Æ.
-	1 87佳	土町器	丼	12.9	ı	4.5	置 褐	黒褐	内外面ミガキ,底部手持ちヘラケズリ		
87	,	海鹿	題		4.0		蹲鼠灰	背灰	ロクロナデ・闘部外面下半ヘラケズリ,肩部婚状刺突文・内面しばり痕		
အ	,	土雪器	觀	23.0			黄褐	黄褐	口縁部外面ヨコナデ・内面構位ハケ目・闘部外面縦位ハケ目・内面構位ハケ目		
4	1 38Œ	上野路	*	11.1	1	4.0	黒褐~淡茶	第一票機	内・外面ミガキ,底部手持ちヘラケズリ	日 黒	
တ	,,	"	攤				暗茶褐	暗茶褐	底部手持ちヘラケズリ・ミガキ,内面ナデ		
9	"	"	小形聽	11.8			黄褐	臨茶總	口縁部ヨコナデ・顕部ハケ目・内面工具によるナデ		
7	N 77Œ	"	*	14.9	7.8	3.5	番・黒	番	内,外面:ガキ	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	
«	"	"	"	13.0	4.6	3.6	黑褐·趙茶褐	茶褐·薄茶褐	外面ナデ・ミガキ,内面ミガキ	-	
6	"	須恵器	۵	112			黒 灰	黑灰	ロクロナデ・口縁部ヨコナデ		
ន	"	土師器	8	19.6			韓	茶褐	口縁部~開部ナデ・内面横位ミガキ		
=	"	"	"		6.2		黄	描稿	底部ナデ・関部外面ナデ・内面博位ナデ(一部縦位ナデ)		
12	₩ 68Œ	須恵器	羅	9.0	Ι	2.1	青灰	声	ロクロナデ,つまみ部ヨコナデ,天井部回転ヘラケズリ		
13	"	带剪干	小形聽	9.2			黄褐	明茶褐	7 1		
7	,	"	髌	22.4	6.7	39.8	黄褐~暗褐	黄	口縁部ヨコナデ,開部ナデ,輪積み及至巻き上げ	木葉痕有り	
15	*	*	,,	21.9	6.4	36.8	茶褐	茶福	口縁部ヨコナデ、脂部ナデ、輪積み及至巻き上げ	木葉痕(不明瞭)有り	
16	- 11#	海岸路	*	12.2	6.1	4.0	校黄灰	淡蓝灰	ロクロナデ,底部回転ヘラケズリのも手持ちヘラケズリ	底部外側からの穿孔有り	
17	*	*	*	12.6	6.2	5.1	畸灰	略 灰	ロクロナデ,底部手持ちヘラケズリ		
18	,	上歸歸		13.1	8.8	4.6	薄茶	薄茶	ロクロナデ,底部手持ちヘラケズリ		
19		海路	,	15.8	8.1	3.3	青灰	青灰	ロクロナデ,底部不明		
8	,	土師器	田	25.0			黒~茶褐	暗茶褐	口縁部ヨコナデ,胴部外面ナデ・一部弱いケズリ,内面工具によるナデ		
21	,	"	"	22.5	12.0	21.9	暗茶~茶褐	路茶	口縁部ヨコナデ,闘部外面ハケ目・内面工具によるナデ,底部ナデ		
প্ত	,	"	"		8.2		黄褐~茶褐	± ₩	闘部外面ハケ目・内面ナデ	木葉痕有り	
83	1 6 ∉	須恵器	湘	17.0	1	-	民	风田	ロクロナデ,天井部回転ヘラケズリ、婚部ヨコナデ		
22	"	"	妆	14.4	9.1	4.6	灰~黒灰	青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付け高台のちョコナデ		٠
55		*	*	14.6	6.5	8.9	楊~黒楊	揭~黒褐	ロクロナデ,底部回転へラ切り		
92	*	"	,,	15.0	11.5	4.8	殀	灰	ロクロナデ,付け高台のちョコナデ		
22	,,	*	,		8.8		青灰~灰	青灰~灰	ロクロナデ,底部回転へラ切り		
8	"	*	*	-	0.11		灰~黒灰	灰	ロクロナデ,底部回転へう切り,付け高台のちョコナデ		
ಔ	"	,	綑	15.4			黒 灰	黒 灰	ロクロナデ,口縁部ヨコナデ		
98	"	,	*		5.9		草	声灰	ロクロナデ,底部回転ヘラケズリ,開部下半回転ヘラケズリ	へう記号有り	
31	,,		用不	14.7			青灰~黒灰	青灰	ロクロナデ,坏部外部下半回転ヘラケズリ		
32	"	中野韓	*				揭~黒褐	蝬	物部外面ケズリ, 好部内面ミガキ		
83	,	海軍	ċ.	7.4	-		雷	級	ik +		
8	,		長類重				ĸ	. 天	ロクロナデ,内面しほり痕		
32	"	*	影	22.2			育灰~黒灰	青灰~黒灰	ロクロナデ,口袋部ョコナデ		
	1										

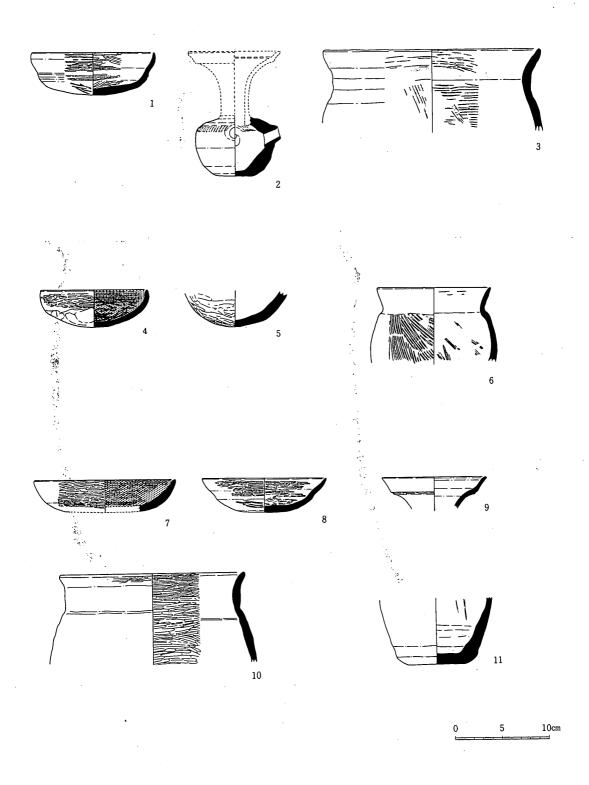
100 10					ţ,	#	(E)	4	E		
	Æ	出土地点		芴	-	·	J.60			形 · 諡 鞠 · 形 颓 9 作	龜
	98	##	塩		6.83	\vdash		略	靉	ロナデ. 口縁部ヨコナ	
	87		"		21.0	 				ナデ、輪倒み及至巻き上げ、口線部ョコナデ	
	88	*			24.7		_	璐	露	園部ミガキ,口縁部内面ミガキ・外面ナデ	
1	88	· ·	"		20.4	<u> </u>				ナデ,口縁部ヨコナデ・カキ目,闘部外面ハケ目	
1.	\$	*	*	*		8.8		İ		ナデ・顕節内面工具によるナデ	
1	41	*	*	*		4.8		蛇	48~黑褐	ナデ・関部外面工具によるナデ	"
	42	l	₩	-	21.8		<u> </u>			ロクロナデ,天井部回転ヘラケズリ	上面自然釉少量付着
	43	*	"	*	Ė				*	, つまみ部ヨコナデ,	
1	4	*	*	*				#AUT	椒	, つまみ部ョコナデ,	
1	\$	"	,		15.4	\vdash				ロナデ,つまみ部ヨコナデ,天井部回転ヘラケ	上面自然釉少量付着
	46	"	*	Ι.	15.8	<u> </u>				クロナ	線黄色自然釉多壁付着
	47		,,		18.0	1				クロナデ,	
	48	"	"	"	<u> </u>	-		"	"	ロナデ、つまみ部ヨコナデ、	
	49	"	"			7.4	3.4			ロナデ,	へう配号有り「厂 」
	B	"	*		<u> </u>					ロナデ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちョコナ	
	21	"	"		-	10.4	5.9		"	ロナデ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちョコナ	
	23	*				6.8				ロナデ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちヨコナ	
	ß	"	"	"		8.1				7 1	
	¥	"	"			11.0	9.9			ロクロナデ,付け高台のちョコナデ	
() () () () () () () () () ()	82	"	"			0.6	3.6	"	"	, 底部回転ヘラケスリ, 付け商台のちョコナ	
	28	"	"			10.0		灰~青灰	灰~青灰	デ,底部回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズ	火ダスキ状焼成頂有り
***** **** **** **** *** <t< td=""><td>27</td><td>,</td><td>"</td><td>-</td><td></td><td>9.9</td><td>3.4</td><td></td><td></td><td>ロナギ,</td><td>"</td></t<>	27	,	"	-		9.9	3.4			ロナギ,	"
	88	*	"	-		5.6	4.8	桕	批	ロナデ,	"
""" () "" () "" () " ()	\$,	"			7.3		青灰~灰	青灰~灰	ロナデ,	"
""" () "" () "" () " ()	8	"	"		_	9.6	3.8			ロナデ	"
() () () () () () () () () ()	19	"	"			7.5		銋	缸	ロナデ.	
" " " " " " " 18.0 " 14 8.9 " " " " " ロクロナデ・底部回転へう切り 中のインデ・底部回転へう切り・ナデ 日本 できます。 日本 できますます。 日本 できますます。 日本 できますます。 日本 できますます。 日本 できますます。 日本 できますますます。 日本 できますます。 日本 できますますます。 <	ଥ	"	"	_		5.4				ロクロナデ,底部回転ヘラケズリ	
" () () () () () () () () () (æ	"	,,			7.4	3.9		"	ロクロナデ,底部回転へう切り	紙付着
" # # # 11.0 8.3 核 育 灰 ロクロナデ・内面値和へラケズリ、底部手持ちヘラケズリ・付け高台のちョコナデ " 十 1.2 1.2 5.3 柏 ホー酸 ロクロナデ・内面放射状へラミガキ・底部手持ちヘラケズリ " " 1.2.1 7.7 3.9 赤 褐 国 ロクロナデ・内面放射状へラミガキ・底部手持ちヘラケズリ " " 1.2.1 7.7 3.9 赤 褐 国 ロクロナデ・内面体外代へラデガキ・底部手持ちヘラケズリ 月 " " 1.2.1 3.7 素 褐 東 湖 コンデデ・日韓部内面・部カキ目 " " 1.2.2 7.7 暗視〜暗線、ヨンデデ・開部外面・ケ目・広部・デ " " 1.2.2 第 編 ※ 橋 素 機・暗線 コンデ・開部外面・ケ目・底部・デ	ጃ	*	*	*		6.8	\dashv				內面樣付着
" 土 節 器 环 12.8 7.1 5.3 税 市 位 ロクロナデ・内面放射状へラミガキ・底部手持ちヘラケズリ " " 12.9 6.5 5.5 " " ロクロナデ・内面放射状へラミガキ・底部手持ちヘラケズリ " " 12.1 7.7 3.9 赤 褐 黒 ロクロナデ・外面下半ヘラケズリ・底部ヘラケズリか 月 " " 3.2 3.3 赤 褐 第 コンデ・口縁部内面一部カー 正部カー " " 小 形 鏡 1.7 電視〜監視、 3.3 本場へ監接 3.3 <th< td=""><td>8</td><td>"</td><td>,,</td><td></td><td>-</td><td>0.11</td><td></td><td>#E</td><td>橅</td><td>∃ ⊃ ታ</td><td></td></th<>	8	"	,,		-	0.11		#E	橅	∃ ⊃ ታ	
" " " 12.9 6.6 5.5 " " " ロクロナデ・内面放射状へラミガキ・底部手持ちヘラケズリ " " " " 12.1 7.7 8.9 赤 褐	99	"	塩		_	7.1	5.3	₽		ロクロナデ,内面放射状へラミガキ,底部手持ちヘラケズリ	
" " " 12.1 7.7 3.9 赤 褐 黒 ロクロナデ・外面下半へラケズリ・底部へラケズリか。 " " 強 25.3 元 3 元 4 本 褐 コンナデ・日韓部内面一部カキ目 " 小 形 建 7.7 暗褐~黒褐 " コンナデ・国部外面・ケ目・底部・デ " " 小 形 2 2 元 3 元 4 本 8 本 8 本 8 本 8 本 8 本 8 本 8 本 8 本 8 元 9 元 9 元 9 元 9 元 9 元 9 元 9 元 9 元 9 元	29	"	"			9.9	5.5	,,	"	ロクロナデ,内面放射状へラミガキ,底部手持ちヘラケズリ	
" " 事 25.3 茶 福 茶 福 コンナデ・日韓部内面一部か半目 " " コンナデ・国部外面へか目,底部ナデ " " 12.2 里 福 茶 稿 一部 一 コンナデ・国部外面へか目,底部ナデ	88	"	"		-	7.7	3.9	-	■	ロナデ、外面下半ヘラケズリ,	- 1
" n N 形 建	69	"	"		25.3					ヨコナデ,口縁部内面一部カキ目	(1473 と同一個体か)
// // // // // // // // 周 福 茶港~暗褐 ョコナデ (A670と	20	*		芴		7.7	ee	- }	"	コナデ、闘部外面ハケ目,底部ナ	
	11	"	,,	,	12.2				茶褐~暗褐	+	

中土地点 20	Ħ	9	o	¥		4
1 60年 上 50					\$	盆
1	底径	超	本	EC		- 1
	28	_	爾	毗	ロクロナデ,底部回転糸切り,内面ミガキ	为 黒
	2		華	.,,	ロクロナデ,内面ミガキ	"
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	4 7.0	4.4	四茶梅	"	ロクロナデ,底部ナデ	"
2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	6.2		臨	臨	ロクロナデ,内面放射状へラミガキ,底部回転糸切り周囲手持ちヘラケズリ,外面下半手持ちヘラケズリ	
2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	9.9		茶稿~暗稿	茶稿~暗褐	7 7	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		-	岛区	雪双	ロクロナデ, ヨコナヂ, 三段成形:	
1	80		和双	"	ロクロナデ,口縁部ヨコナデ	
1	18.8	T		"	厨部外面タタキ目・下半ヘラケズリ・内面ナデ・底部ナデ	
2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1		双	双	ロクロナデ,天井部回転ヘラケズリ	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7. 6.8	9.6	声区	帮风	ロクロナデ,底部回転糸切り	
2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	7. 6.0	3.5	"	"	ロクロナデ,底部回転糸切り	聖 書有り
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 7.8	4.1	灰~黑灰	青灰~灰	ロクロナデ,底部回転糸切り	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	8 6.2	4.2	数青灰~ 灰	校青灰~灰	ロクロナデ,底部回転糸切り	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	9.9	3.5	青灰	青灰	ロクロナデ,底部回転糸切り	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	6.3		"	"	ロクロナデ,底部回転糸切り	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	<i>L</i> :		"	"	ロクロナデ	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7. 7.8	4.5	茶	#	ロクロナデ・内面ミガキ,底部回転糸切り	内黒・墨む有り
	4.9	8.7	明茶稿	"	ロクロナデ・内面ミガキ,底部回転糸切り・ナデ	田 石
	7.2		茶	"	ロクロナデ・内面ミガキ,底部回転糸切り	"
7	0.		職	軍	ロクロナデ 外i	外面自然釉付着
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	8.6		南风	,	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	內面自然軸付着
7	6;		権	茶	口段部ヨコナデ・内面カキ目・扇部外面カキ目・内面ナデ	
7	5.5		瓶	瓶	ロクロナデ・外面弱いカキ目	
7	6.2		茶	茶	ロクロナデ・闘部外面カキ目下半ナデ,底部回転糸切り	
1	6.		,	,	口縁部ヨコナデ・内面弱いカキ目・関部外面ハケ目・内面ナデ	
一 47年	9.7		茶棉~暗褐	茶褐~黒褐	開部外面ハケ目・内面ナデ・一部工具によるナデ	
元 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二	- 0.		帮风	青灰	ロクロナデ,天井部回転ヘラケズリ,始部ヨコナデ	重ね焼き仮有り
	8.5	8.9	"	"	ロクロナデ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちョコナデ	
殿 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二	4.3		"	"	ロクロナデ,底部回転糸切り	
	6.5		黄	置	ロクロナデ, 底部回転糸切り, 付け高台のちョコナデ, 内面ミガキ	内無
1	6.5			"	底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ,内面ミガキ	内黒. 堡費有り
7	5.8		校茶福	"	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ,内面ミガキ	" "
" " "	3.3 5.6	4.1	黄褐~黒	"	ロクロナデ,底部回転糸切り,内面ミガキ	無
	2.3 5.6	4.0	類	黒~赤褐	ロクロナデ,底部回転糸切り,内面ミガキ	
142 " " " 15.2	52 62	5.1	黄褐~暗褐	#	ロクロナデ,底部回転糸切り,内面ミガキ	内黒, 墨書有り
148 " " " 15.3	5.3 6.8	5.1	茶梅	黒~黒褐	ロクロナデ,底部回転糸切り,内面ミガキ	内無

(5.5 183 第次~赤灰 紫灰 (5.5 183 第次~赤灰 紫灰 (5.5 183 第次~赤灰 紫灰 (5.5 183 第次~赤灰 (5.5 183 5.5 184 184 184 184 184 184 184 184 184 184	-				t	(E) #	#	æ			
1 日 1		土地点	副	从	-	-	ָ י י	8	形		
1 (4) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2		\rightarrow		1	=	\rightarrow	*				
		47∉	翻翻	羅	_	9.6			ロナデ,付け高台のちョコナ		
1	145	"	// A	五			無灰	_	ロナゼ・		
1	146		開日	形機	8.8		株		ロナデ・顕部外面カキ目、口縁部内面カキ		
	147	"	"	"		5.4		黄褐~暗褐	底部回転糸切り, 関部外面カキ目, 口縁部内面カキ		
1 4 日 1	148	"	"	概	<u> </u>	9.6	明揭~暗褐	噩	扇部外面ハケ目・内面ナデ		
1 4 位 2	149	, ,	"		$ldsymbol{ldsymbol{eta}}$	<u> </u>	黄			1	
1	150	4 住	"		<u> </u>	ļ	怒	*	ロナデ、内面ミガキ、底部回転糸切り、付け高台のちョコナ	"	
1	121	,	"			_	明茶		ロクロナデ、底部回転糸切り、付け高台	"	
1	152					\Box	舶	"	17	"	
1	153	*	*		_		校 茶	"	クロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ,内面ロクロナデのちミガキ	聖鲁有	
1	154	,,	"	,,	_	5.5	"	"	クロナデ,底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ	1	
	155	,	,	,,	_	6.9	"	"	ロナデ,内面ミガキ,底部回転糸切りか,付け高台のちョコナデ	内黒, 底部爪状圧痕有り	
	156	,,	. "	. "		8.8		"	37+5	底部爪状圧痕有り	
	157	,,	"	"		5.8			ミガキ、底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ		
	158		. "	"	-	8.6	袱	#	ナナロ		
() () () () () () () () () ()	159		"	*	-	0:0		灰黒~淡茶褐	ちョコナデ		
**** ** ***<	160						狡茶		底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ	墨杏有	
n n f 51 数 段 稿 n ロクロナデ・内面でオキ・鹿竜回転糸切り、付け減合のちョンナデ m n n f 5 41 間落稿~倍 目のエナデ・内面でオキ・鹿布回転糸切り ののエナデ・内面では本・鹿布回転糸切り ののエナデ・内面では本・鹿布回転糸切り 内肌・窒む有 n n 1 42 6 4 36 素 稿 m ロフロナデ・内面を軽くがりか 内間 ののエナデ・位置の毛糸切り 内間 n n n 1 25 n 前 48 m ロフロナデ・内面では状でがす ののエナデ・位置の毛糸切り 内間 ののエナデ・位置の毛糸切り 内間 ののエナデ・位置の毛糸切り ののエナデ・位置のモネリデ・で配回し木がり ののエナデ・位置の毛糸切り ののエナデ・位置のモネリデ・ののエナデ・位置の毛糸がり ののエナデ・位置の毛糸がり ののエナデ・位置のモネリデーを表していた。 ののエナデ・位置のエナデ・ののエナデ・位置のエナデ・ののエナデ・位置のエナデ・ののエナデ・位置のエナデ・ののエナデーを表していた。 ののエナデ・位置のエナデーを	191		*	駕	-	4	"	,,,	クロナデ,内面ミガキ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	1	
() () () () () () () () () ()	162					1.1	跃	"	l n	"	
() () () () () () () () () ()	163	,,					明茶	明茶糊	ロクロナデ,内面ミガキ,底部回転糸切り		
 () () () () () () () () () ()	164	,,	"				数類	*	9	墨魯有	
n n n E7 9条 箱 赤 箱 ロっナチ・底部回転糸切り n n 125 54 86 茶 箱 無 中の・ナチ・内面は外状・オキ n n 125 54 86 茶 箱 m ロクロナチ・内面は外・底部回転糸切り n n n 143 68 4.1 暗線・淡茶箱 m ロクロナチ・内面は外・底部回転糸切り n n n 150 6.6 59 時代機 m ロクロナチ・内面は外・底部回転糸切り n n 150 6.6 6.8 春瀬一路 m ロクロナチ・佐部回転糸切り n n 150 6.6 6.8 春瀬一路 m ロクロナチ・佐部回転糸切り n n 150 6.6 6.8 春瀬一路 m ロクロナチ・底部回転外り n n 150 6.6 6.8 春瀬・田 ロフロナチ・底部回転糸切り n n 1.2 6.6 8.8 所 のフロナチ・底部回転糸切り n n n n n n n<	165	*			-	6.	₩				
n n n 12.5 5.4 8.6 茶 物 無 ロクロナデ・内面: がキ・底部回転糸切り n n n 1.2 5.2 素 物 m ロクロナデ・内面: がキ・底部回転糸切り n n n 14.8 6.8 4.1 暗巻~淡茶物 m ロクロナデ・内面: がキ・底部回転糸切り n n n n n ロクロナデ・内面: がキ・底部回転糸切り n n 15.7 6.6 5.9 破茶場 一路 n ロクロナデ・内面: がキ・底部回転糸切り n n 15.7 6.6 5.9 放茶場 n ロクロナデ・佐部回転糸切り n n 18.0 6.1 4.3 n ロクロナデ・底部回転糸切り n n 18.2 6.1 4.3 n ロクロナデ・底部回転糸切り n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n n	166				<u>.</u>	2.3	₩		ロクロナデ,底部回転糸切り		
" () () () () () () () () () (167	,	,,				₩	當	クロナデ,内面放射状ミガキ		
" () () () () () () () () () (168	,,	,	*	"	21		"	クロナデ,	"	
" () () () () () () () () () (91		,,		_		略		ロナデ	"	
" " 第 16.9 6.6 5.9 暗 灰褐 " つっっナデ・内面さがキ・底部回転糸切り " " 「 15.7 6.6 5.9 液液・暗線 " つっっナデ・内面さがキ・底部回転糸切り " 須 惠 " 15.7 6.6 5.9 淡茶 場 " ロっっナデ・底部回転糸切り " " 18.0 6.1 4.9 " 所 日 つっナデ・底部回転糸切り " " 18.2 5.6 8.8 " 所 日 つっナデ・底部回転糸切り " " " 18.2 5.6 8.8 所 回っっナデ・底部回転糸切り " " " 18.2 5.6 8.8 所 回っっナデ・底部回転糸切り " " " 18.2 5.6 8.8 所 日 つっナデ・底部回転糸切り	170	*		,,		0	ļ	"	а	"	
" " 所 f6.2 6.8 春稿一階稿 " ロっナデ・内面さがキ・底部回転糸切り " " 15.7 6.6 5.9 校末稿 " ロっカデ・底部回転糸切り " 第 1.80 5.1 4.1 灰 白 ロッカデ・底部回転糸切り " " 1.82 6.1 4.9 " 灰 白 ロッカデ・底部回転糸切り " " 1.82 5.6 8.8 " 下 ロッカデ・底部回転糸切り " " 1.82 5.6 8.8 灰 一 四 ロッカデ・底部回転糸切り " " 1.83 5.6 8.8 灰 一 日 ロッカデ・底部回転糸切り " " 1.83 5.6 8.8 灰 日 ロッカデ・底部回転糸切り	171	,	,,			_	響	"	ロナデ,	"	
" " 157 6.6 5.9 淡末稿 " ロっナデ・店部回転糸切り " 須恵器 " 18.0 5.1 4.1 灰日 ロマーナデ・底部回転糸切り " " 18.2 5.6 8.8 " 所 ロマーナデ・底部回転糸切り " " 18.2 5.6 8.8 " 所 ロマーナデ・底部回転糸切り " " 18.1 6.1 8.8 茨 、 原 一 一 " " 18.3 5.6 8.8 次 日 ロフーナデ・底部回転糸切り " " 1.2.9 5.6 8.8 灰 日 ロフーナデ・底部回転糸切り	172	,	*				茶梅		0	"	
" 須恵器 " 18.0 5.1 4.1 灰 白 暗灰・直 ロっナデ・底部回転糸切り " " 18.2 6.5 8.8 " 成 ロっナデ・底部回転糸切り " " 18.2 5.6 8.8 " 所 中の・ナデ・底部回転糸切り " " 18.1 6.1 8.8 所 所 回っまデ・底部回転糸切り " " " 18.3 所 所 日 <t< td=""><td>178</td><td>,</td><td></td><td></td><td>_</td><td></td><td>*8</td><td>"</td><td>۵</td><td>"</td><td></td></t<>	178	,			_		*8	"	۵	"	
""" """ 限 61 4.9 "" 阪 日 ロッロナディー """ """ 12.9 5.6 8.8 "" K 日 ロッロナディー """ """ """ 18.1 6.1 8.8 K 無限 D 無限 D 1.7 "" "" "" 18.1 6.1 8.8 K 日 K 日 D<	174		匭			_	ヌ	畸灰~黄白	ロナデ,底部回転糸切り	聖 費有り	
""" "" R "" R 中央・ """	175	*	*				. " 6		ロクロナデ,底部回転糸切り		
() () () () () () () () () ()	176		,,				.8	殀	ロクロナデ,底部回転糸切り		
	177	,	,,	_			ヌ	₹			
// // // // // // // // // // // // //	178		,	\dashv	_		級双	民	ο <i>ナデ</i> ,		
	179	*	"				Æ		クロナデ、		

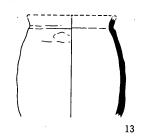
ヌ		口径 底径 器点 外				桓	EC.	我 析 · 耀 鞠 · 析 蔚 9 	a
	" " " " " " " " " " " " " " " " " " " "	5.5	灰~黒 灰~黒	~ 黒	~ 黒	. ■	10	ロクロナデ・底部回転糸切りか	
"	灰白~灰 灰白~灰	" "	" "	"	"		0	ロナデ・底部回転糸切り	
灰白~灰 灰白~灰		灰白~灰 灰白~灰	灰白~灰 灰白~灰	灰 成白~灰	灰 成白~灰		00	0 7 7.	
5.1 数灰褐 数灰褐 5.7	数灰糖 效灰糖	数灰糖 效灰糖	数灰糖 效灰糖	灰	灰	送 第 E		ロナゲ・成弱回転米切りにより、存む回転米切り	
4.1 票 灰 灰	6.8 4.1 票 灰 灰	6.8 4.1 票 灰 灰	4.1 票 灰 灰	無 次 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	¥ 130	£ K		1	
8.6				*	*		0	ロナデ、底部回転ヘラケズリ、付け高台のちョコナデ	
5.8 灰褐黄	灰 褐 黄 褐 ロ	灰 褐 黄 褐 ロ	灰 褐 黄 褐 ロ	湖 黄 褐	湖 黄 褐	韓	ů	クロナデ,底部回転糸切り	
18.6 黄 灰 黄∴灰 □ 3	黄灰黄、灰口	黄灰黄、灰口	灰 黄 灰 ロ	灰 黄 灰 ロ	灰 黄 灰 ロ	区区	ò	クロナデ	
14.8 7.1 2.9 " " ¤	a " " 2.9 " a	a " " 2.9 " a	a " " e.2	o " "		D.	0	クロナデ,付け高台のちョコナデ,体部外面下半へラケズリ	うぐいす色釉
6.5 版	灰灰	灰灰	灰灰	ヌ	ヌ	٥		クロナデ,底部回転へラ切りのち回転ヘラケズリか,付け高台のちョコナデ	暗線色點
7.7 版 白 灰 白 0.9	灰 白 灰 白	灰 白 灰 白	灰 白 灰 白	<u>а</u> я	<u>а</u> я	Ð	0	ロナデ,外面下半回転ヘラケズリ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちョコナデ	
6.4	級	級	級	R	R		00	ロナデ,底部ナデ,付け高台のちョコナデ	重ね焼痕有り
60 " " 67	6 n n	6 n n	6 n n	"	"	60	0 0	ロナデ、底部ナデ、付け高台のちョコナデ	重ね焼痕有り、底部爪状圧痕有り
18.4 黄 灰 亩 つ	黄 灰 黄 灰 ロク	黄 灰 黄 灰 ロク	黄 灰 黄 灰 ロク	灰 黄 灰 ロク	灰 黄 灰 ロク	灰 ロク	0	ロナデ,底部回転ヘラケズリ,付け高台のちョコナデ	内面全面薄緑色釉・一部コバルトブルー釉
14.6 灰 灰 ロク	灰 0	灰 0	灰 0	区区	区区	0	~	ロナデ,底部ナデ,付け高台のちョコナデ	
8.4 5.8 9.7 展 倍 " ロク	5.8 9.7 展 自 " 0.9	5.8 9.7 展 自 " 0.9	9.7 灰 白 ″ 0.9	灰 白 " 07	() ()	00	4	ロナデ,底部回転糸切り	緑黄色釉
20.8 茶 灰 黒 ロクロ	茶 灰 黒 ロク	茶 灰 黒 ロク	灰 黒 ロク	灰 黒 ロク	灰 黒 ロク	00	160	ロナデ,内面ミガキ	内黒
10.9 淡茶褐 淡赤~暗褐 ロクロ	校 茶 褐 校赤~暗褐 □ク	校 茶 褐 校赤~暗褐 □ク	校 茶 褐 校赤~暗褐 □ク	茶 褐 淡赤~暗褐 ロク	茶 褐 淡赤~暗褐 ロク	~暗稿 ロク	00	ロナデ,内面弱いミガキ,底部回転糸切り	
18.9 "暗褐 口の	の 略 略 の	の 略 略 の	品は	品は	品は	あっっ	000	ロナデ,顕部外面カキ目	
12.7 茶稿茶褐口	茶褐茶褐口	茶褐茶褐口	4 条 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 条 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 条 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	略	0	ロナデ,口縁部ヨコナデ	
14.0 明茶褐 明茶褐 三	明茶褐 明茶褐	明茶褐 明茶褐	茶褐 明茶褐	茶褐 明茶褐	茶褐 明茶褐	茶鶴	m	ヨコナデ・闘部外面ハケ目	
6.3 黄褐 茶 褐 ロク	黄褐茶褐	黄褐茶褐	黄褐茶褐	杨茶梅	杨茶梅	蟾	۵	クロナデ,闘部外面カキ目,底部回転糸切り	
8.6 灰褐~淡茶褐 灰 褐 ロ	灰褐~淡茶褐 灰 褐	灰褐~淡茶褐 灰 褐	灰褐~淡茶褐 灰 褐	茶褐 灰 褐	茶褐 灰 褐	路	0	ロクロナデ,底部回転糸切りのち弱いナデか	
10.2 6.5 9.1 茶稿~赤褐 とげ茶 ロク	6.5 9.1 茶橋~赤褐 とげ茶	6.5 9.1 茶橋~赤褐 とげ茶	9.1 茶橋~赤褐 とげ茶	1 茶橋~赤褐 こげ茶	福してげ茶	は茶	6	7 ロナデ・底部回転糸切り・胴部外面上半沈線	
7.7 6.5 7 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	こび茶 "	こび茶 "	こび茶 "	げ茶 "	げ茶 "		۵	クロナデ・底部回転糸切り	
茶褐~黒褐 黒褐~褐 口棒	(福 黒褐~梅	(福 黒褐~梅	(福 黒褐~梅	(福 黒褐~梅	(福 黒褐~梅		#	口縁部ヨコナデ・内面カキ目,騒部ハケ目・内面ナデ	(ん212の上部と考えられる。)
23.8 黒褐~茶褐 黒褐~茶褐 口粽	黒楊~茶褐 黒褐~茶褐	黒楊~茶褐 黒褐~茶褐	黒褐~茶褐	黒褐~茶褐	黒褐~茶褐	_	#	口段帘ヨコナデ・内面カキ目,扇部外面ハケ目・内面ナデ	
10.4 楊 海茶~黒褐 周部	揭 荫茶~黑褐	揭 荫茶~黑褐	揭 荫茶~黑褐	商茶~黒褐	商茶~黒褐		扇部	闘部内面ナデ・外面ハケ目・ナデ, 底部ナデ・内面偽巻状痕	
21.2 赤褐赤褐 印穆	赤褐赤褐	赤褐赤褐	福 赤 福	福 赤 福	福 赤 福	擊	**	口縁部ョコナデ・内面カキ目・駒部ハケ目・内面ナデ	
福 とげ茶~黄褐	黄 褐 乙げ茶~黄褐	黄 褐 乙げ茶~黄褐	福 とげ茶~黄褐	福 とげ茶~黄褐	福 とげ茶~黄褐	_	静口	口縁部ヨコナデ・内面カキ目,関部外面ハケ目・下半ナデ・内面ナデ	
24.2 茶褐~黄褐 茶褐~黄褐 口1	茶褐~黄褐 茶褐~黄褐	茶褐~黄褐 茶褐~黄褐	茶褐~黄褐	茶褐~黄褐	茶褐~黄褐	_	Ē	口縁部ョコナデ・内面カキ目、関部ロクロナデ・内面ナデ	
10.8 明茶稿~黒槐 明茶楊~黒褐 耶	明茶梅~黒楊 明茶梅~黒褐	明茶梅~黒楊 明茶梅~黒褐	明茶梅~黒楊 明茶梅~黒褐	黒楊 明茶楊~黒褐	黒楊 明茶楊~黒褐		曲	闘部内面ナデ・外面ハケ目・ナデ,底部ナデ	
21.4 10.2 30.8 黒褐~茶褐 茶 褐 口	10.2 30.8 黒棉~茶褐 茶 褐	10.2 30.8 黒棉~茶褐 茶 褐	30.8 黒褐~茶褐 茶 褐	黒楊~茶褐 茶 褐	茶	略	·¤	口縁部ヨコナデ・内面カキ目,関部外面ハケ目・内面ナデ,底部ヘラケズリ	
54.0 黒灰暗灰中	黑灰暗灰	黑灰略灰	灰 暗 灰	灰 暗 灰	灰 暗 灰	R	-	ロクロナデ,口縁部ヨコナデ,口頸部彼伏文,扇部外面タタキ目・内面ロクロナデ・一部ナデ	
26.0 暗 灰 " ロ	暗灰"。	暗灰"。	成 " 同	成 " 同	成 " 同		۵	クロナデ,口縁部ヨコナデ	

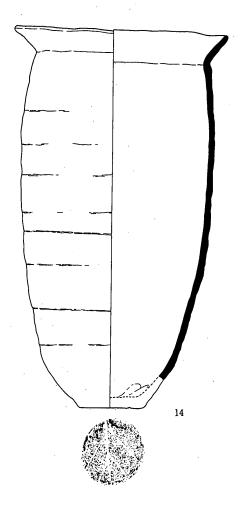
出土地点	羅紹	32	-	Ħ	(5)	E)	2			-
				H	ļ	l		以 新	- 一	_
			口径	底径	器局	外回	£7. ∉			
4 Œ	獨軍影	長蟹童		0.6		黒 灰	報	ロクロナデ,底部ナデ,付け高台のちョコナデ		
"	*	短額運		6.7		两	章 灰.	ロクロナデ,底部回転糸切り・不整方向ナデ	線刻痕有り(へう記号か)	·
"		*	·			*	. "	ロクロナデ,底部ナデ,付け高台	へう記号有り「×」	
,		觀		11.8		,	"	ヨコナデ, 闘部外面タタキ目・ヘラケズリ	トチン付着	
,,	"	題甘园	23.9	14.0	37.5	雅	张	口縁部ヨコナデ,顕部ロクロナデ・タタキ目,凸帯部ヨコナデ,底部ナデ		
2 Œ	民	麔	15.7	7.7	7.1	田田	展.田	ロクロナデ,外面下半回転ヘラケズリ,底部回転ベラケズリ,付け高台のちョコナデ		
"	"	"	7	6.8		数 黄 灰	数 黄 灰	ロクロナデ,底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ		
"	上節器	罄		9.9		超	≡ ŧ	ロクロナデ,底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ,内面ミガキ	黑	
"	"		10.2	4:1	3.2	雷	盟	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	"	林	12.6	4.5	3.5	黄褐	黄	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	"	羽	97.2		est.	黒橋~茶褐	茶楊~暗褐	ナデ、鍋部ヨコナデ	393单位	
3 Œ	. "	*	13.1	5.7	4.1 数	校茶褐~黒褐	校茶稿	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	"	E	10.1	5.4	2.8	整	華	ロクロナデ,底部回転糸切り	底部小突起有り	
"	"	施		6.0		茶褐	茶梅	付け高台のちョコナデ		-
"	"	. 🗏	9.9	5.2	5.9	校茶褐	校茶稿	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	"	"	11.1	4.6	5.9	, ,,	"	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	灰 釉	段	11.3	6.3	2.2	灰 白	EK EI	底部回転糸切り, 付け高台のちョコナデ		~ • ~.
"	"	. "	11.0	0.9	1.8	殀	展	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	重ね焼痕有り	
"	<i>"</i> .	"	10.7	9.6	5.0	校黄灰	改 黄 灰	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ		
"	"	88	15.9			成 自	医 自	ロクロナデ,外面下半ヘラケズリ,付け高台のちョコナデ		
"	"	"	16.7	8.8	6.9	"	"	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	みこみ部取れ続き仮有り ニリンケガケ, ヘラ記号有り「ニ」	-
"	<i>u</i> .	"	15.3	8.7	6.7	狡黄灰	校黄灰	ロクロナデ,付け高台のちロクロナデ	重ね焼痕有り	
"	"	"	14.9	6.5	6.8	田田	双田	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	ッケガケ	
92Œ	土師器		9.6	8.8	3.0	茶梅	茶桶	ロクロナデ, 底部回転糸切り		
,,	*	*	11.7	4.7	9.6	赤褐~褐	赤褐~褐	ロクロナデ,底部回転糸切り		
"	<i>"</i>	强	10.5	5.7	4.2	暗茶褐	黒	ロクロナデ,底部ナデ,付け高台のちョコナデ,内面ミガキ	内 黒	
	*	. 🗐	9.6	.6.3	3.2	#2	韓	ロクロナデ,底部ナデ,付け高台のちヨコナデ		
"	灰 釉	"	8.9	5.2	2.1	黄灰	进 灭	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ	白色釉	
"	"	89	13.8	6.5	5.8	灰 白	灰白	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ,外面下半回転ヘラケズリ	うぐいす色釉	
5 Œ	須恵器	高 坏	14.8	9.8	8.4	灰~黒灰	灰~黒灰	ロクロナデ,坏部下半回転ヘラケズリ,陶部端部ヨコナデ・内面しほり痕		
44∉	"	羅	5.1	ı	1.4	黒 灰	灰	チャ, 烙部ヨコナデ		
51∉	"	蒋	14.6	8.0	5.9	医 白	灰田	ロクロナデ,底部回転ヘラケズリ		
82Œ	"	スリ鉢		9.5		灰白~灰	灰白~灰	ヨコナデ,底部・側部小孔穿つ	82住の時期の遺物とはみなされ難い	
₩29	土師質	内耳土器	0.62	22:2	14.2	無機	茶橋~黒褐	ロクロナデ,底部ヘラケズリ,耳部ナデ		
1 検出面	おり	2			L					

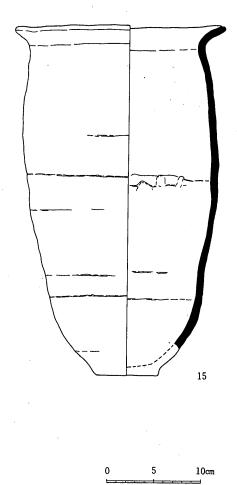


第59図 - 土器実測図(1) 37·38·77住出土

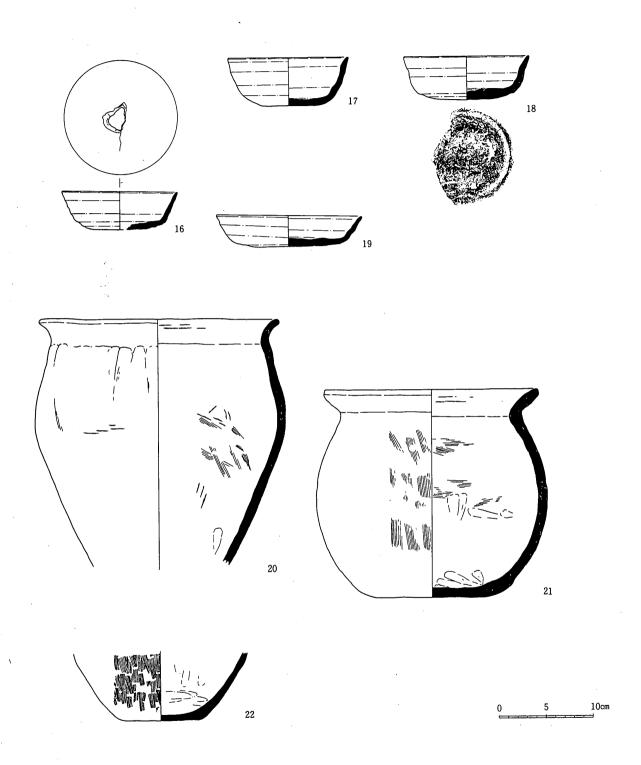




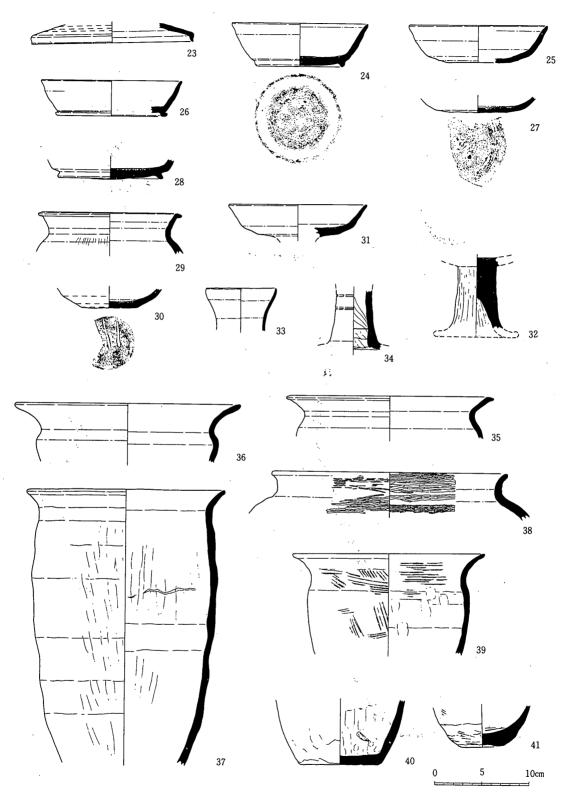




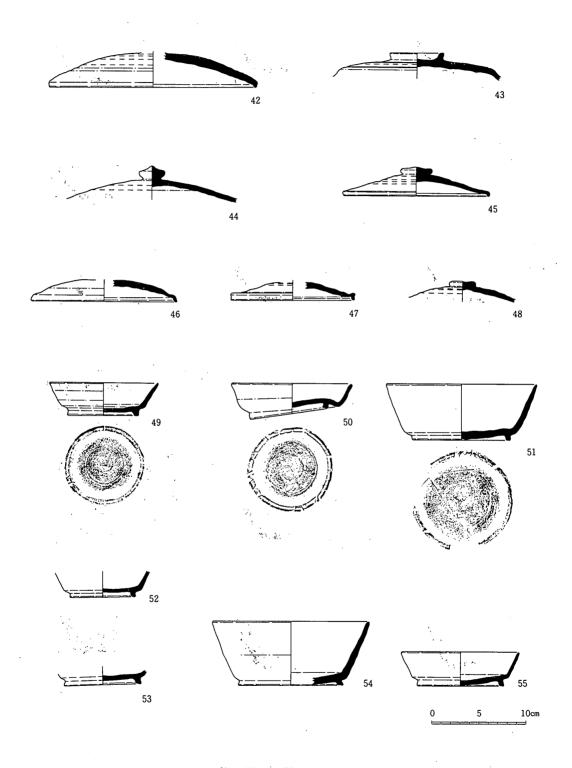
第60図 土器実測図(2) 68住出土



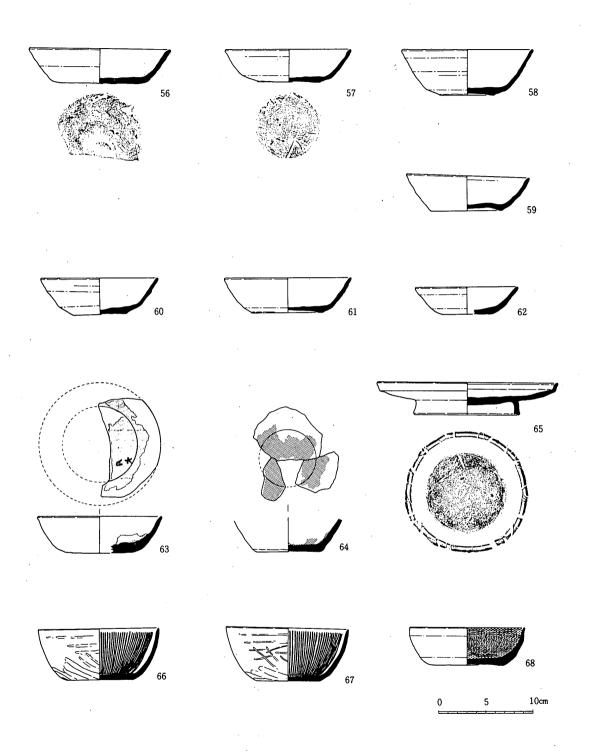
第61図 土器実測図(3) 11住出土



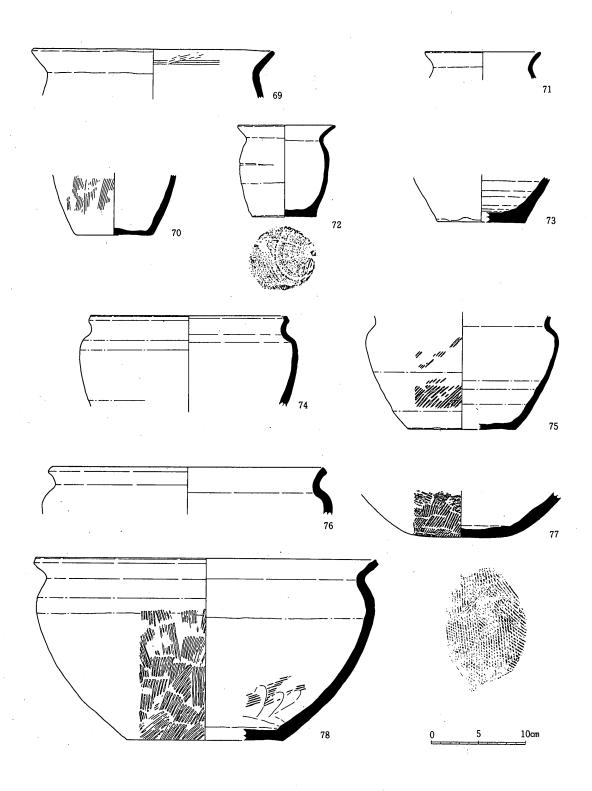
第62図 土器実測図(4) 6住出土



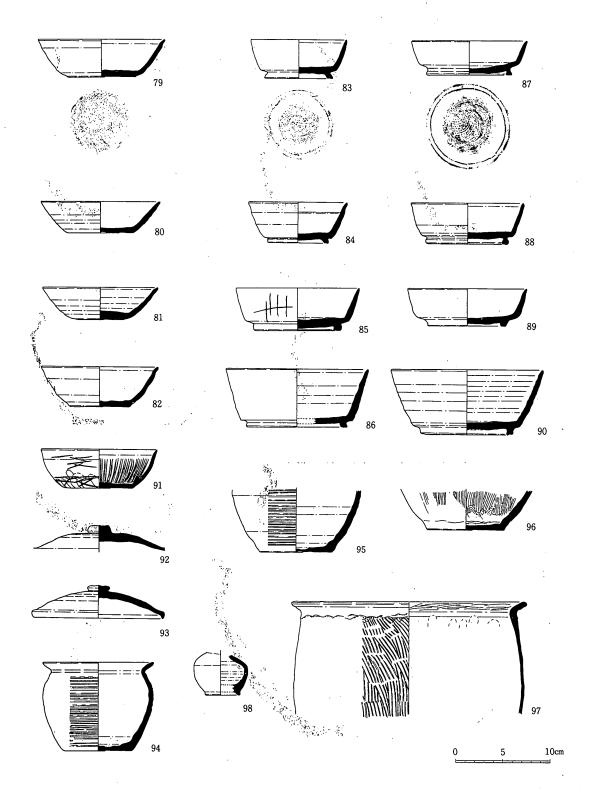
第63図 土器実測図(5) 75住出土



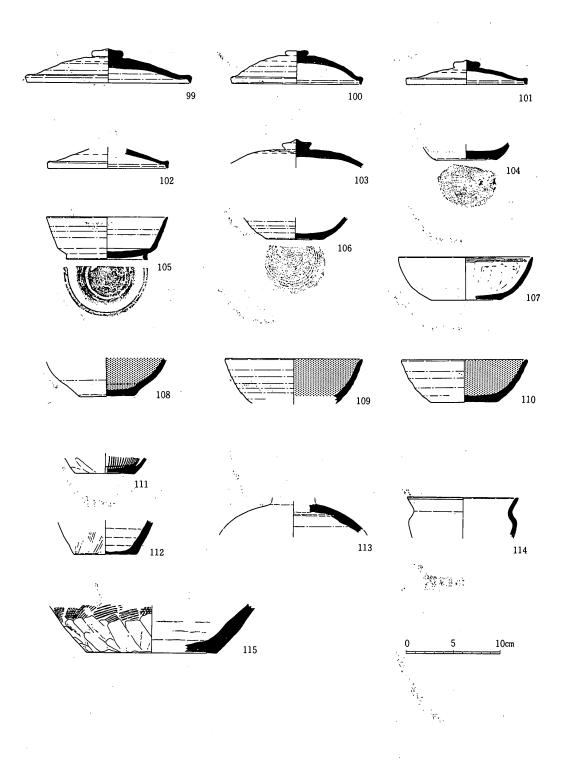
第64図 土器実測図(6) 75住出土



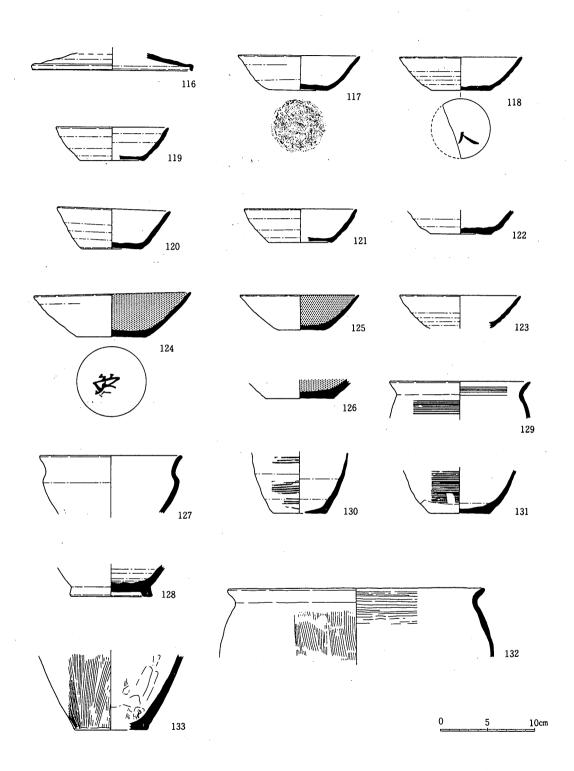
第65図 土器実測図(7) 75住出土



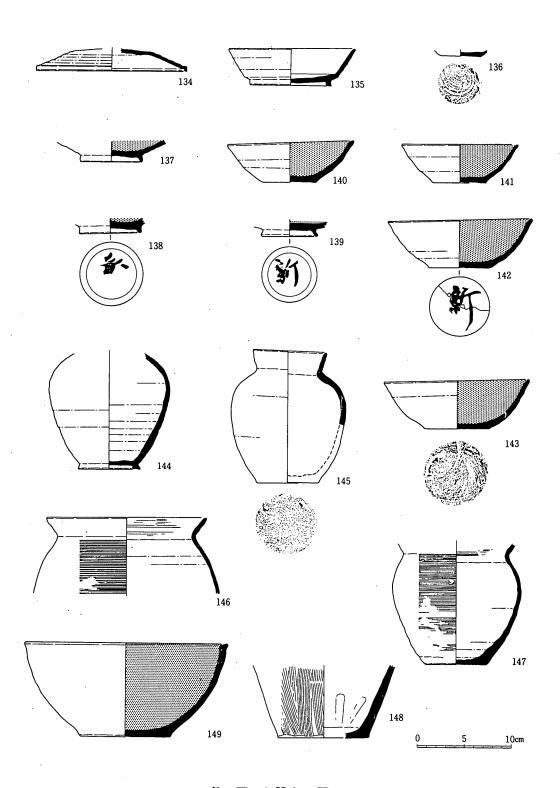
第66図 土器実測図(8) 59住出土



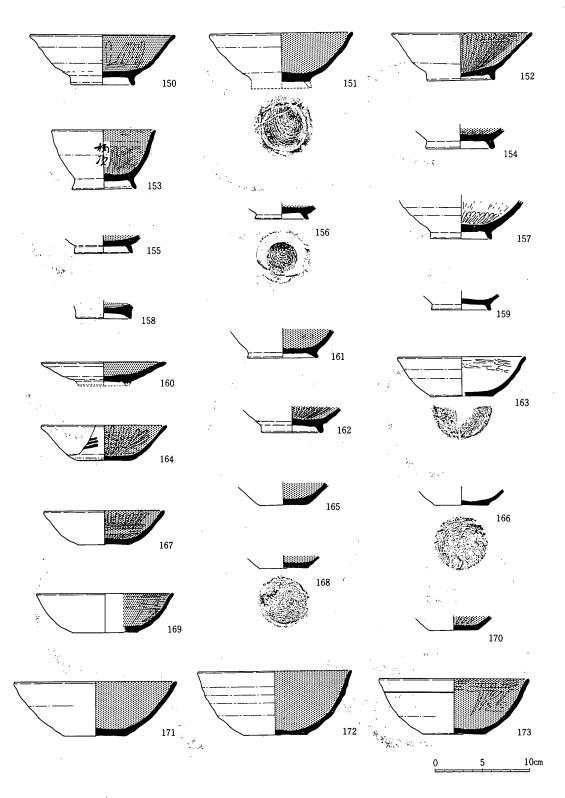
第67図 土器実測図(9) 60住出土



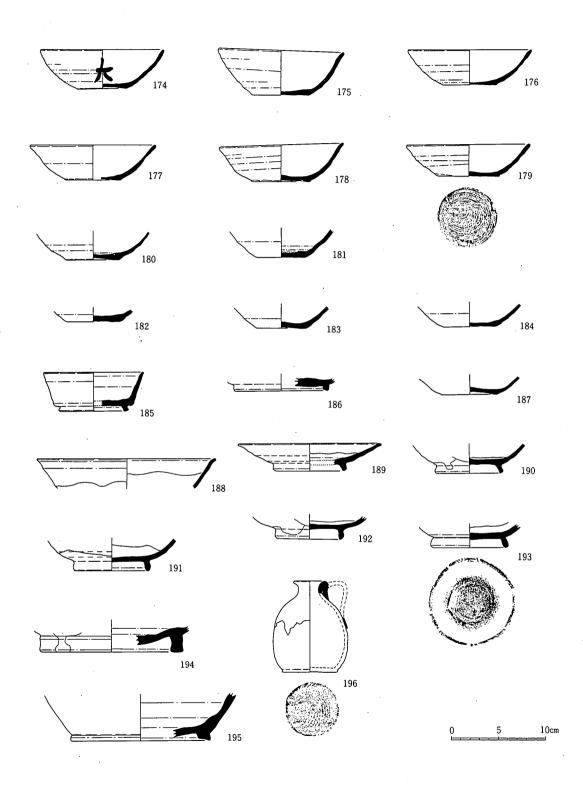
第68図 土器実測図(10) 61住出土



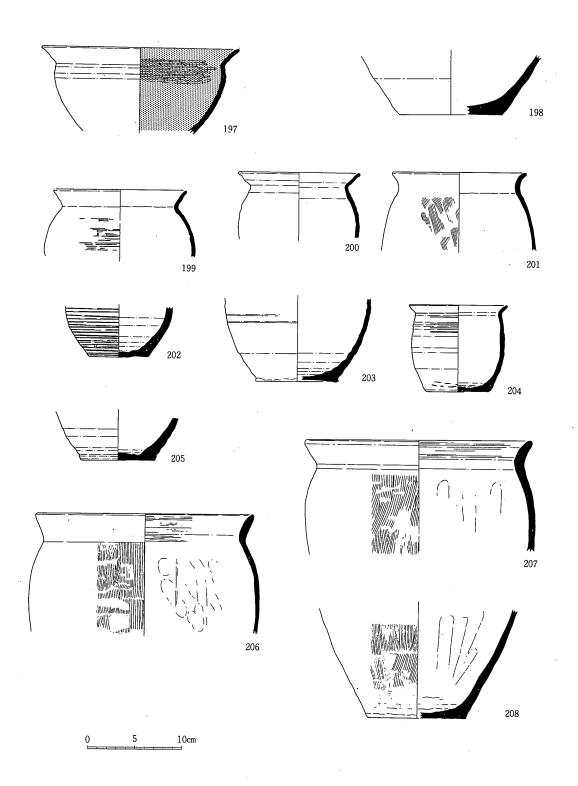
第69図 土器実測図(11) 47住出土



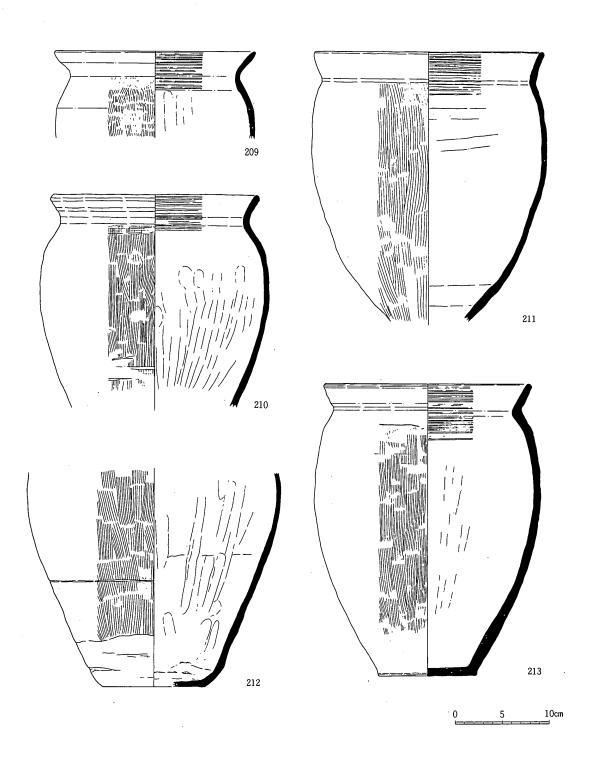
第70回 土器実測図(12) 4住出土



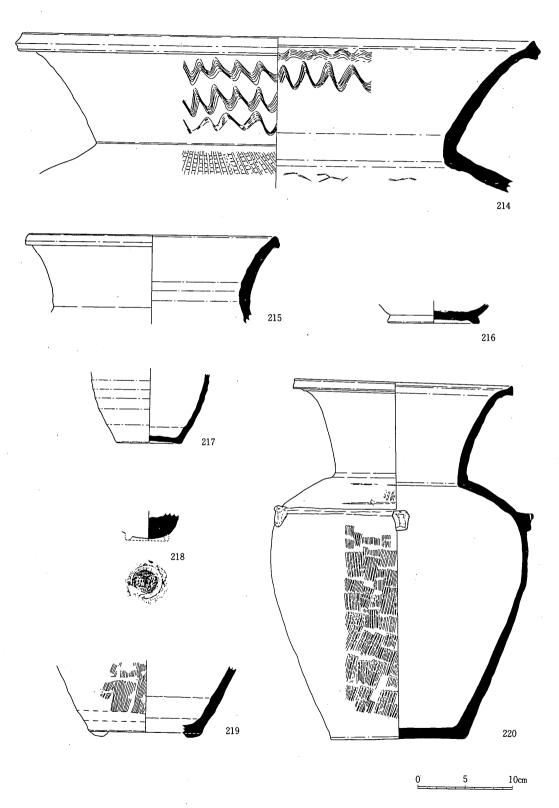
第71図 土器実測図(13) 4住出土



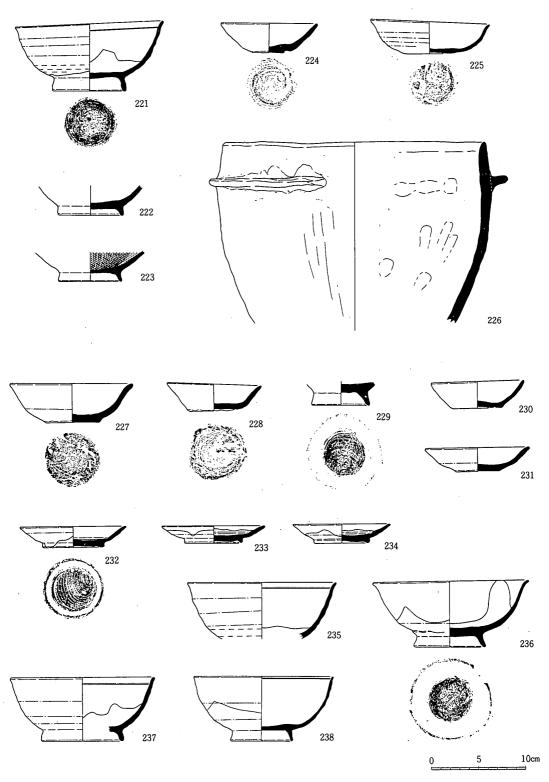
第72図 土器実測図(14) 4住出土



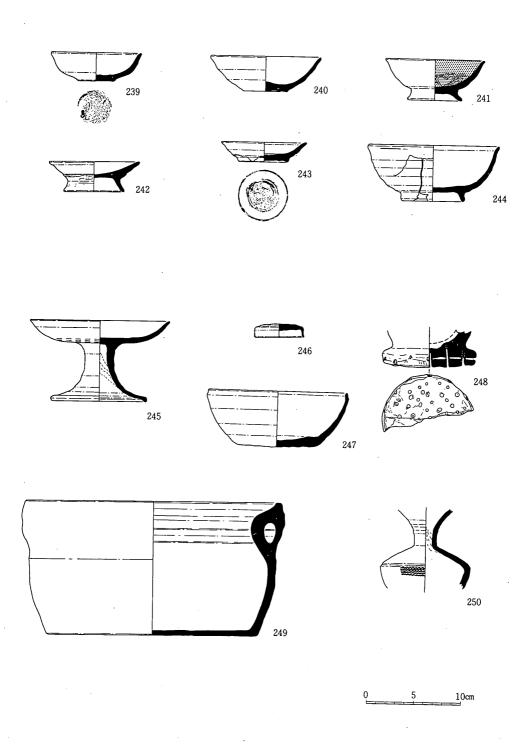
第73図 土器実測図(15) 4住出土



第74図 土器実測図(16) 4住出土



第75図 土器実測図(17) 2·3住出土



第76図 土器実測図(18) 92住・その他

2 銅製品、鉄器、銭

ここでは住居址から出土した金環と、帯金具、鋤頭、鎌、銭について若干触れてみたい。

金環は77号住居址の覆土下層より出土した。地金に付着した緑青により周囲の金張りはほとんど 剝落してかろうじて金環と分かる程であった。この地金で見る限り断面形は楕円形をなし、その厚 さは最大で3mm強、最小で2mm、曲げられた両端は尖り、かなり粗雑な素材を使用しており、 その形から推測してもやや小形のものであったと思われる。

帯金具は2点出土している。2点とも銅製で1は2号住居址北壁際、2は61号住居址床面上より得られたものである。このうち2は銙帯もしくは巡方と称される。透し穴際の一部を欠き縁辺を腐蝕しているが全体はしっかりした状態を保っており、長さ3.45cm、幅3.70cm、厚さ0.65cmと復元できる。裏面には足金具と思われる凸起が5個見えており、他に欠損部に1個あったものであろう。1は横長のもので腐蝕は2よりも進んでいる。全体の13程を欠くが、復元すると全体は長さ3.30cm、幅1.55cmと思われる。裏面には2同様に足金具が3個付くがその位置は2のように側部のみでなく、透し穴際に2個と上部に1個が見えている。これは通常正方形とした巡方の異形なものなのであろうか。

鋤頭は2点である。24は16号住居址カマド袖北際、25は88号住居址カマド袖南際より出土した。 出土状態より両者共住居址の時期を与えられる。2点共完形でいわゆる U 字形を呈する。錆びが厚く付着する為細部までは観察できないが両者を比較すると小形の24は刃部が大きく曲線を描き、耳部でやや内湾、身の厚さも幅の割に肥厚している。25は大きさの割に身がやや薄く造られている。 両者とも身全体がやや湾曲し錆びによって木質部装着部分より身の中央に "ス」が入っており、これが鍛造時の素材の接合を示すものであろう。

鎌は耕作、開墾用具としての鍬、鋤とともに収穫用具として当時の主たるものである。今回は3点出土した。すべて住居址からのものである。22は完形で鋤頭出土の16号住居址床面からのものである。比較的大形で身全体が大きく湾曲し折り返しと刃のなす角度は約115°前後と鈍角をなしている。刃部中央は研ぎ減りがかなり激しく使用頻度の高さを物語っている。又23は刃部の半分を欠するが身の厚さを除けばほぼ22と同様の形態を示すものと思われる。

銭は17種47点を出土している。このうち16種43点が同一ピット (P_{222}) からの出土である。このピットは12号住居址東 2 mに検出され、灰白色土を覆土としている。円形で上面直径28cm、深さ30cm である。銭はその上部に43ケが珠数つなぎとなり穴に紐様なものを通して錆びて一連となっていた。このようすから故意にピット上層中に置いたものと思われるのだが、類例を見ないので詳しくは分らない。

参考文献

土井義夫「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」物質文化18 1971

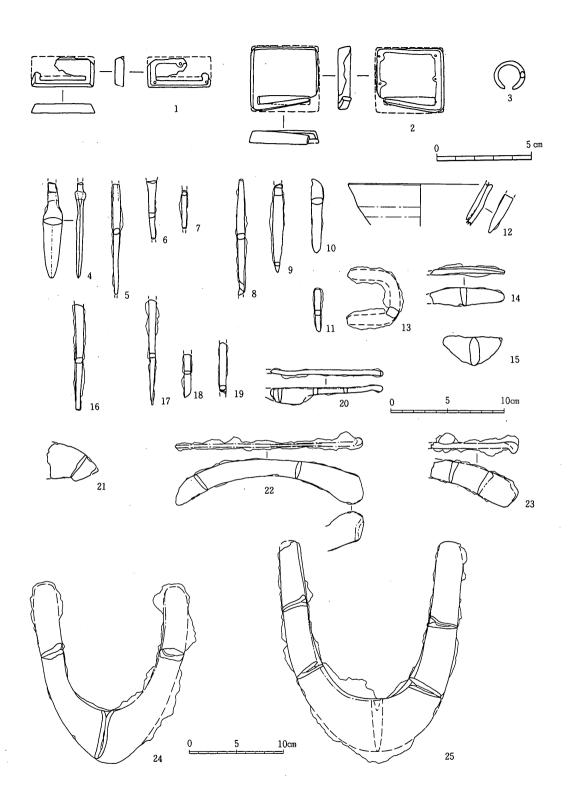
〃 「鉄製農工具研究ノート」どるめん10 1976

表 5 銅製品鉄器一覧表

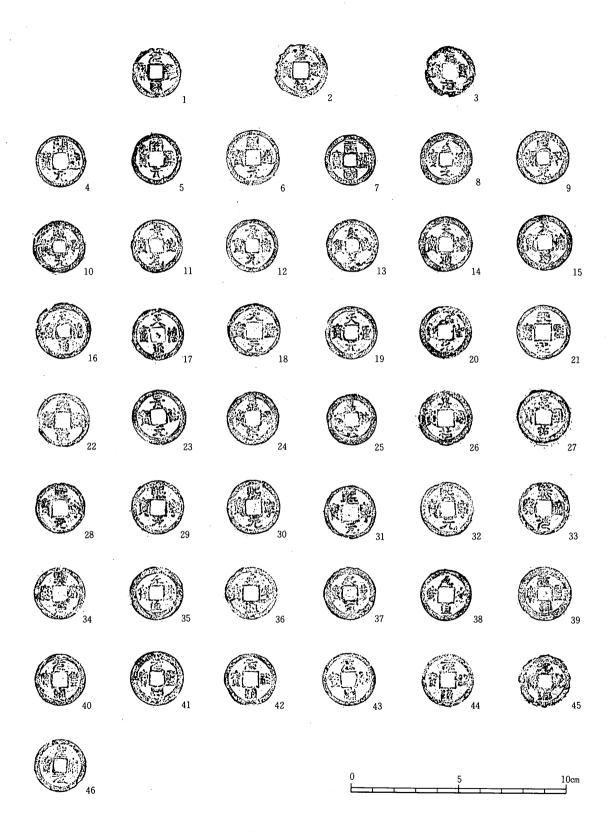
図	出土遺構	en 011	寸		法		
No.	四工退何	種別	長さ(燗)	中 (加).	厚さ(燗)	重量(g)	備考
1	2 住	銙 帯	(15)	(83)	4.5	9. 9	1/3 欠損
2	61 住	"	(83.5)	(36)	6.5	12.72	緣辺欠損
3	77 住	金 環	14.5	16.5	3.5	1.09	金張り剝落
4	2 住	鎗 先	(84)	17	7	15.8	口金付着,茎欠損
5	"	和 釘	(97)	7	5	10. 70	頭部欠損
6	"	"	(52)	9	4.5	4.70	"
7	"	"	(34)	5	4	2. 60	両端欠損
8	4 住	キリ状工具	(102)	7	5. 5	8.58	先端ヒネリあり
9	"	の み	(77)	11	7. 5	13.81	工具? 12と類似
10	"	不 明	65	11	6. 5	7. 18	片側刃部あり
11	"	"	37	6	5	3. 34	
12	"	の み	(37)	9	4.5	15.41	土師器内黒埦内部に密着している。9と類似。
13	"	不 明	48	47	7. 5	30. 77	細部不明
14		"	(66)	16	6	11.65	片側刃部あり
15		"	52	26	9	17. 82	塊状を呈し、細部不明。[他に鉄片4点(錆激しい),鉄降2点出土]
16	6 住	和釘?	(94)	8	5.5	11.25	頭部欠損
17	77 住	"	(98)	7	4.5	8.72	" .
18		不 明	(39)	6	3.5	2. 43	茎部か
19	"	和 釘	(45)	7	4.5	4. 30	両端欠 担
20	竪 29	刀 子	(100)	16	4	8. 68	先端欠損,茎は長い
21	6 住	鎌	(49)	(37)	4.5	12. 23	ほとんど欠損
22	16 住	"	201	32	5	70. 25	完形
23	75 住	"	(93)	30	7	56. 55	1 欠損。〔他に鉄降2点出土〕
24	16 住	鋤頭	188	164	9	475.0	完形
25	88 住	"	222	195	7	559. 0	完形
	59 住						鉄降1点出土

銭 一 覧 表

No.	出土地	名称	初鋳年	径	重量	備考	図	出土地	名称	初鋳年	径	重量	備考
I'va.	C4 P	元費通宝	1070	(mm)	(9)	Carles and the state of the sta	No.	ļ <u>.</u>		ļ	(mm)	(9)	
<u> </u>	64 住		1078	24.5		「寶」の字部分欠損、拓影なし	24	P 222	皇宋通宝	1038	24. 5	3. 40	周縁腐蝕
1	竪 13	"	"	23.5	2.42		25	"	嘉祐元宝	1056	24.0	4.09	
2	竪 14	嘉祐通宝	1056	23.5	2.82		26	"	嘉祐通宝	"	25.5	2. 17	周線腐蝕
8	"	紹聖元宝	1094	25.5	1.88	腐蝕かなり激しい	27	"	"	"	24.5	3.41	
4	P222	開元通宝	621	24.0	3.46		28	"	熈寧元宝	1068	23.5	3.77	
5	"	"	"	23.5	4. 04		29	"	".	"	25.0		
6	"	"	"	25.5	8.78		80	"	"	"	25.0	8.95	
7	"	唐国通宝	959	24.0	8.50	銭名明瞭	31	"	"		24.5	4. 07	
8	"	至道元宝	995	24.5	3. 52		32	,,	"	"	25.0	3.40	
9	# .	咸平元宝	998	24.5	8. 89		88	"		"	24. 5	8.55	
10	"	"	"	24.5	3. 88		34	"	"		24. 0	8.70	
11	"	景徳元宝	1004	24.5	3. 84		85	"	元豊通宝	1078	25.5	3.57	
12	"	"	"	24.5	3.96		36	"	"	"	24.0	8.82	
18	"	"	"	24.5	4. 18	腐蝕かなりすすむ	87	"	"	"	25.0	4. 07	
14	"	天禧通宝	1017	25.5	8.74	115	38	"	"	"	25.0	8. 85	
15	"	"	"	26. 0	8.96		89	"	"	"	25.0	3.48	
16	"	"	"	26.0	3.43		40	"	"	"	25.0	3.80	
17	"	"	"	24.5	4.42		41	"	"	"	24.0	3. 30	
18	"	天聖元宝	1023	25.0	3. 37		42	"	元祐通宝	1086		8. 88	
19	"	"	"	24.5	8.65		43	"	//	"		8. 34	
20	"	"	"	24.5	4. 25		44	"		"		3.97	
21	"	"	"	25.5	4.27		45	"	"			2. 41	腐蝕激しく欠落あり
22	,,	"	"	25.0	8. 55	腐蝕すすんでいる	46	"	聖宋元宝	1101		8. 28	PRINCE ON THE ONLY
28	"	景祐元宝	1034	25.5	8.50		1		22/11/038		J. 0	0.20	
				!									



第77図 銅製品・鉄器実測図



第78図 銭 拓 影

3 土製品、石器、石製品

今回の調査で出土した土製品には表の如く紡錘車と土錘がみられる。共に大形のものと、平均的な大きさのものとがみられる。特に土錘は出土数が少なく判然としないが、大きさの違いは用途の違いを窺わせる。

石器・石製品は、砥石・硯・石臼・編物用石錘が出土している。尚、表には土器の実測図を載せた住居址および唯一の出土であった硯についてのみ記した。砥石のうち6~8は携帯用であり、石質は粘土質岩であった。また、同じ石質の9は安定しない形であるが使用痕が多く手持ちで使われたであろう。何れも仕上砥として用いられたと思われる。10~14は固定式で石質は砂岩である。石材の質が中粒の14は中砥として、他の粗粒のものは荒砥として用いられたと思われる。また、これらの中には線状の砥痕を持つものと、面状の砥痕を持つものとがみられた。硯と石臼は共に中世の遺構から出土した。硯は、裏面が欠損しているため厚さは不明であるが、あまり厚くはなかったと思われる。石質は粘板岩で、産地は上伊那郡横川であろうか。石臼は竪29から出土したが、遺構の性格が特殊であるだけに注意される。

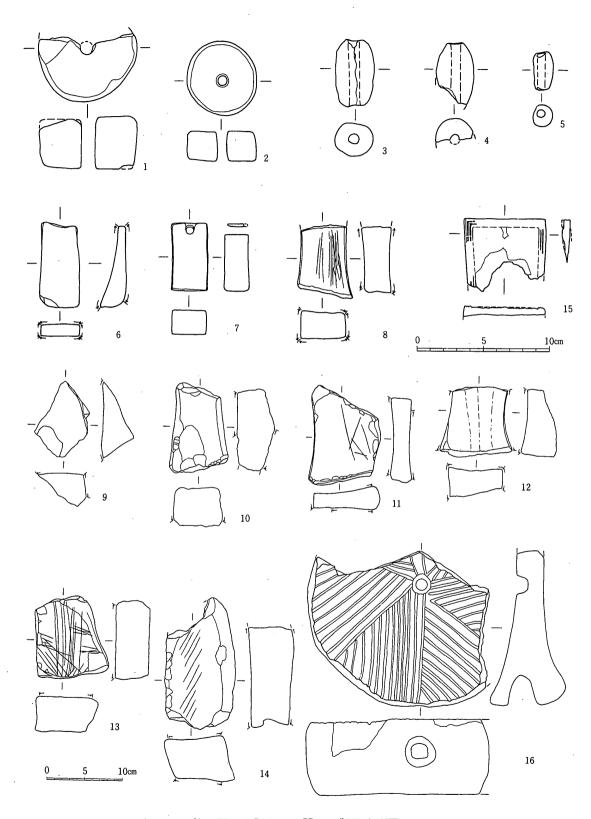
表 6 土製品・石器・石製品一覧表

土 製 品 一 覧 表

No.	品		名	比出	土地	長さ(cm)	最大径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備		考
1	紡	錘	車	6	住		7. 5	1	3.8	(147. 63)	1/2欠損		
2		"		62	住		5.3	0.8	· 2.3	88.40	完形		
3	土		錘	6	住	5.0	2. 9	0.8		36.06	<i>"</i>	大形	
4		//		75	住	(4.6)	2. 9	0.8		(19. 13)	1/4 欠損	//	
5		"		61	住	2. 8	1.5	0. 6		6. 15	完形	小形	
		//		62	住	3. 3	1.9	0. 5		9. 27	"	//	
				竪	13	4.3	2. 1	0.6		10. 35	"	"	

石器・石製品一覧表

No.	品	名	出土	.地	長さ(cm)	巾 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備考
6	砥	石	4	住	6. 2	3.0	3.0	36. 96	粘土質岩	低滅激しい
7	"		11	住	5. 1	2. 7	2. 6	53.74	"	紐孔用貫通孔あり,使用痕少ない
8	"		"		(5.4)	(4.0)	(3.4)	(76.41)	"	半部欠損,線状砥痕あり
9	<i>II</i> .		3	住	10. 0	7. 1	6. 1	200	"	周囲は鋭いまま
10	"		4	住	11.7	7. 7	6. 5	610	砂岩	〃 敲打・研磨して調整
11	"		//		13.1	8.8	8.8	470	"	″ 線条砥痕あり
12	"		6	住	9. 1	9. 7	7. 2	510	"	幅1~2cmの面状砥痕あり
13	//		60	住	10. 7	9. 5	8. 2	760	.#	周囲は敲打研磨して調整,線条砥痕激しい
14	"		92	住	17. 0	9. 3	8.3	(1430)	"	片端欠損,線条砥痕あり
15	硯		竪	1	(5.4)	6. 2	(0.6)	(21.6)	粘板岩	半部・裏面欠損,縁に文様あり
16	石	E	竪	29	(24. 2)	(20.7)	10. 0	(4.8 kg)	安山岩	1/2欠損



第79図 土製品・石器・石製品実測図

第4節 小結

今回の発掘で実質的に検出を行なった面積は I 地区5339、II 965、III 354、IV 1477、V 756、VI165 m²の計9056m²である。遺構の分布は II 地区で西側が疎となる様子を示しているがこれは II トレンチで分るように何らかの影響によって遺構に砂層を含む土が被覆していたためである。その原因は現在不明である。時期的な遺構占地の傾向としては、V 地区の中世遺構が特に目立つ。又やや微視的変化ではあるが I 地区の東側に古墳時代の住居址 2 基が位置し、西側には 1 ~ 3 号と平安時代末期の住居址が検出されている。時代が下がるにつれて段丘崖際から内部へ徐々に生活の中心を移していったのかも知れない。ここでは遺構の種別に添って気づいた点を述べる事とする。

住居址は欠番と堅穴状遺構を含みながら97まで番号を付した。上屋構造に関しては、意外と住居 址内にピットの検出が少なく12号は方形に並ぶ唯一のものである。非常に深く二段底を呈していた。 又75号はピットを設けず浅い穴を穿ち大きな石を置いて礎石としたものであろう。配置も隅に5ヶ、 その中間に1ヶずつ、カマド際は左右に2ヶの配置を行なっており非常に興味深い例であった。34 号からは覆土中より多量の焼土と、炭化材が認められる。しかしその下部覆土の様子から本址は火 災に遭ったものではなく、埋没途時の痕跡と考えられよう。

カマドは長い煙道と煙出しをもつものが多い。壁中央寄にあるものと、隅に位置するものとがある。カマドの設けられている方向は33号、82号と34号の旧カマドが北に位置し、他はすべて東或いは西壁になっている。後者は5例しかなく、北西部2基、北東部3基である。11号煙出しにはピット周囲に3個体分の土師甕が貼ったような状態で置いてあった。このようなあり方は75号にも見えており、時期的な特徴とも云えようか。又、袖部を造っているもの、壁の掘り残しで袖の代わりとしたもの、袖が無く壁を掘り込んだのみのもの、その形状も U字形、V字形など多様に見せており、今後更に検討する事が必要である。

・遺物の出土状態についてみると、68号カマド火床部より大型の甕2点がいれこになって出土している。75号カマド北袖前床面には非常に浅いピットがあり、その中から須恵器坏3点が重なり須恵器盤、土師器小型甕などと共に出土した。ほかには鋤頭が2点完形で出土している。16・88号からのもので両者共カマド袖部に置かれたような状態であった。以上その器物、道具の配置をうかがい知る良好な資料となろう。なお72号カマド横に大きな内側への張り出しが見られ、その用途も共に考えなくてはならない。

建物址は I 地区の中央やや東寄りに 5 棟がみえている。 5 と 6 、 7 と 8 は前後関係を示しながら 規模もさほど変えていない。位置、方向からすると建て直したものと思われる。又、これらのうち には方形の掘方をもつものがあり、掘方底までしっかりと入った柱痕跡をも見る事ができた。この ような事からやや特殊な用途を想定する事ができる。 竪穴状遺構と土壙については当初その覆土上面の土色について分類を行なった為、遺構の時期についてはともかくその規模、形状などで事後処理に若干問題が残ってしまった。今後の検討とする。 溝は14本検出した。そのうち自然流は1、2である。3と6、8と9は方向がU字、L字になっており、集落内へ導水したのではないかと考える。

ピットは約700基検出した。これらのうちには建物址同様に柱痕跡を残しているものも見られた。 ただ灰色系の覆土をもつ中世のピットはV地区に非常に多いのであるが浅く、小型であり、建物址 を復元することはできなかった。

最後に巻頭カラーの75号住居址出土坏に付着して出た"紙"について簡単に述べてむすびとする。 紙は坏内部に斜目に付着しておりその状態はあたかも食べ残しのものが僅か底に残り、この器が斜めに置かれているため一方の底にかたまったとでもいう状態であった。

紙は最も厚い部分で 5 mm、表面はほぼ平らになってはいるがその内部は 2 ~ 3 mm の虫が入ったような穴が走り、あたかもダンボール断面様に中空部分が多い。紙そのものは植物質の繊維を失って褐鉄鉱化しており、紙とも言えない状態になっている。

この表面に左字で"月"の字が見えた。これは毛筆によりしたためられたもので大きさは8 mm×5 mm、紙が裏返しになっている為逆に透けて見えるものと判断した。更に月の下に文字らしきものが見えた為奈良国立文化財研究所にお願いして赤外線テレビで調査をして頂いた。この結果月の字の下に"大"の字が判読された。更に遺物の角度を変えて文字を探したがこの2文字以外は見い出す事ができなかった。

記された"月大"であるがこれは何を意味しているものか現在のところ不明である。しかし暦に関わる文字ではないかという見方がある。大の月、小の月と云われるその大の月を示すものではないかとの考えである。

多賀城などでは漆紙文書として漆付着の紙が出土しているが、本例では漆の付着は見られず稀有な例と云えよう。 (この紙の保存についてはパラロイドB62の5~10%液を塗布した)

なお、これとは別に同じ75号住居址より坏内面に付着した漆を見つけた(64)、漆は黒色を呈し底一面から体部 1 ~ 3 cm 程まで薄く塗ったように付いている。漆は割れ口にも付着している事から破損した坏を再利用したものであろう。漆容器として利用してきたものだろうか。(高桑 俊雄)

赤外線テレビは奈良国立文化財研究所写真室 佃氏にお願いした

文字判定は平城宮資料調査室 橋本義則氏らを煩わせた。

顕微鏡調査は大町髙校教論 森義直氏にお願いした。暦との説も同氏による。

遺物処理は奈良国立文化財研究所保存工芸室長 沢田正昭氏の御指導を得た。

第4章 高綱中学校遺跡

第1節 調査の概要

発掘を行なった地区は、周囲の水田とは異なり、以前建設工事の資材置場として使用し、荒地のまま放置されていた。そのため表面には他の地区より持ち込んだ土、砂利等が堆積し、検出面迄も80~90cmとかなり深く、排土置場も広く必要となり、実際調査面積は約650m²である。

遺構は鉄分の沈澱する茶褐色土中に灰色の土を落しており明瞭に分かるのだがいずれも覆土は非常に固い。遺構は方形の大きな落込みと、ピット計56である。ほかに廃材を捨てたとみられる深い穴が5ヶ所にある。方形の落込みは住居址というより竪穴状遺構としてとらえた。又ピットは配置、土色より4棟の建物址を復元する事ができる。

出土した遺物は土師器坏・甕・埦・須恵器坏、甕、灰釉陶器など計30余点と少ない。奈良時代末 ~平安時代末期の様相をみせている。 (高桑 俊雄)

第2節 遺構と遺物

1 竪穴状遺構

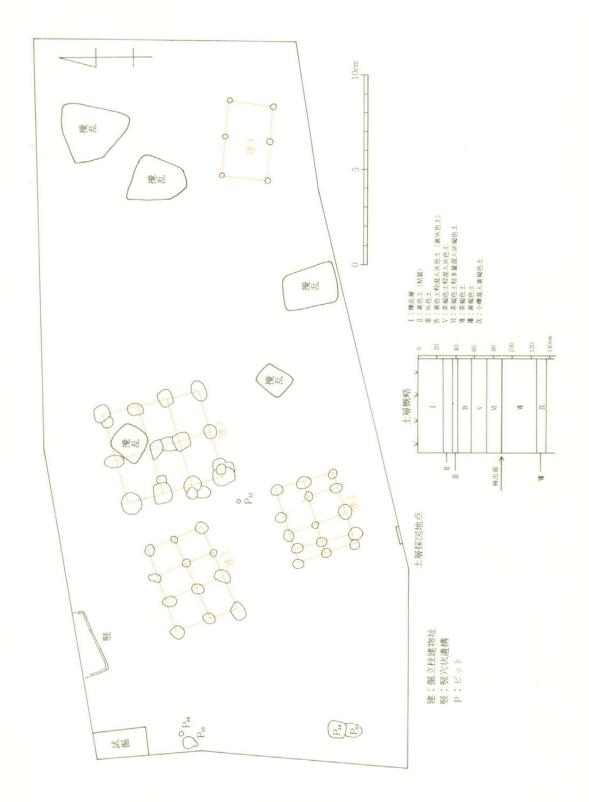
用地内西側に検出した。北側には排土があり、全容は調査できなかった。鉄分を多量に沈澱している茶褐色土層へ掘り込まれ、礫を少量含む灰褐色土を覆土としている。この様相は付近の建物址と同様である。壁は一様ななだらかさをもち床面は下層の礫直上で遺物の散布が終わるためこれを本址の床面として把えている。焼土などは全く見られず、住居址というよりは竪穴状遺構とした。

遺物はすべて小片であり須恵器坏・甕、土師器のハケ甕等が出土した。 9世紀~10世紀の様相を 呈しているがすべて覆土中からのものでありその量も約10点ときわめて少ない。

本址の一辺が南側に検出した建物址 1 ~ 3 の梁方向と一致しており、時期も上がるものであろうか。

2 建物址

調査地区のほぼ中央に3棟、南東隅に1棟検出された。中央の3棟は全て総柱式の建物で、建1は4間×2間、建2・3は3間×2間である。また北西に位置する建4は側柱式の建物で、2間×



第80図 遺構配置図・土層概略

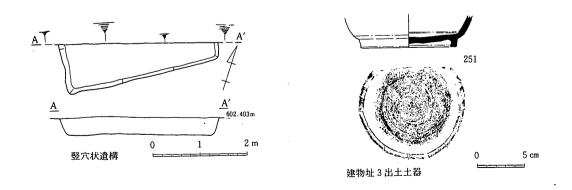
1間である。面積は、建 1 が12.8 m^2 、建 2 が16.3 m^2 、建 3 が26.9 m^2 、建 4 が10.3 m^2 であり、建 3 が他の 3 棟に比して大きい。柱穴の掘り方は全て坪掘であり、平面形は建 1 ・ 4 が円形、建 2 は主として円形、建 3 は方形と円形が混在してみられた。柱穴の深さは、建 1 ・ 2 がその径に比して極めて浅く、建 4 は径に比して深く良好であった。なお、建 1 ・ 3 には、 2 段底を呈し柱痕が観察できたものもある。柱間寸法は建 1・2 が1.6m、建 3 は桁行が1.8m、梁行が2.4m、建 4 は桁行が2.0m、梁行が2.4m程を測る。

遺物は概して少ないが、建3の P_{39} 覆土中層から須恵器坏が1点出土している。この遺物からすると建3は奈良時代末~平安時代初期に該するものである。また、建 $1 \cdot 2 \cdot 3$ は位置および主軸方向の振りから同時期あるいは連続して設けられていたと思われる。

第3節 小結

昭和30年頃、今回の調査地よりほぼ西へ50mに位置する高綱中学校プール建設の際に、土器と共に焼土等が見つかり、住居址らしきものの存在をうかがわせた(1)ことより、今回はなるべくその位置に近い場所を選定し発掘調査をした。しかしその結果は前述のようなものであった。また、用地内北西隅に検出面からの深さ約1.5m程のグリットを設けた。その結果は南側の土層採図地点とは異なっており、検出面直下から大小の礫層となっていた。当時の生活面もこの礫層上にあったものと思われ、中学校へ近づく程遺構埋没が浅くなっているのではないかと思われる。調査範囲がやや狭かった為、遺構・遺物の量もさほど多くはなかったが、掘立柱建物址が4棟検出されたという背景には、付近に該期の住居址が存在したことが予想される。尚、本年には高綱中学校グランド拡張に伴なう発掘調査も予定しており、今回の結果と併せて検討することができよう。(高桑 俊雄)

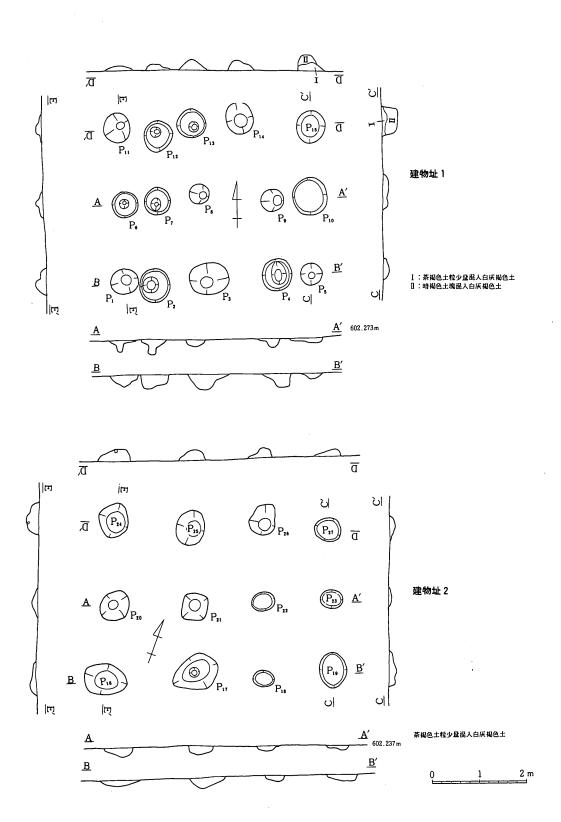
(1)「東筑摩郡、松本市、塩尻市誌」第2巻歴史上



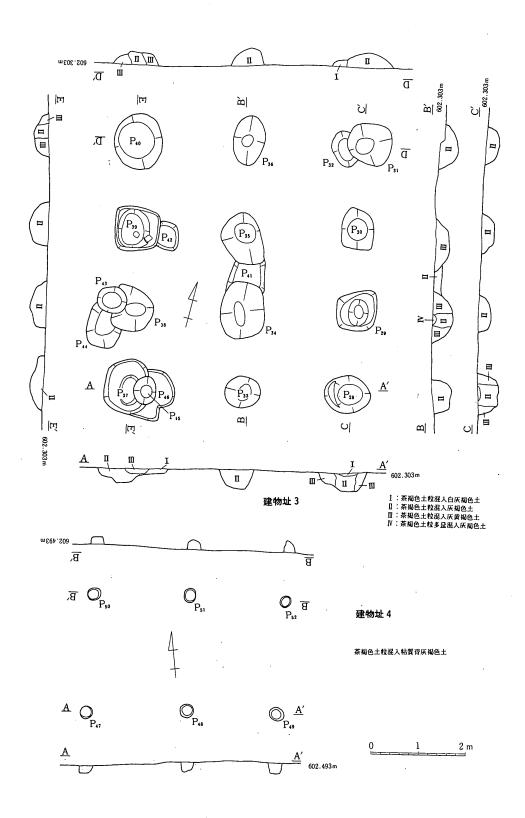
第81図 竪穴状遺構,建物址出土土器

表 7 建物址一覧表

	× /	生物业-									
番号	平面形	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	ん	穴 見径	規 模 短径	(cna) 探さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址 所見
1	長方形	N-89°-E	(·4間)×2間	桁 0.6~1.5	1	59	53	24	円形		調査地区中央南側に位置する。
1		1	4.0 × 3.2	梁 1.6~1.8	2	70	54	30	13 //2	柱痕あり	総柱式の建物で茶褐色土中に検出された。提
Ī			-		3	81	61	33	楕円形	and or y	あた式の建物で採締己上中に使用された。第 り方は円形で浅く、柱痕の検出されたものは
					4	67	63	30	円形		2段底をなす。
					5	47	46	9	13 10		-
1					6	56	55	24		Herth	遺物の出土はない。
					7	58	56	30	"	柱痕あり	
				ľ	8	43	42		"		·
					9	49	47	14			
1					10	80	74	12	"		
l					11	64	57	<u> </u>			
l					-		\vdash	14	"	the eff a b	
					12	66	60	35		柱痕あり	
					18	61	61	21	"		
					14	66	57	21			
2	用七郎	N-70° D	9.89 > 0.00	#E 1 / 1 -	15	67	61	31	//		
'	良方形	N-70°-E	3間×2間	桁 1.4~1.7	16	90	65	10	不整方形	lb.mc : :	調査地区中央やや西側に位置する。
l			4.8 × 3.4 (3.1)	架 1.5~1.7	17	103	75	24	"	柱痕?あり	総柱式の建物で茶褐色土中に検出された。堀
					18	45	34	11	円形		り方は円形が主で,非常に浅い。 P 26は,や
					19	75	59	13	楕円形		や張り出す北側へゆるやかに立ちあがり抜き
					20	70	60	12	不整円形		取り痕かと思われた。
					21	55	52	20	方 形		遺物の出土はない。
l					22	50	46	9	円形		
					23	48	40	5	"		
					24	74	65	26	不整方形		
					25	75	61	29	楕円形		
					26	68	55	16	不整円形		
3	日ナル	37 140 117	0.00 × 0.00		27	57	50	12	円 形		
8	長方形	N-14°-W	3間×2間		28	99	80	37	楕円形		調査地区中央に位置し、検出された4棟の中
			5.3 × 4.9		29	85	82	24	方 形		で最も大形である。
					30	84	- 68	30	"	•	総柱式の建物で、掘り方は方形が主であり、
					31	94	85	28	不整方形		深い。柱痕が検出されたものは2段底を呈す。
					32	78	(54)	17	<i>"</i>		遺物は、P ₃₉ 埋土中層から須恵器坏が出土し
					33	78	68	81	円形		ている。廃絶直後に流れ込んだものと思われ
					34	120	90	44	不整方形		3.
				}	35 36	107	84	30	// +#1 [1] m/	-	
				}	37	104	70	36	楕円形		
					38	115 92	(87)	28	不整方形		
				}	39	98	78	34	# W		•
				}	40	116	96 102	40 31	方 形 円 形		
				ł	41	?	-	_			
					42		80	17	?		·
				}		65	(60)	11	不整方形		
				}	43	(105)	54	9	円形		
	Ì				-	(105)	72	26	不整円形		
					45	60	(100)	14	円 形		
4	阻士郎	N-84°-W	9 HB 🗸 1 HB	#F 10-01	46		(100)	11	不整方形		
*	攻万形	11-04: -W		桁 1.9~2.1	47	26	25	16	円形		調査地区南東に位置し側柱式である。
			$4.1 \times 2.5 (2.4)$	梁 2.4~2.5	48	29	28	14	"		掘り方は円形で、小さいがしっかりしていた。
		İ			49	84	28	25			遺物の出土はない。
				-	50	30	28	13			
					51	30	25	18	"		
	i				52	25	21	23	"		



第82図 建物址1・2



第83図 建物址3・4

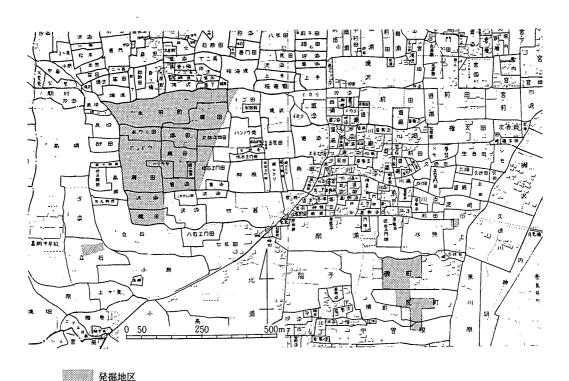
第5章 島立条里的遺構

第1節 調査の概要

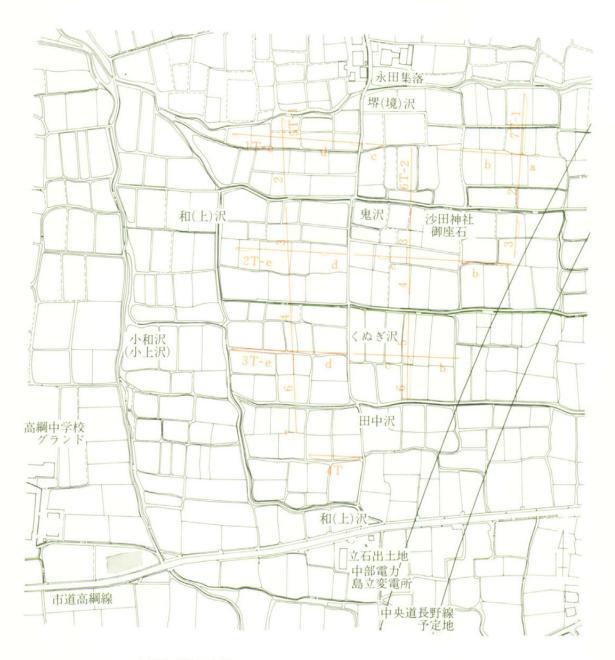
今回の調査は従来より研究者、地元の方々の間で条里遺構と目される一帯を調査した。用地が非常に広い為まず重機により深さ $1\,m$ 、幅 $1\,m$ 程の長いトレンチを設定した。トレンチは東西に $4\,a$ ($1\,\sim\,4$)南北に $3\,a$ ($5\,\sim\,7$)である。次に各トレンチの側面を細かく観察し、人為的な痕跡の確認と記録、遺物を採集、できれば遺構の性格をつかむ事に主力を注いた。

その結果住居址、土壙、ビット、溝などと思われる遺構の存在を認めた。これは計124にのぼり、 水田の下にはかなりの遺構の存在をうかがわせる。

遺物は総量でテン箱 1 ヶ分量である。小片が多くあえて分類すると古いものでは縄文土器から、 土師器、須恵器、陶器、磁器などがみられる。これらは縄文時代から近世の遺物であり、なかでも 量的に中心をなす遺物は 9 世紀から11世紀の様相を見せていた。



第84図 島立発掘地区 大字・小字界図



高綱中遺跡調査地

0	50	100m
L		

第85図 調査地の位置・トレンチ設定

調査した小字地名をみると南栗・北栗遺跡では"巾上、横町、荒町、中曽根"であり、すぐ東の奈良井川の氾濫をさけて、いわゆる巾上に居を構えたものと思われる。開発については近くに"水無"もあり"荒町"とともに荒蕪の地で開発は遅かったのではないか。

条里的遺構の調査地は"永田前、廣田、木ウリ田、塚田、太郎・次郎田、ドンドウ、一ツヲサ、藤十郎田、伝右衛門田、道添、沢田、鍵田"で水田を示している。特に"一ツヲサ"など数字の入るものは条里とも関わりがあるといわれるが、この地では近くに"二ツ長、十二長、八ツ長、一ノ坪、三ツ筬、四ツ筬、一ツ長"などがある。しかし"一ノ坪"以外は一枚の水田は小さく位置もとびとびで条里に関わる場所とは考えられない。調査地点は高綱北方で和沢と小和沢が分かれて南流し、その和沢がほぼ直角に"鍵田"で曲って東流する。これに並流する田中沢、くぬぎ沢、鬼沢、境沢が北側にあり、それぞれの間隔は100、80、90、100mと一坪の一辺を形づくる縦の線となっている。それらの地割は計画開田を示しているが、この範囲内では条里に関わる地名は"一ツヲサ、五反田"しかないので、地字のみでは条里はわからない。 (神沢昌二郎)

参考文献

「信設」第36巻第7号「島立条里の中間報告概要」 小穴芳美他

第2節 遺構と遺物

ここでは各トレンチの状態を細かく報告すべきであろうが、範囲が広い為局部的変化が大きく分層した土層は一つの目安にはなろうが、これのみで一概に述べる事はできない。又、トレンチによる断面観察だけで遺構を断定する事はかなり大胆である。

しかし、あえてここでは 4 m以上の落込みを住居址として把えた。これらは全部で16基あり遺物を含み、床面、焼土、カマドを検出できたものもある。(図86の "あ"~"こ")4 m以下のものは土壙、ピットになるものであろう。110基ありどのトレンチにも10基以上は見えている、3 トレンチ(3 T)には42基確認した。又、2 T-C、7 T-1 には焼土とともに骨を見る事ができる。墓壙なのであろうか。溝は砂質灰色系の土を含み、下面に多量の鉄分を沈澱させているものを把えた。一番大きなものは 5 T-1 北端にあり、トレンチ部分だけで11mある。北側にある境沢の旧河川であろう。又幸運にも"くぬぎ沢"を切り観察する事ができた(5 T-4)、ここでは北側にあった旧水路を認める事ができる。

・墨書か見える。他に5 1 ─ 4 から作日見の小月か1 点面工した。至町州以降のもの(i) こ心4/4 できまります。 注1 三村発氏御教示 (高桑俊雄)

参考文献「浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡、川田原条里的遺構・石川条里的遺構」長野市教委 長野市遺跡調査会 1983

第3節 小結

今回調査の対象地区は約29500m²であり、設定したトレンチ7本の総延長は1569.2mに達する。ここではその概要と問題を述べむすびとする。

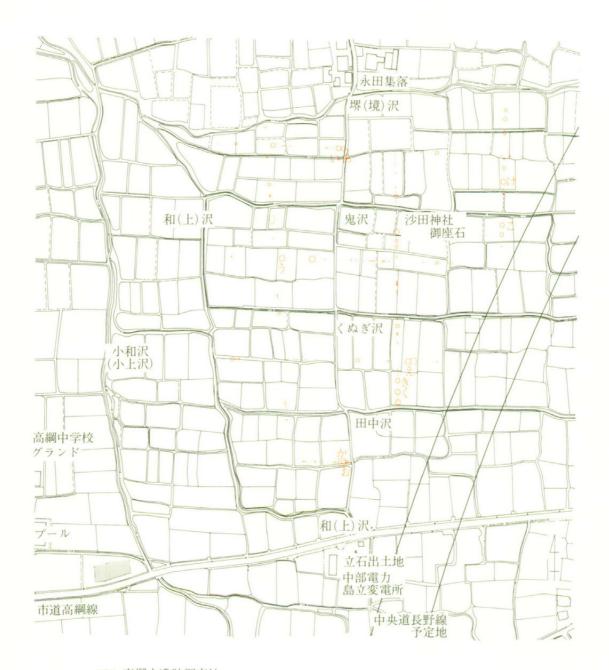
当地は島立地区の稲作適地として知られ、耕作者にとってもかなり耕土が深いものと信じられていた。しかしその結果は東に位置する南栗・北栗遺跡よりも浅いものであり、礫層までの深度は西の和沢側、北の境沢側で50cm、南側地区(6 T — 6)で80cm を測る程度である。

遺構には住居址、もしくは同じ規模の落込み16、土壙、ピットが110基、溝9本を検出した。今回特に注目した点に関しては3 T—e でII、或いはII + III 層下に粘質灰褐色土の薄い層を見ており、それが旧水田なのかも知れないが微視的な変化であり、面的に拡げていないため断定はし難く、遺物も皆無である。又、2 T—b ではIII + (II) 層上にこぶし大以上の礫を含む青灰色土のレンズ状を呈するベルトを認めた。現在の農道下にあり、ここからは付近で得られなかった縄文の土器片、土師器の境片等少量の遺物をみた。

しかし今回の発掘は時間的制約が厳しく、面的な発掘は行なう事ができず、又、現在使用中の水路、農道等は諸般の事情からトレンチにより切断する事が不可能であった。このことは上に掲げた遺構の形状のみならず、現在の水田に至るまでの歴史を解明する上でかなり不充分なものになってしまった点は否めない。 (高桑 俊雄)

表 8 出土土器観察表

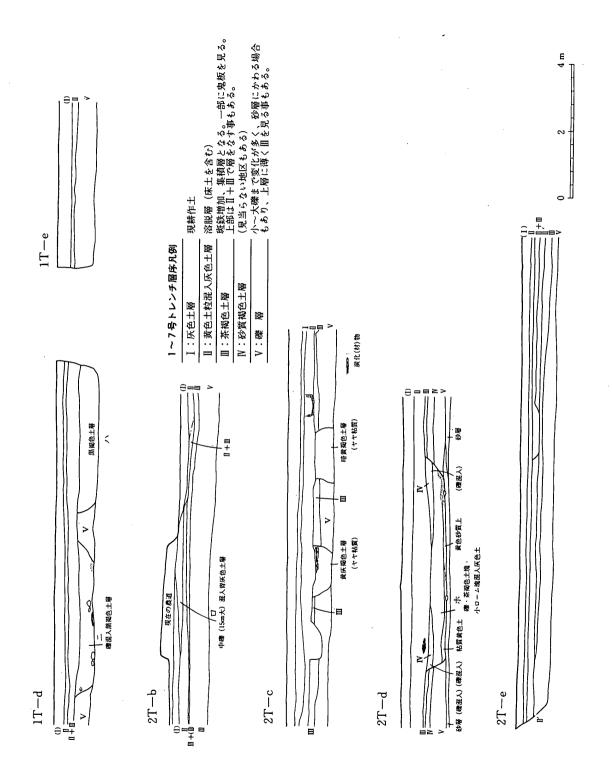
L				†	#	(#				
Ą	出土地点	種別	臨	, 8		į į	ונ	Ē	成	ฮ	舭
				#	ない		Ē ₹	Ξ.			
252	1 T - ^	土師器	觀		9.2		茶酪	靉	闘部外面ハケ目か・内面工具によるナデ		
253	"	須恵器	*		9.1		青 灰	部民	ロクロナデ,底部回転糸切り,付け高台のちョコナデ		
254	2 T – ¤	土師器	罄		5.5		蠗	Ħ	ナデ・付け高台のちョコナデ	氏	
255	3 T - 1	,	小形類	12.8	6.3	13.9	赤褐	赤	ロクロナデ,底部回転糸切り,弱部下半ヘラケズリか	中に陰石あり	ŀ
256	4 T - 0	須恵器	糊	14.0	I		黒灰~紫灰	黒灰~紫灰	ロクロナデ, 協能ヨコナデ		
257	"	"	"	16.3	1		草	民	ロクロナデ, 凝船ヨコナデ		
258	"	"	"	12.8	1			報	ロクロナデ、協能ヨコナデ		
259	(*	环	12.2	5.9	3.5	跃	民	ロクロナデ, 底部回転糸切り		
260	*	中島	魏		9.7		茶	韓	底部ヘラケズリ、弱部外面ハケ目・内面ナデ		
261	6 T - 3	海路	#	15.9	8.9	2.9	双	民	ロクロナゲ,底部ヘラケズリ,付け高台のちョコナデ		
262	6 "	土師器	"	13.4	4.4	4.4	茶	茶	ロクロナデ,底部回転糸切り		
263	"	"	"		5.0		"	*	ロクロナデ,底部回転糸切り		
264	"	*	强		6.9		韓	略	ロクロナデ、底部回転糸切り、付け高台のちョコナデ		
265	,,	"	級	28.7			茶	茶酪	歴的ナデ, 口縁的ョンナデ, 戯的ョンナデ		
566	7 T - ^	須鹿器	*		5.3		跃	跃	ロクロナデ・底部回転糸切り		
267	= "	"	"		7.9		, "	"	ロクロナデ・底部回転糸切りのち回転ヘラケスリ、付け高台のちョコナデ	- 歴史音り	



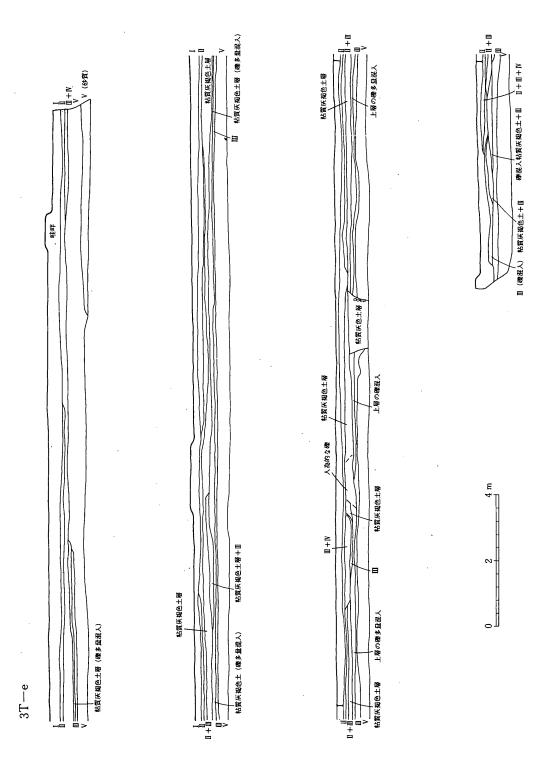
高綱中遺跡調査地

0	50	100n
		-

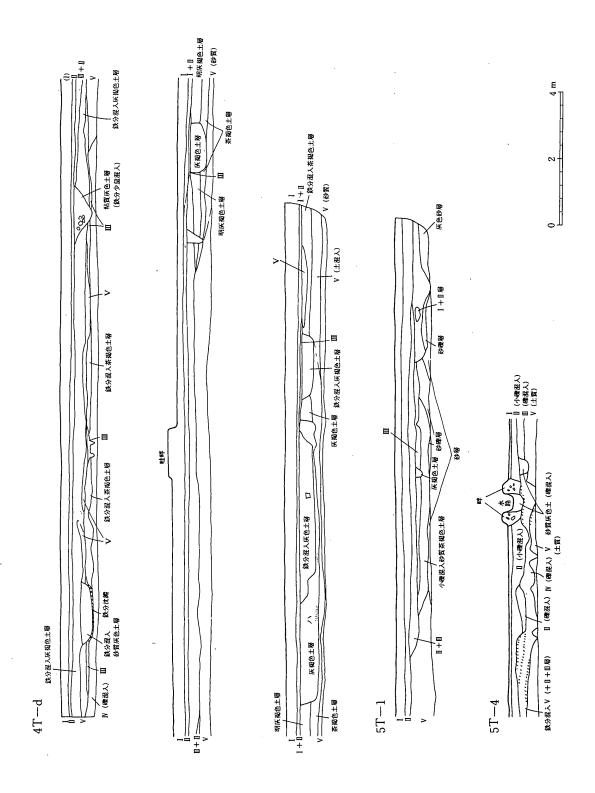
第86図 検 出 遺 構



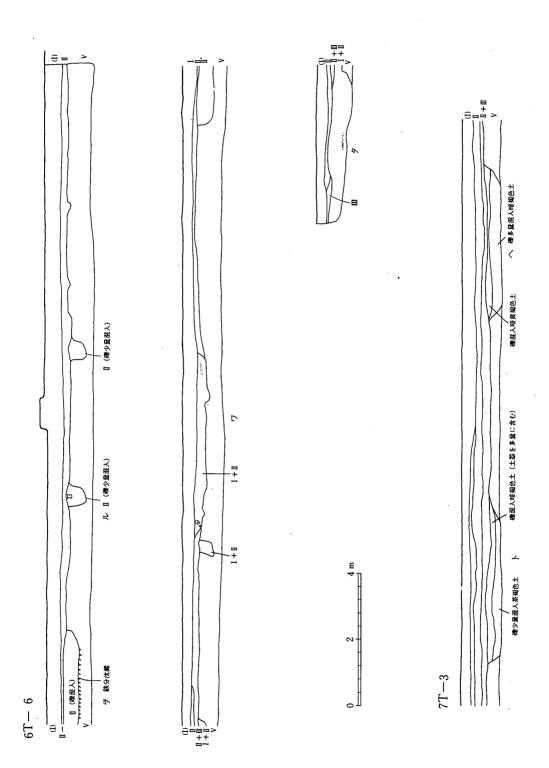
第87図 1・2トレンチ



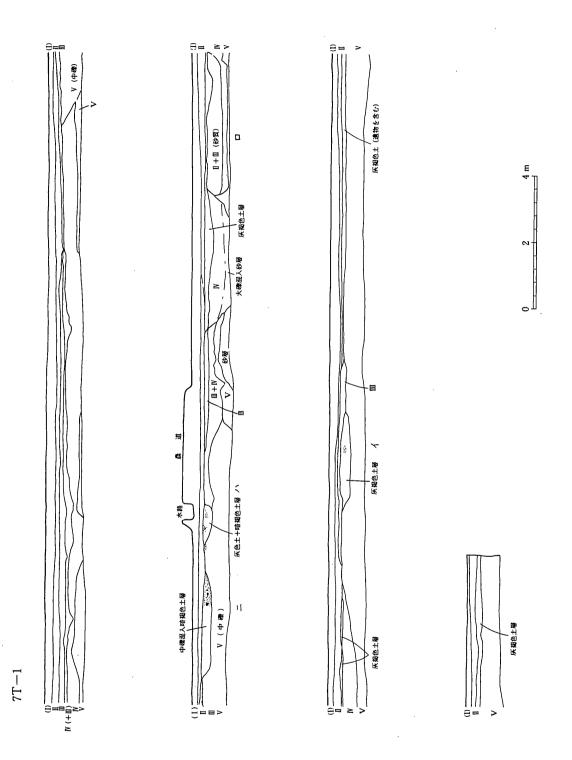
第88図 3 ト レ ン チ



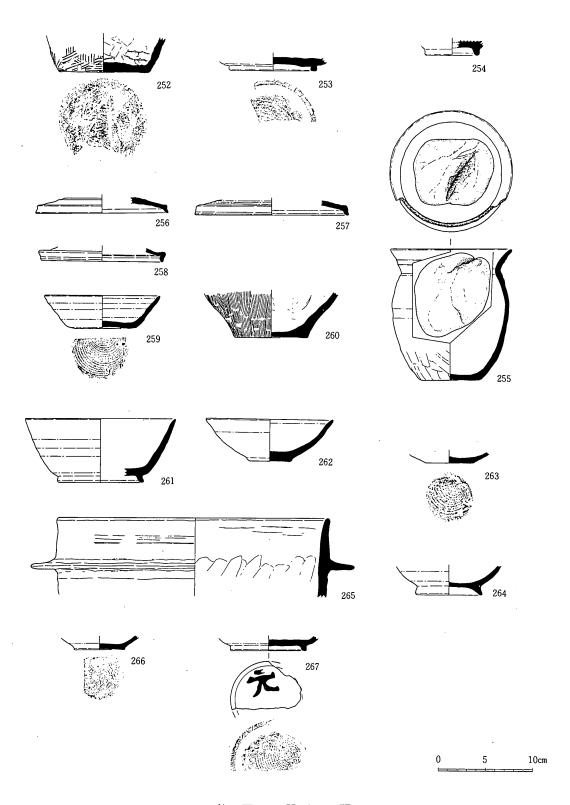
第89図 4・5トレンチ



第90図 6・7トレンチ



第91図 7 トレンチ



第92図 土器実測図

第6章 調査のまとめ

今次調査は各項記述のとおり、松本市内においては最大の発掘調査であった。それは調査面積も さることながら、数多くの住居址を検出したことと、永年条里的遺構として論究されている水田に 調査の手が入ったということである。

まず住居址についてみると、住居址は計96軒を検出し、そのうち全掘は72軒、他は半掘及び一部確認のみである。これらの時期は古墳時代から中世にわたるもので、松本市近在では昭和57年度塩尻市調査の吉田向井遺跡の85軒と必敵するものである。これらの住居址の中で特記すれば、第IV地区における第75号住居址であろう。本址は墨書の紙を出土した家で、壁面内側には10個の平板な石を土台石としてあり、他の家とは趣を異にしていた。住居址を平均的にみると規模は4.25×3.88mで、カマドの位置は東壁中央が60%、西壁は30%であった。年間を通じて多く吹く南風を避けたのではなかろうか。住居址の他には建物址が15軒、竪穴状遺構、土壙が計50数個所あり、また溝状遺構が居住地域の中にあったことも本遺跡の特徴と言えよう。

次に出土遺物については、土器は前段にもふれたように I ~ XIII 期に分類した。これは詳細な比較検討の結果得られたものではなく、観察により便宜上行ったものである。しかし一見してこれだけの時期差を読みとれるということは、それだけ良好な資料があったということでもあり、この分類をより確かなものにすることが、今後の課題として残されている。鉄器には 2 点の鋤頭と 3 点の鎌がある。これは当時の農耕を知る上で良い資料である。特筆されるものに紙の出土がある。これは第 3 章でふれているが、漆紙でなく、ただの紙が残っていた点に価値がある。これらの出土遺物を並べてみると、ある程度の生活の復元が可能となってくる。

条里的遺構については、和沢と境沢の間430m×300mの間を調査した。本遺構は条里的な地割りをもって、律令時代から奈良時代における計画開田の跡と考えられており、過去新村地区内において僅かに調査を行った以外、地下遺構を調査する機会がなかったものである。今回調査では前述のごとく総延長1570mのトレンチを縦横に入れた。その結果は16軒の住居址にあたり、また3Tの西部では水田址らしき存在を思わせる地層もみたが、時間的余裕がなく、地質専門家に充分みてもらえなかった。しかし、これら住居址の時期はほとんど平安時代になるものであり、しかもそれらは地表下59~70cmという深さにあって、その下層は厚い砂礫層であった。このことは本地点の水田開発は平安時代以降であることを明らかに示しており、今迄の考えよりも新しい時期に開発されたということになる。ただ残念ながら線としての調査しか行えず、面的に捉えることができなかった点、今後の調査に期待するものである。

次に地元の研究者らによって、旧極楽寺跡の調査をしたが、これは1600年頃山この島立の地にあっ

たと言われ、古文書にも記載のあるものであるが、調査中に出た話であり、工事の進捗と合せて調査体制の取組みなど、困難な問題があった。しかし工事に合せての調査ということで急拠行った結果、小和沢の末流と思われる旧水路と、僅かな土器片を検出したにすぎず、極楽寺そのものの遺構、遺物は見当らなかった。極楽寺調査は事前に本調査に組み入れることができず、対応がおくれたが、地元研究者、土地改良区等関係者の熱意と協力で無事終えることができたのは何よりであった。

最後に調査そのものについてふれてみたい。今回調査は総額1500万円で行なった。県営ほ場整備事業は中央道長野線建設工事に合せて急ピッチで進んでおり、その為発掘調査はその体制のいかんにかかわらず、待ったなしで行なわねばならず、調査期間も耕作と工事の合い間という短期間に行なり状況下にある。その中において遺跡破壊を少しでも守りたいと調査面積を拡げて調査を行なっているが、それは調査者自身の首をしめるものであり、人間・時間・費用の不足を調査者らが身を削って埋め合せねばならないという矛盾を含んでいる。報告書も補助事業という枠の中で年度内発刊が義務づけられており、遺跡が大きければ大きい程、学術とは程遠い工事記録になりがちであり、真の記録保存にはなり得ないでいる。ただ一るの望みは発掘した全容を示すことができなくても、その現場における記録は確実にとってあり、また出土遺物を保管しているので、次代の考古学研究者にその資料を提供し、今回究明できなかったものを解明する手がかりを残しているという点である。

本調査は夏期・秋期と延4ヶ月半にわたり行われ、その整理、報告書づくりと徹夜に及ぶ作業で、今ようやく終ろうとしている。この間調査にご指導いただいた先生方、調査員の方々、作業にご協力いただいた方々、また地元の公民館はじめ関係の方々、土地改良区の方々にあつくお礼申し上げ、昨年度に続いて、島立の地の歴史が徐々に解明されつつあることを喜びとしたい。(神沢昌二郎)

(1)信府統記による



I地区



I地区



Ⅱ地区



Ⅲ地区



IV 地区



V 地区



VI 地区

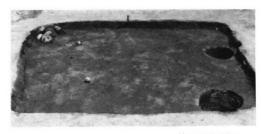


I 地区 電探調査

第1図版 南栗・北栗遺跡調査地風景



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第3号住居址カマド



第2号住居址カマド



第4号住居址



第 4 号住居址



第4号住居址カマド



第5号住居址



第6号住居址

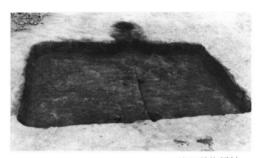


第7号住居址

第2図版 南栗・北栗遺跡・遺構



第8・9号住居址 溝3



第10号住居址



第11号住居址



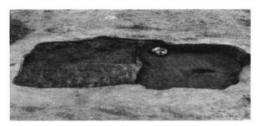
第12号住居址



第13号住居址



第14・15・16・53・55号住居址



第18・19号住居址



第20·21号住居址



第22・23号住居址 溝 1



第24号住居址



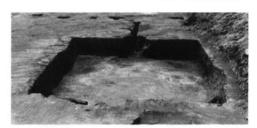
第25号住居址



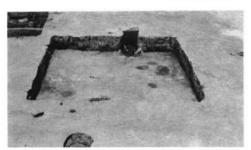
第26・28号住居址



第31号住居址



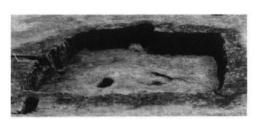
第32号住居址



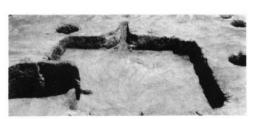
第33号住居址



第33号住居址カマド



第34号住居址



第35号住居址



第36号住居址



第37号住居址

第4回版 南栗・北栗遺跡・遺構



第38号住居址



第40・41・42・54号住居址



第48号住居址



第49号住居址



第51・52号住居址



第53号住居址



第55号住居址



第53号住居址 カマド

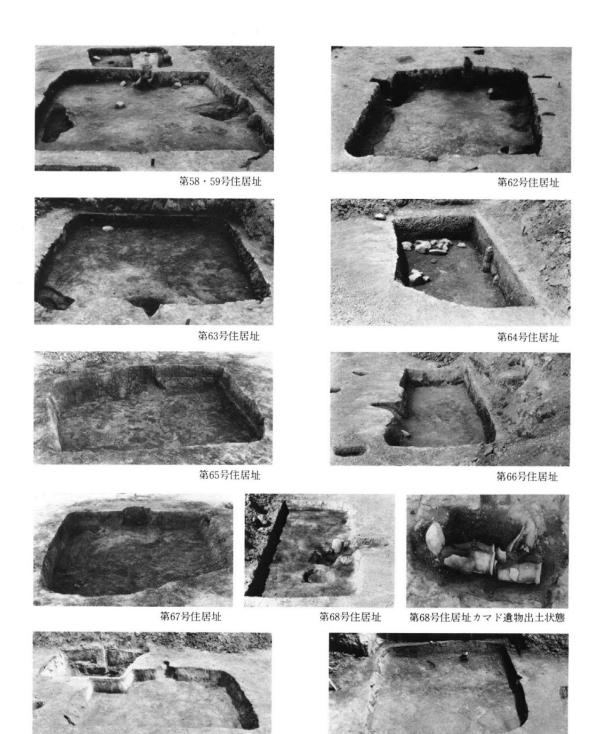


第56号住居址



第57号住居址

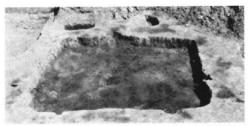
第5図版 南栗・北栗遺跡・遺構



第6図版 南栗・北栗遺跡・遺構

第70号住居址

竪穴状遺構17・第69号住居址



第71号住居址



第72号住居址



第74号住居址



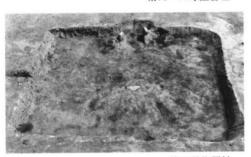
第75号住居址



第75・76号住居址



第77号住居址



第78号住居址



第79·80号住居址

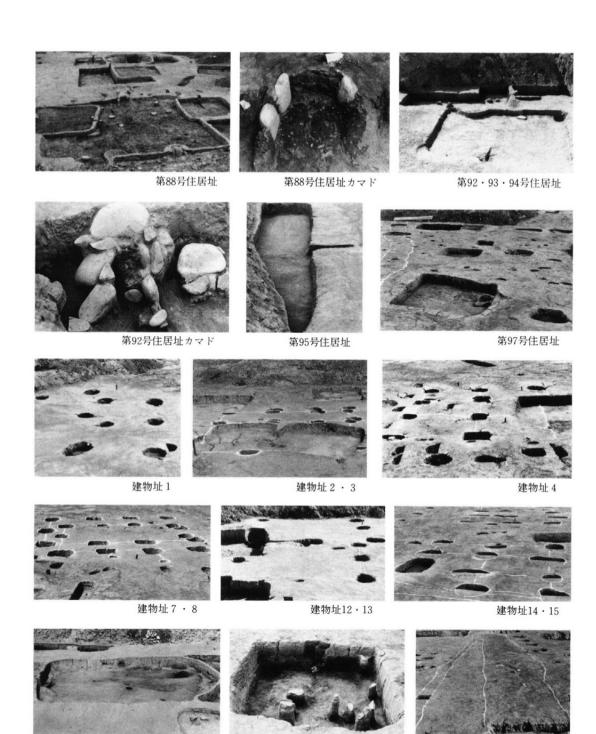


第83・84号住居址



第84・85・89号住居址

第7回版 南栗・北栗遺跡・遺構



第8回版 南栗・北栗遺跡・遺構

竪穴状遺構13

竪穴状遺構29

溝8 · 9



高綱中学校遺跡 排土作業



高綱中学校遺跡 遺構掘下作業



高綱中学校遺跡 建物址1



島立条里的遺構 作業風景



島立条里的遺構 遠 景



島立条里的遺構 6トレンチ北側より



島立条里的遺構 1トレンチー4 "くぬぎ沢"



島立条里的遺構 5トレンチール



島立条里的遺構 遺構切合状態



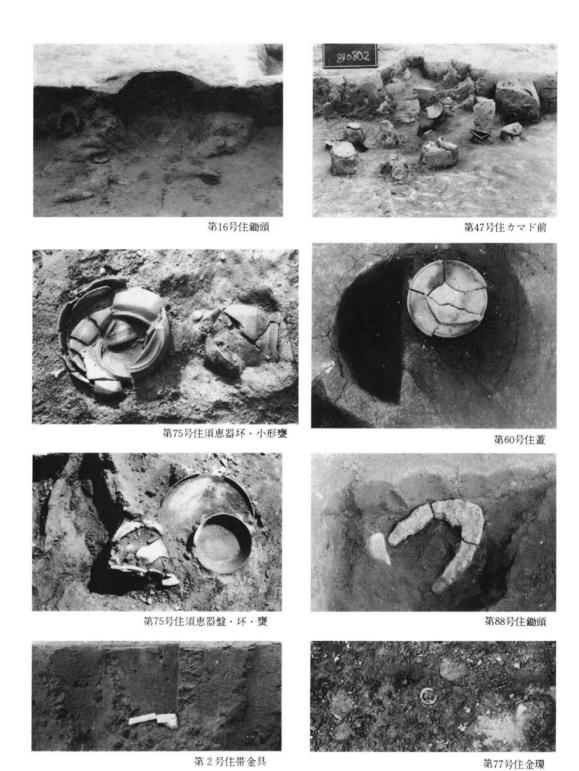
島立条里的遺構 住居址検出



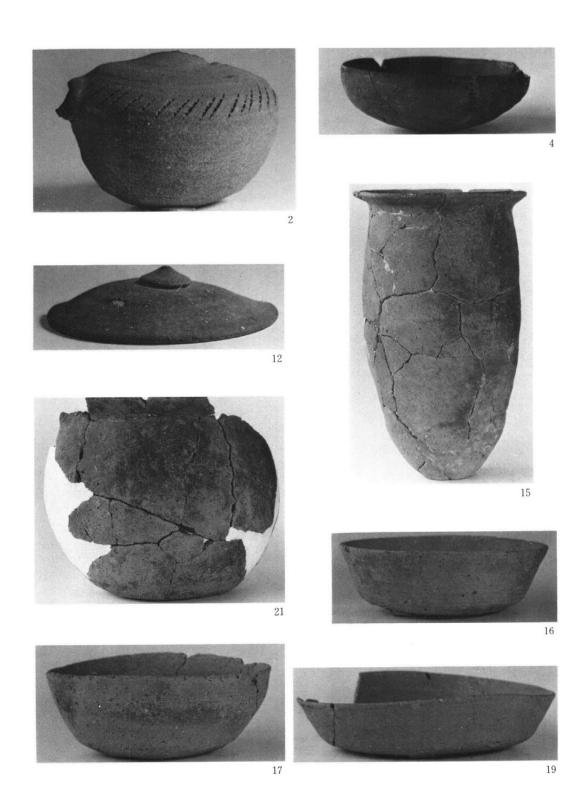
島立条里的遺構 5トレンチー7



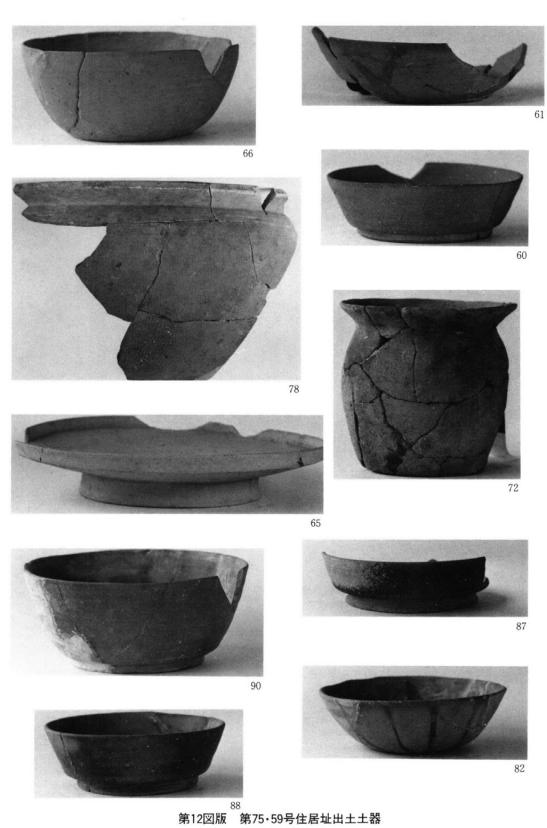
島立条里的遺構 7トレンチーd

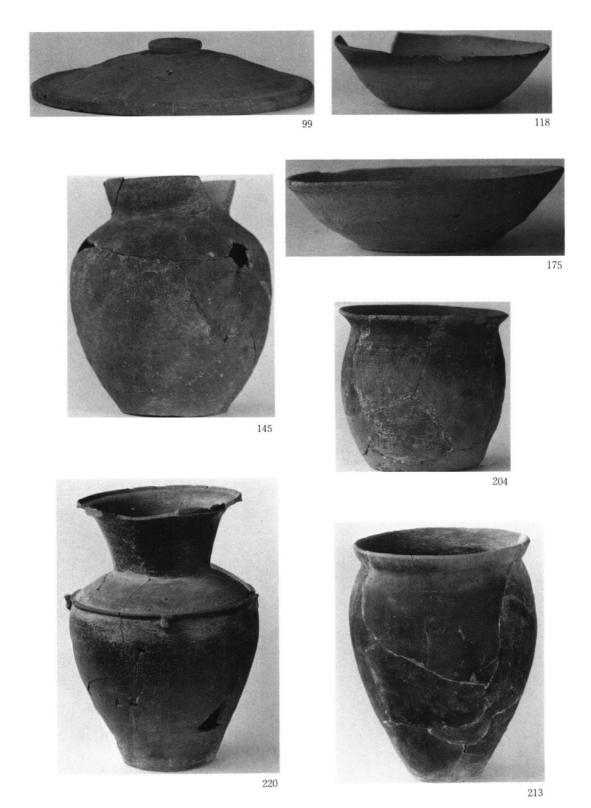


第10図版 南栗・北栗遺跡・遺物出土状態

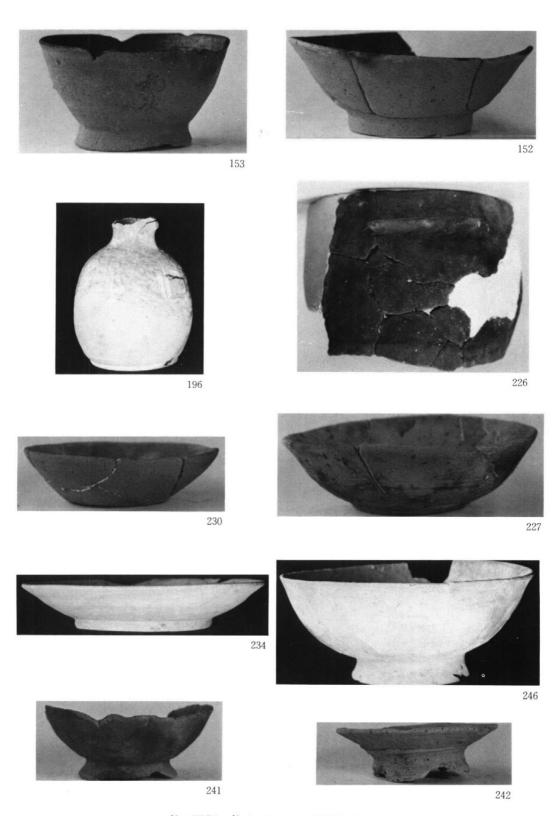


第11図版 第37・38・68・11号住居址出土土器

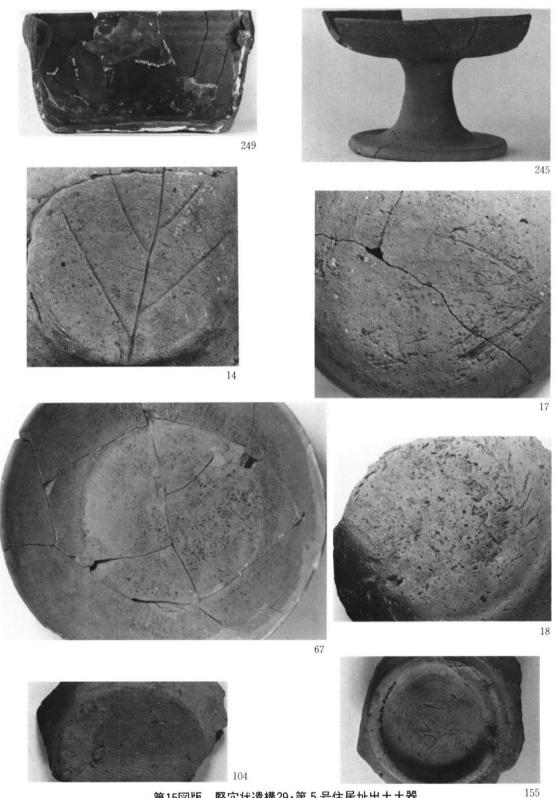




第13回版 第60·61·47·4号住居址出土土器



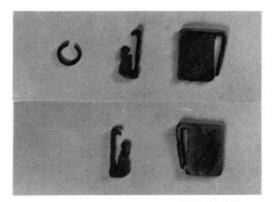
第14図版 第4・2・3・92号住居址出土土器



第15図版 竪穴状遺構29・第5号住居址出土土器 土器細部写真



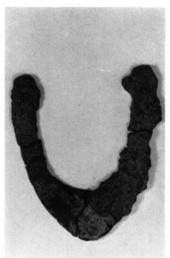
第75号住漆付着



金環・帯金具



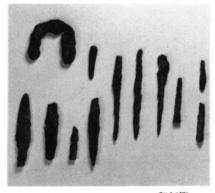
第88号住鋤頭



第16号住鋤頭



鎌・刀子



和釘等



紡錘車・土錘



硯

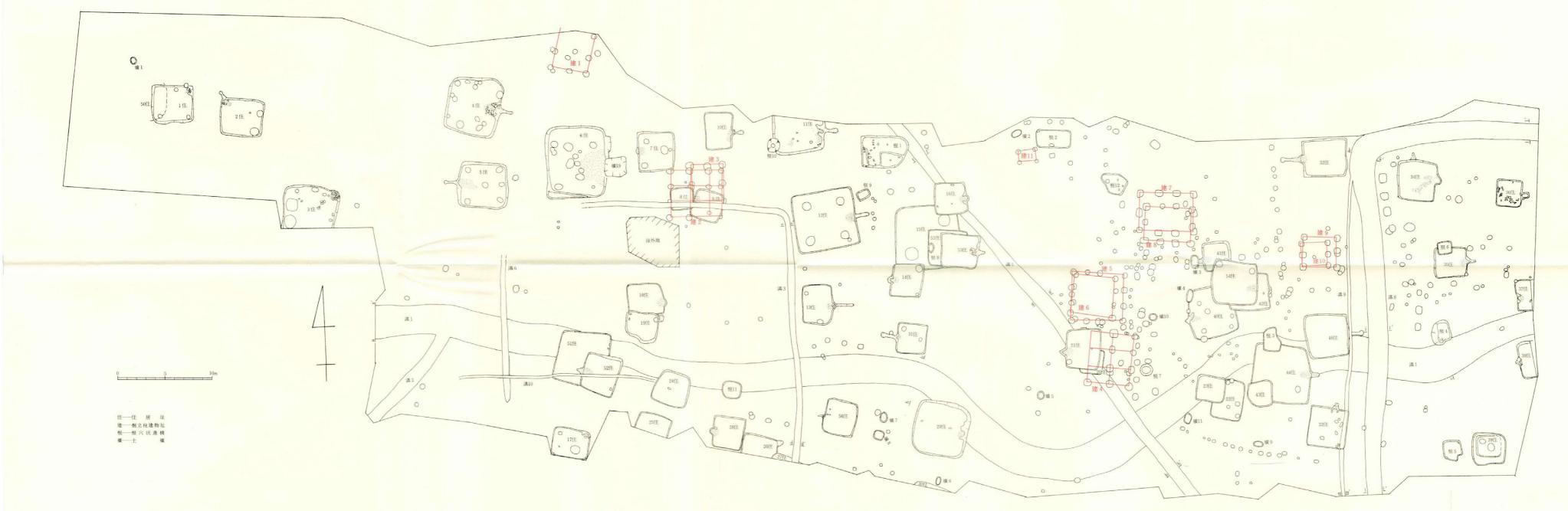
第16図版 土器・鉄器・土製品・石製品

松本市文化財調査報告No.35

松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条里的遺構 昭和60年3月20日印刷

昭和60年3月30日発行

発行 長野県中信土地改良事務所 松 本 市 教 育 委 員 会印刷 電 算 印 刷 株 式 会 社





遺構配置図2 (I~VI地区)

